

1 . 調査の目的と背景

(1) レッドデータブックの役割と国の対応

野生生物を人為的に絶滅させないためには、絶滅のおそれのある種を的確に把握し、一般への理解を広める必要がある。

レッドデータブックとは、野生生物の種を絶滅のおそれのある程度（カテゴリー）に応じてランク付けをし、その生息・生育状況などについて解説した資料集であり、国際的には 1966 年（昭和 41 年）に国際自然保護連合（IUCN）から初めて発行された。

我が国では、植物について平成元年に、（財）世界自然保護基金日本委員会と（財）日本自然保護協会の共同編集により「我が国における保護上重要な植物種の現状」が発行されたのが最初である。

環境省は、「我が国の絶滅のおそれのある野生生物」として、平成 3 年度に動物編を発行したが、生息状況や生息環境の変化に関する最新の知見・情報等を踏まえ、また、1994 年（平成 6 年）に IUCN で採択された新しいカテゴリーの考え方にに基づき、レッドデータブックの見直しを行う必要が生じた。

このため、環境省は平成 7 年度から、哺乳類、鳥類といった分類群ごとに専門家による検討会を設け改訂作業に着手し、平成 12 年 2 月の「爬虫類・両生類」から、順次改訂版レッドデータブックとしてとりまとめ、発行してきた。

また、平成 14 年度より、生息状況や生息環境の変化等最新の知見に基づいて検討を行い、平成 18 年 12 月には、鳥類、爬虫類、両生類及びその他無脊椎動物の 4 分類群について、平成 19 年 8 月には、残りの哺乳類、汽水・淡水魚類、昆虫類、貝類、植物 I 及び植物 II の 6 分類群について、新たなレッドリストを公表した。

レッドデータブックは、生物学的観点から個々の種の絶滅の危険度を評価し選定したものであり、規制等の法律上の効果を持つものではないが、絶滅のおそれのある野生生物の保護を進めていくための基礎的な資料として広く普及を図り、野生生物への関心を高めるとともに、各種開発事業の環境影響評価などに活用され、自然環境保全への配慮が促進されることを目的としている。

また、レッドデータブックの掲載種の中でも特に保護の優先度の高い種については、さらに調査を進めた上で必要に応じ、「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）」に基づく国内希少野生動植物種に指定し保護を図っていくこととしている。

環境省における改訂作業により、絶滅のおそれのある生物の種数は、今回のリスト改訂で動物では 1,002 に、植物では 2,153 となっており、絶滅のおそれがある生物の種数が増加している。

この理由としては、生息・生育環境の悪化などが大きいと考えられるものの、分類学上の整理が進んだり知見が充実したりしたことにより評価対象種数自体が増加したことも事実であることから、今後とも 5～10 年ごとに見直し作業を行い、最新の知見により改訂していくことが必要とされている。

(2) 愛知県版レッドデータブックの意義

野生生物は、各地域の自然環境特性に適応して生育していることから、これらの野生生物を的確に保全し生物多様性の確保を図るためには、全国的な情報と併せ、県等の行政区画単位で地域特性ごとに情報整理を行う必要がある。

環境省作成のレッドデータブック（レッドリスト）は、全国の生息・生育状況を基準として「絶滅のおそれの程度」を評価しているが、本県の場合には県内の状況に併せ、愛知県としての環境特性や開発圧の強度などの地域特性を考慮して、絶滅のおそれを評価した。

また、レッドデータブックでは、絶滅の危険性に加え保護上の優先度も示す必要があるが、絶滅の危険度と保護上の優先度は、特定の地域を対象とした場合には必ずしも一致しない。

例えば、ニホンザルは、世界的に見れば地球の北限で生息するサルとして希少であるが、国内では農業被害をもたらしており、有害獣として駆除される場合もある。また、全国的には希少種であるチュウサギ（鳥類、国リスト：準絶滅危惧）は本県では対象外と判定されている。逆に全国的には絶滅のおそれは少ないとして環境省のレッドリストには記載されていないコノハズク（鳥類）は、本県の生息状況から絶滅のおそれの最も高い絶滅危惧ⅠA類と判定されている。

さらに、選定基準の本県の特徴としては、生息環境の減少率や、開発や捕獲などの人為的圧力による種の絶滅の危険性の評価に加え、本県における生息状況が種の存続に影響を持つと考えられる種等について「地域固有性」の評価を加えており、世界的に見てもこの地域の生息状況が重要な意義を持つ種の保存を積極的に図ることとし、保護の優先度を加味した。

環境省のレッドデータブックでは、日本が島国であり地理的にある程度孤立していることもあって、このような地域性は考慮しないという方針で作業が進められたが、隣接地と地続きの愛知県のような地域を対象とする場合には、絶滅の危険度と保護上の優先度の間のずれは無視できない問題である。

例えば、渡り鳥であるシギ科のように愛知県では比較的まとまってみられる種でも、本県に限られた繁殖地や越冬地であることから、飛来数の減少はその種全体の存続に大きな影響を与えることが予想され、保護上の優先度は高くなる。

また、本県の特徴的環境である湿地に生息するヒメタイコウチ（昆虫類、国はリスト外、県リスト：準絶滅危惧）や、我が国での分布域の東端であるオオサンショウウオ（両生類、国リスト：絶滅危惧Ⅱ類、県リスト：絶滅危惧ⅠB類）なども本県での保護の優先度は国全体で見た場合より高い。

以上のとおり愛知県版レッドデータブックは、地域的情実が異なる中での野生生物のきめ細かい生息状況を把握し、その情報を広く県民へ周知し本県固有の自然環境保全への配慮を促す等の役割を担うものである。

愛知県版レッドデータブックは平成13年度にとりまとめを行ったが、その後、全国的に野生生物種の減少や生態系への影響が指摘されていること、野生生物の生息・生育環境に影響を及ぼす土地の改変などの様々な状況が変化していることなどから、平成18年度から、専門家で構成する「愛知県希少野生動植物リスト検討会」を中心に、県民からも意見を求め、現地調査を行うなど見直し作業を進め、さらに平成20年度には専門家による「第二次レッドデータブックあいち検討会」において内容の検討を行い「レッドデータブックあいち2009動物編」としてとりまとめた。

2 . 調査の概要

(1) 調査対象

哺乳類

哺乳類の種を単位とし、標本あるいは文献等により、愛知県に確実に生息している（いた）と判断された種のうち、意図的・非意図的にかかわらず県内に移入されたことが明らかな種及び一過性の確認種を除く種を調査対象とした。

調査対象範囲は、愛知県内（島嶼部を含む）の陸上及び陸水中とした。また、沿岸の海域、干潟、河口部も含むものとした。

検討対象期間は縄文時代草創期（約1万年前）から現在までとし、後期更新世以前の化石として産出した種は検討対象としなかった。

鳥 類

鳥類の種を単位とし、文献、調査記録、観察記録等により、愛知県に生息している（いた）と判断された種のうち、意図的・非意図的にかかわらず県内に移入された種及び不定期または偶発的に記録される種並びに一部の外洋性の種を除く種を調査対象とした。

調査の範囲は、愛知県内（島嶼部を含む）の陸上及び陸水中並びに沿岸の海域、干潟、河口部とした。

爬虫類

爬虫類の種を単位とし、標本あるいは文献等により、愛知県に確実に生息している（いた）と判断された種のうち、意図的・非意図的にかかわらず県内に移入された種を除く種を調査対象とした。

調査対象範囲は、愛知県内（島嶼部を含む）の陸上及び陸水中とした。なお、海域に生息するウミヘビ類については、明確な記録が少なく除外した。

両生類

両生類の種（亜種を含む）を単位とし、標本あるいは文献等により、愛知県に確実に生息している（いた）と判断された種のうち、意図的・非意図的にかかわらず県内に移入された種を除く種を調査対象とした。

調査対象範囲は、愛知県内（島嶼部を含む）の陸上及び陸水中とした。

淡水魚類

淡水魚類の種（亜種を含む）を単位とし、標本により、愛知県に確実に生息している（いた）と判断された種のうち、意図的・非意図的にかかわらず県内に移入された魚類を除く種を調査対象とした。

調査対象範囲は、愛知県内（島嶼部を除く）の陸水中（河川、湖沼等）とした。

なお、今回は汽水域に生息する種は対象外とした。

昆虫類

昆虫類の種（亜種を含む）を単位とし、標本あるいは文献等により、愛知県に確実に生息している（いた）と判断された種のうち、意図的・非意図的にかかわらず県内に移入された種及び一過性

の確認種を除く種を調査対象とした。

調査対象範囲は、愛知県内（島嶼部を含む）の陸上及び陸水中とした。また、沿岸の浅海域、干潟、河口部も含むものとした。

クモ類

クモ類の種を単位とし、標本あるいは文献等により、愛知県に確実に生息している（いた）と判断された種のうち、意図的・非意図的にかかわらず県内に移入された種を除く種を調査対象とした。

調査対象範囲は、愛知県内（島嶼部を含む）の陸上及び陸水中とした。また、沿岸の浅海域、干潟、河口部も含むものとした。

貝類

平成 14 年発行の「レッドデータブックあいち動物編」（以下、「レッドデータブックあいち 2002 動物編」という。）作成着手時点では各県単位のレッドデータブックに海洋生物、海産貝類を対象として扱っているレッドデータブックは非常に少なかった。これは、地方版レッドデータブックの雛形となることの多い環境省のレッドデータブックに海洋生物が全く含まれていないこと、専門家の不足と海洋生物の同定や現状把握の難しさに起因していると考えられた。

和田ほか（1996）によって干潟域の底生生物を対象とした現状が報告され、海産貝類の腹足綱、二枚貝綱が網羅的にリストアップされ 340 種もの絶滅種、絶滅危惧種が掲載された。同書によって初めて日本の内湾を中心とした浅海域に生息する貝類の危機的状況が広く認識された（Yamashita et al.,1997；山下,2000；木村妙子,2000）。その後、各県版レッドデータブックも海洋生物、海産貝類を対象として扱うものが多くなった。

愛知県は日本有数の広大な内湾域である伊勢湾、三河湾を擁しており、前回から愛知県版レッドデータブックでは内湾域の海産貝類を対象としている（愛知県,2002）。その後、環境省も見直し作業で塩性湿地等に生息する貝類がレッドリストに含まれたが、依然として干潟、潮下帯に生息する貝類は対象外である（環境省,2007）。

本書の調査対象及び調査対象範囲について、生息場所ごとに以下に記述する。

○ 陸産貝類

愛知県の陸産貝類（天野,1966）、愛知の動物（愛知県,1962）、愛知の動物（陸産貝類）（野々部・高桑・原田,1984）等を基礎として愛知県貝類研究会の会員によって既産地及び植生等の自然環境が保全されている場所について現地調査を実施し、その結果生息が確認された 22 科 155 種のうち移入種（5 種）を除いた 150 種を対象とした。

○ 淡水産貝類

木村（1994）をもとにして愛知県に確実に生息している、もしくは生息していた記録がある 38 種のうち移入種であるスクミリンゴガイ（通称ジャンボタニシ）、ヌノメカワニナ、ヒメモノアラガイ、ハブタエモノアラガイ、サカマキガイの 5 種及び新たに愛知県への移入が確認されたウスイロオカチグサ（木村,2005）、カワヒバリガイ（白金,2005；木村,2006）、タイワンシジミ（原田,2000）の 3 種を除いた 30 種を対象とした。

○ 内湾産貝類（海産貝類）

内湾域と言っても様々な生息場所が含まれている。本書では内湾域を河口域のアシ原湿地、干潟、潮下帯に区分する。

・アシ原湿地：内湾奥の河口域の中潮線付近より上部に発達したアシ原群落内の干潟と後背湿地を指し、よく保存されたアシ原湿地では塩湖、感潮クリークとアシ原より上部の陸上植生など多様な生息場所に恵まれる。

・干潟：河口域の河川内にできる干潟で河川の堤防に沿って発達する前浜干潟と河口域の海に面した部分に海岸線と平行に広がる前浜干潟を含む。

・潮下帯：本書では干潟より深く、水深 20m 程度より浅い部分の海底を指す。本書では砂質、泥質など軟らかい底質の海底を主に調査した。干潮時でも干上がることはないので直接調査するには潜水、ドレッジなどの特殊な方法が必要である。

なお、これらの生息場所の定義については秋山・松田 (1974)、水産庁・水産資源保護協会 (1988)、木村・木村 (1999) に準じ、潮下帯の最大水深については本書で新たに定義した。

上述の生息場所は連続的に立地するが、各生息場所にはその生息場所のみ特有な貝類も多い。アシ原湿地の貝類は木村・木村 (1999) によると愛知県には 25 種の貝類が生息している。しかし、アシ原湿地以外の生息場所については愛知県全体を総合的にまとめた信頼性の高い報告がないので正確な種数は不明である。三重県産貝類目録 (松本, 1979)、三河湾湾口部の貝類相 (木村, 1995, 1996) および希少野生動植物実態調査の現地調査として行った伊勢湾および三河湾のドレッジ調査の結果 (木村, 2000)、さらに 2007 年、2008 年、知多半島沖の伊勢湾の合計 30 回に及ぶドレッジ調査の結果をもとにして考えると、干潟・潮下帯の 2 つの生息環境をあわせて 350 種以上の貝類の生息が推定される。その中には、シマメノウフネガイ、ムラサキイガイ、ミドリイガイ、コウロエンカワヒバリガイ、ウスカラシオツガイ (木村, 2001; 木村ほか, 2005) の 5 種の移入種が確認されており、これらは調査対象から除外した。

(2) 調査体制

第二次レッドリスト作成

第二次レッドリスト作成（第一次レッドリストの見直し）に当たっては、平成 18 年度に野生動植物に関する専門の学識者を中心とした「愛知県希少野生動植物リスト検討会」を設置し、調査に関する事項として、調査の進め方、調査結果のデータベース化等を、レッドリスト作成に関する事項として、評価方法、評価結果等を検討した。

実際の調査及びレッドリスト作成に関する作業は、各分類群毎に実施し、検討会において調査・作業状況を報告するとともに、分類群間での連絡調整を行った。

検討会の体制及び委員は表 1 のとおりである。

表 1 愛知県希少野生動植物リスト検討会（敬称略）

専門分野等	委員	任期
維管束植物	芹沢俊介（愛知教育大学教授）	H18.7～H20.3
〃	村松正雄（瀬戸市立水無瀬中学校教諭）	〃
蕨類	岩月善之助（財団法人服部植物研究所長）	〃
苔類	山田耕作（元神宮司庁嘱託）	〃
哺乳類	子安和弘（愛知学院大学講師）	H18.7～H20.3
〃	織田銃一（名古屋大学大学院生命農学研究科教授）	〃
鳥類	高橋伸夫（愛知県野鳥保護連絡協議会調査部長）	〃
両生類・は虫類	大竹 勝（犬山市環境審議会委員）	〃
淡水魚類	駒田格知（名古屋女子大学教授）	〃
昆虫類	佐藤正孝（名古屋女子大学名誉教授）（故人）	H18.7～H18.8
〃	間野隆裕（豊田市矢作川研究所総括研究員）	H18.7～H20.3
〃	田中 蕃（名城大学特任教授）（故人）	H18.9～H19.5
〃	安藤 尚（元愛知県自然環境審議会専門調査員）	H19.7～H20.3
クモ類	緒方清人（日本蜘蛛学会評議員）	H18.7～H20.3
〃	須賀瑛文（日本蜘蛛学会会員）	〃
貝類	木村昭一（日本貝類学会評議員）	〃
〃	原田一夫（元愛知県自然環境審議会専門調査員）	〃
天然記念物	石川 裕（愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室長）	H18.7～H19.3
〃	村上恵美子（愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室長）	H19.4～H20.3

「レッドデータブックあいち 2009」作成

「レッドデータブックあいち 2009 動物編」及び「レッドデータブックあいち 2009 植物編」の作成に当たっては、平成 20 年度に野生動植物に関する専門の学識者を中心とした「第二次レッドデータブックあいち検討会」を設置し、レッドデータブック作成に関する事項として、必要な情報の収集・整理・記載内容・構成等を検討した。

実際のレッドデータブック作成に関する作業は、各分類群毎に実施し、検討会において作業状況を報告するとともに、分類群間での連絡調整を行った。

検討会の体制及び委員は表 2 のとおりである。

表2 第二次レッドデータブックあいち検討会（敬称略）

専門分野等	委員	任期
維管束植物	芹沢俊介（愛知教育大学教授）	H20.4～H21.3
〃	村松正雄（瀬戸市立水無瀬中学校教諭）	〃
蕨類	岩月善之助（財団法人服部植物研究所長）	〃
苔類	山田耕作（元神宮司庁嘱託）	〃
哺乳類	子安和弘（愛知学院大学講師）	H20.4～H21.3
〃	織田銃一（名古屋大学大学院生命農学研究科教授）	〃
鳥類	高橋伸夫（愛知県野鳥保護連絡協議会調査部長）	〃
両生類・は虫類	大竹 勝（犬山市環境審議会委員）	〃
淡水魚類	駒田格知（名古屋女子大学教授）	〃
昆虫類	間野隆裕（豊田市矢作川研究所総括研究員）	〃
〃	安藤 尚（元愛知県自然環境審議会専門調査員）	〃
クモ類	緒方清人（日本蜘蛛学会評議員）	〃
〃	須賀瑛文（日本蜘蛛学会会員）	〃
貝類	木村昭一（日本貝類学会会員）	〃
天然記念物	村上恵美子（愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室長）	H20.4～H21.3

3 . 調査内容

(1) 調査方法

調査は、平成 18 年度から平成 20 年度にかけて、各分類群毎に以下の方法により実施した。

哺乳類

調査対象種について、以下の 3 方法により生息状況の把握を行った。なお、調査結果の記録にあたっては、データベース化を考慮し、所定の調査票等に記入する方式とした。

- ・文献調査

既存の文献を収集し、生息場所、確認時期等を調査した。

- ・標本調査

既存の標本に関する情報を収集し、生息場所、確認時期等を調査するとともに、必要に応じて未同定標本の同定を行った。

- ・現地調査

現地踏査を行い、生息状況を調査するとともに、必要に応じて文献調査及び標本調査で把握した既知産地の現状についても調査した。

鳥 類

調査対象種について、以下の方法により生息状況の把握を行った。

- ・文献調査

調査対象種について、既存の文献、調査記録、観察記録等を収集し、記録年月日、生息場所、個体数等の整理を行った。

- ・現地調査

文献調査および情報収集をした中で、情報が不足している種や地域等について、個別に現地を踏査した。

爬虫類

調査対象種について、以下の 3 方法により生息状況の把握を行った。なお、調査結果の記録にあたっては、データベース化を考慮し、所定の調査票等に記入する方式とした。

- ・文献調査

既存の文献を収集し、生息場所、確認時期等を調査した。

- ・標本調査

既存の標本に関する情報を収集し、生息場所、確認時期等を調査するとともに、必要に応じて未同定標本の同定を行った。

- ・現地調査

現地踏査を行い、生息状況を調査するとともに、必要に応じて文献調査及び標本調査で把握した既知産地の現状についても調査した。

両生類

調査対象種について、以下の 3 方法により生息状況の把握を行った。なお、調査結果の記録にあたっては、データベース化を考慮し、所定の調査票等に記入する方式とした。

- ・文献調査

既存の文献を収集し、生息場所、確認時期等を調査した。

- ・標本調査

既存の標本に関する情報を収集し、生息場所、確認時期等を調査するとともに、必要に応じて未同定標本の同定を行った。

- ・現地調査

現地踏査を行い、生息状況を調査するとともに、必要に応じて文献調査及び標本調査で把握した既知産地の現状についても調査した。

淡水魚類

調査対象種について、以下の 3 方法により生息状況の把握を行った。なお、調査結果の記録にあたっては、データベース化を考慮し、所定の調査票等に記入する方式とした。

- ・文献調査

既存の文献を収集し、生息場所、確認時期、調査人等を調査した。

- ・標本調査

既存の標本に関する情報を収集し、生息場所、確認時期等を調査するとともに、必要に応じて未同定標本の同定を行った。

- ・現地調査

現地踏査を行い、生息状況を調査するとともに、必要に応じて文献調査及び標本調査で把握した既知産地の現状についても確認・調査した。

昆虫類

調査対象種について、以下の 3 方法により生息状況の把握を行った。なお、調査結果の記録にあたっては、データベース化を考慮し、所定の調査票等に記入する方式とした。

- ・文献調査

既存の文献を収集し、生息場所、確認時期等を調査した。

- ・標本調査

既存の標本に関する情報を収集し、生息場所、確認時期等を調査するとともに、必要に応じて未同定標本の同定を行った。

- ・現地調査

現地踏査を行い、生息状況を調査するとともに、必要に応じて文献調査及び標本調査で把握した既知産地の現状についても調査した。

クモ類

調査対象種について、以下の 3 方法により生息状況の把握を行った。なお、調査結果の記録にあたっては、データベース化を考慮し、所定の調査票等に記入する方式とした。

- ・文献調査

既存の文献を収集し、生息場所、確認時期等を調査した。

- ・標本調査

既存の標本に関する情報を収集し、生息場所、確認時期等を調査するとともに、必要に応じて未

同定標本の同定を行った。

- ・現地調査

現地踏査を行い、生息状況を調査するとともに、必要に応じて文献調査及び標本調査で把握した既知産地の現状についても調査した。

貝類

調査対象種について、1998年から2001年にかけて、2006年から2008年にかけて以下の3方法により生息状況の現状把握を行った。なお、調査結果の記録にあたっては、データベース化を考慮し、所定の調査票等に記入する方式とした。その他、更に詳細な情報収集をおこなうため地元の貝類同好会である名古屋貝類談話会会誌「かきつばた」に愛知県版レッドデータブックの原案を発表し(木村,1998;原田,1999)、多くの私信を得た。

- ・文献調査

既存の文献を収集し、生息場所、確認時期等を調査した。

- ・標本調査

既存の標本に関する情報を収集し、生息場所、確認時期等を調査するとともに、必要に応じて未同定標本の同定を行った。

- ・現地調査

現地踏査を行い、生息状況を調査するとともに、必要に応じて文献調査及び標本調査で把握した既知産地の現状についても調査した。

現地調査の詳細について以下に記述する。

- 陸産貝類

図1の●は1985年より実際に現地踏査した調査地点を示す。2002年から2008年にかけて木曾川河畔の自然林などを新たに調査した。

- 淡水産貝類

図2の●は1985年より実際に現地踏査した調査地点を示す。この結果については木村(1994)、木村・中西(1997)で報告した。貝類相の豊かであった調査地点については1998年から2001年までの調査で再び現地踏査し、新たな地点も調査した。2002年から2008年にかけて木曾川水系(木村,2005)や豊川市白川(木村・浅香,2003)などを新たに調査した。

- 内湾産貝類(海産貝類)

図2の○は1982年より実際に現地踏査したアシ原湿地、干潟の調査地点を示す。このうちアシ原湿地については前述の通り木村・木村(1999)で報告した。貝類相の豊かであった調査地点については1998年から2001年までの調査で再び現地踏査し、新たな地点も調査した。2002年から2008年にかけて渥美半島三河湾側(木村・木村,2002)、蒲郡市三谷地先人工干潟(木村,2004;木村,2005)などを新たに調査した。なお一部の調査地点では打ち上げられた貝類の調査も行ったので、潮下帯の貝類の調査も兼ねた。

図2の□はドレッジを使用した潮下帯の調査範囲を示す。これらの主な場所は、豊川河口域(松岡ほか,1999)、蒲郡市沖、日間賀島南沖から篠島沖(木村,1996)、知多半島内海沖から師崎沖と渥美半島西浜沖から三河湾中央部沖の瀬(木村,2000)である。さらに2007年、2008年に知多半島内海沖の伊勢湾でのドレッジ調査を行った。潮下帯の調査については、三谷漁協、形原漁協、西浦漁協、東幡豆漁協、日間賀島漁協所属の小型機船底引き網漁船によって採集された試料も一部含めた

が、底引き網漁の操業範囲は広く、採集場所が必ずしも明確ではない。従って採集地点の明確な最小限の試料のみ取り上げた。漁業の対象となっていた種、現在も対象になっている種については各漁協よりの聞き取り調査も行った。



図1 貝類（陸産）の現地調査地点図

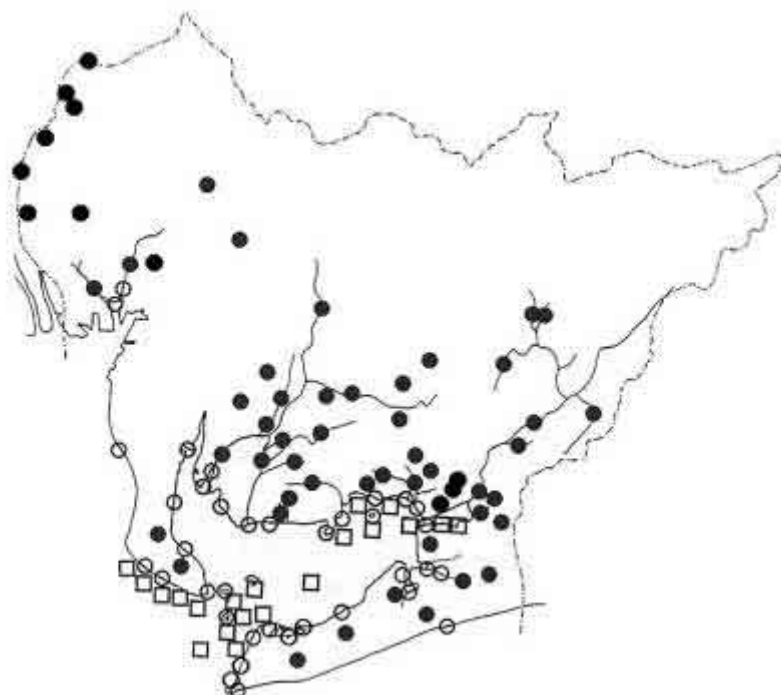


図2 貝類（淡水産・内湾産）の現地調査地点図

(2) 評価の区分及び方法

各調査対象種の絶滅のおそれの程度について、調査結果をもとに表 3 に示す評価区分基準に従い判定し、レッドデータブック掲載種の選定及び評価を各分類群毎に以下の方法により行った。

「絶滅」の評価については、「過去に確実に生息していた種」と判断する文献や標本の整備状況及び移動能力が各分類群毎に異なることから、表 4 に示す要件により判定した。なお、評価区分のうち野生絶滅は、原産地や遺伝的混乱の防止体制に疑問があると思われる場合もあり、また個人的に管理されているものをすべて確認することも困難であると判断されたので、今回のレッドデータブックでは絶滅とあわせ、絶滅・野生絶滅として扱うこととした（ただし、表記上は絶滅（EX）とした）。

判定の結果は、「レッドデータブックあいち 2009 動物編」の基礎となる第二次レッドリスト（動物編）（案）としてとりまとめた。また、レッドリストの精度の充実を図るため、平成 19 年 11 月に情報及び意見（パブリックコメント）の収集を行った。これらを勘案し、第二次レッドリスト（動物編）としてとりまとめ、平成 20 年 3 月に公表した。更に平成 20 年 8 月末日までの情報を加えて最終的な判定を行い、最新のレッドリストとして本書に掲載した。なお、パブリックコメントのうち本書の記述に反映できなかった意見の主要なものは、資料編 Q&A に収録した。

哺乳類

収集された情報をもとに、全国的な分布の状況等を勘案して総合的に判断・評価を行い、定性的要件に従い絶滅のおそれの程度を判定した。

鳥類

収集された情報をもとに、調査対象種の県内における季節的分布をふまえ、生息数の経年変化、現在の生息数または記録頻度、生息環境の変動、生息地の局地性、国際的・全国的な希少性等に着目し、総合的に判断・評価を行い、定性的要件に従い絶滅のおそれ（県内で継続的な生息がなくなるおそれ）の程度を判定した。

爬虫類

収集された情報をもとに、全国的な分布の状況等を勘案して総合的に判断・評価を行い、定性的要件に従い絶滅のおそれの程度を判定した。

両生類

収集された情報をもとに、全国的な分布の状況等を勘案して総合的に判断・評価を行い、定性的要件に従い絶滅のおそれの程度を判定した。

淡水魚類

収集された情報をもとに、全国的な分布の状況等を勘案して総合的に判断・評価を行い、定性的要件に従い絶滅のおそれの程度を判定した。

昆虫類

収集された情報をもとに、全国的な分布の状況等を勘案して総合的に判断・評価を行い、定性的

要件に従い絶滅のおそれの程度を判定した。なお、トンボ目については、データの蓄積が比較的豊富であることから、極力定量的な評価手法を用いた（手法の詳細は資料編参照）。

クモ類

収集された情報をもとに、全国的な分布の状況等を勘案して総合的に判断・評価を行い、定性的要件に従い絶滅のおそれの程度を判定した。

貝類

収集された情報をもとに、全国的な分布の状況等を勘案して総合的に判断・評価を行い、定性的要件に従い絶滅のおそれの程度を判定した。

貝類においては収集、整理可能な情報が非常に少なく、多くの種について客観的に評価できるデータが不足している。多くの希少種は限られた生息場所に飛び飛びに分布することが多く、定量的な調査は非常に困難である（風呂田ほか,1999；木村・木村,1999）。従ってある程度定性的なランク付けを行わざるを得なかった。

表3 「レッドデータブックあいち2009 動物編」の評価区分基準

区分及び基本概念		定性的要件		
絶滅 Extinct (EX) ・ 野生絶滅 Extinct in the Wild (EW)	愛知県ではすでに絶滅したと考えられる種。 野生では絶滅し、飼育・栽培下でのみ存続している種。	過去に愛知県に生息したことが確認されており、愛知県において少なくとも野生ですでに絶滅したと考えられる種（飼育・栽培下では存続している種を含む）。 【確実な情報があるもの】 1 今回の調査や記録により、すでに野生で絶滅したことが確認された。 【情報量が少ないもの】 2 過去50年間前後の間に、信頼できる生息の情報が得られていない。		
絶滅危惧Ⅰ類 Critically Endangered + Endangered (CR+EN)	絶滅の危機に瀕している種。 現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの。	次のいずれかに該当する種。 【確実な情報があるもの】 1 既知のすべての個体群で、危機的水準にまで減少している。 2 既知のすべての生息地で、生息条件が著しく悪化している。 3 既知のすべての個体群がその再生産能力を上回る捕獲・採取圧にさらされている。 4 ほとんどの分布域に交雑のおそれのある別種が侵入している。 【情報量が少ないもの】 5 それほど遠くない過去(30年～50年)の生息記録以後確認情報がなく、その後信頼すべき調査が行われていないため、絶滅したかどうかの判断が困難なもの。	絶滅危惧ⅠA類 (CR)	ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。
		絶滅危惧ⅠB類 (EN)	ⅠA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの。	
絶滅危惧Ⅱ類 Vulnerable (VU)	絶滅の危険が増大している種。 現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧Ⅰ類」のランクに移行することが確実と考えられるもの。	次のいずれかに該当する種 【確実な情報があるもの】 1 大部分の個体群で個体数が大幅に減少している。 2 大部分の生息地で生息条件が明らかに悪化しつつある。 3 大部分の個体群がその再生産能力を上回る捕獲・採取圧にさらされている。 4 分布域の相当部分に交雑可能な別種が侵入している。		
準絶滅危惧 Near Threatened (NT)	存続基盤が脆弱な種。 現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位ランクに移行する要素を有するもの。	次に該当する種。 生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。具体的には、分布域の一部において、次のいずれかの傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 1 個体数が減少している。 2 生息条件が悪化している。 3 過度の捕獲・採取圧による圧迫を受けている。 4 交雑可能な別種が侵入している。		
情報不足 Data Deficient (DD)	評価するだけの情報が不足している種。	環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧のカテゴリーに移行し得る属性(具体的には、次のいずれかの要素)を有しているが、生息状況をはじめとして、ランクを判定するに足る情報が得られていない種。あるいは確認例が極めて少なく、希少であるか否かも不明な種。 1 どの生息地においても生息密度が低く希少である。 2 生息地が極限されている。 3 生物地理上、孤立した分布特性を有する(分布域がごく限られた固有種等)。 4 生活史の一部または全部で特殊な環境条件を必要としている。		
地域個体群 Threatened Local Population (LP)	その種の国内における生息状況に鑑み、愛知県において特に保全のための配慮が必要と考えられる特徴的な個体群。			

表4 過去の生息種の要件

分類群	内容
哺乳類	縄文時代草創期以降の確認記録があるもの。一過性の種、移入種、後期更新世以前の化石種は除外。
鳥類	継続(経年的)確認記録がある種。迷行的に記録される種など一過性の種は除外。
爬虫類	標本等の確実な生息記録がある種。
両生類	標本等の確実な生息記録がある種。
淡水魚類	標本の確実な生息記録がある種。
昆虫類	標本等の確実な生息記録がある種。隣接県での生息状況も加味。
クモ類	標本等の確実な生息記録がある種。県内調査記録は昭和35年以降。
貝類	標本等の確実な生息記録がある種。

4. 調査結果

(1) 概要

「レッドデータブックあいち 2009 動物編」に掲載された種数は、表 5 のとおり。

絶滅のおそれのある種（絶滅危惧Ⅰ類及びⅡ類）の数は 275 であり、その内訳は、哺乳類が 13、鳥類が 48、爬虫類が 1、両生類が 5、淡水魚類が 11、昆虫類が 78、クモ類が 29 及び貝類が 90 となっている。また、現時点での絶滅危険度は小さいものの、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」種に移行する要素を有する種（準絶滅危惧）の数は 176 であり、その内訳は、哺乳類が 8、鳥類が 31、両生類が 4、淡水魚類が 6、昆虫類が 74、クモ類が 4 及び貝類が 49 となっている。さらに、県内ですでに絶滅した種の数 22 であり、その内訳は、哺乳類が 3、昆虫類が 10 及び貝類が 9 となっている。

また、絶滅のおそれの程度を評価するに足る情報が不足している種数は 50 であり、その内訳は、哺乳類が 1、鳥類が 1、爬虫類が 3、両生類が 4、淡水魚類が 1、昆虫類が 33、クモ類が 1 及び貝類が 6 となっている。

なお、国内における生息状況から、本県において保全のための配慮が必要と考えられる特徴的な個体群（地域個体群）は、哺乳類で 2 個体群、鳥類で 3 個体群となっている。

「レッドデータブックあいち 2002 動物編」掲載種と比較すると、絶滅のおそれのある種（絶滅危惧Ⅰ類及びⅡ類）の数は 41 増加し、その内訳は、哺乳類が 3、鳥類が 6、両生類が 2、淡水魚類が 6、昆虫類が 8、クモ類が 1、貝類が 15 となっている。また、県内では既に絶滅した種数は 6 増加（いずれも昆虫類）した。

表 5 「レッドデータブックあいち 2009 動物編」掲載種数

評価区分 対象	絶滅 (EX)	絶滅のおそれのある種			小計	準絶滅 危惧 (NT)	情報 不足 (DD)	計	地域 個体群 (LP)	県内 確認 種数
		絶滅 危惧 Ⅰ A 類 (CR)	絶滅 危惧 Ⅰ B 類 (EN)	絶滅 危惧 Ⅱ 類 (VU)						
哺乳類	3 (3)	6 (5)	3 (1)	4 (4)	13 (10)	8 (8)	1 (1)	25 (22)	2 (1)	71 (63)
鳥類	0 (0)	9 (6)	13 (12)	26 (24)	48 (42)	31 (30)	1 (7)	80 (79)	3 (3)	398 (393)
爬虫類	0 (0)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	3 (3)	4 (4)	0 (0)	16 (16)
両生類	0 (0)	2 (1)	2 (2)	1 (0)	5 (3)	4 (5)	4 (1)	13 (9)	0 (0)	21 (20)
淡水魚類	0 (0)	2 (2)	1 (1)	8 (2)	11 (5)	6 (9)	1 (4)	18 (18)	0 (0)	51 (50)
昆虫類	10 (4)	16 (12)	25 (20)	37 (38)	78 (70)	74 (81)	33 (31)	195 (186)	0 (0)	約 7,600 (6,063)
クモ類	0 (0)	2 (2)	15 (14)	12 (12)	29 (28)	4 (4)	1 (1)	34 (33)	0 (0)	523 (約 510)
貝類 (小計)	9 (9)	53 (55)	8 (7)	29 (13)	90 (75)	49 (49)	6 (11)	154 (144)	0 (0)	約 540 (約 503)
陸産	0 (0)	3 (3)	2 (2)	5 (1)	10 (6)	14 (14)	1 (2)	25 (22)	0 (0)	155 (151)
淡水産	5 (5)	3 (3)	0 (0)	2 (0)	5 (3)	4 (4)	2 (1)	16 (13)	0 (0)	38 (27)
内湾産	4 (4)	47 (49)	6 (5)	22 (12)	75 (66)	31 (31)	3 (8)	113 (109)	0 (0)	約 350 (約 325)
計	22 (16)	90 (83)	68 (58)	117 (93)	275 (234)	176 (186)	50 (59)	523 (495)	5 (4)	約 9,200 (約 7,620)

注：表中（ ）内は、「レッドデータブックあいち 2002 動物編」の掲載種数を示した。

(2) 哺乳類

愛知県における哺乳類の概況

愛知県は本州中部地方の太平洋岸に面しており、最も標高の高い地点は長野県との県境にある茶臼山の標高 **1,415m** である。標高 **300m** 以上の山地は主として北東部である奥三河地区にあり、平野部は南西部の尾張地区（尾張平野）と三河南部（三河平野）に多い。尾張平野は木曾川の沖積地であるが、西三河平野部には矢作川水系と境川水系が流れ、東三河平野部には豊川水系が流れている。海域としては、**(i)**知多半島の西方に伊勢湾、**(ii)**知多半島と渥美半島に挟まれて内海として存在する三河湾、**(iii)**渥美半島の南方に遠州灘（表浜）の沿岸、の **3** 海域がある。

上記のように、愛知県では高山帯・亜高山帯植生を欠いているものの、冬には厳しく冷え込む東三河山間部から温暖な知多半島・渥美半島にいたるまで多様な環境が存在しており、そこには陸・海・淡水・空に生息域をひろげている哺乳類が生息している。現在、愛知県に何種の野生哺乳類が生息しているか、という問題への回答はきわめて困難であるといわざるを得ない。愛知県の哺乳類相の研究として初めての広範な調査をおこなった宮尾ほか（1984）は **7** 目 **36** 種（追記のミズラモグラを含む）であるとしている。しかし、この中には近年絶滅したオオカミとカワウソが含まれていないほか、海獣類はすべて除外されている。また、再野生化した家畜であるアナウサギ（1958年9月から幡豆町前島に生息していたが、1997年11月に餌を与えていた観光施設が閉鎖され、その後動物業者や世界猿類動物園[犬山市]に移されて無人島になった、とされている：朝日新聞 1998年5月5日朝刊[愛知版]による）、ノイヌ、ノネコ、アライグマ（国内で最初に野生化したのは犬山市で、同市の動物施設から1962年に逃亡した12頭がもとになっている：揚妻,2001）も野生哺乳類としての扱いを受けていなかった。今回、愛知県における哺乳類の絶滅危惧種のリストを作成するにあたり、絶滅種ないし絶滅危惧種には人為的に移入された種や一過性の確認種は除き、また歴史時代に入る前に絶滅した種（いわゆる化石種）も含めていない。しかし、愛知県における哺乳類の概況を述べる際には縄文時代草創期以降に生息した野生哺乳類について知られている記録も含める必要があると判断して海獣を含めたリストを作成した結果、その総数は **9** 目 **71** 種（1亜種を含む）となった（本書 19 頁「愛知県哺乳類目録」の項を参照）。この中には上記の絶滅種や再野生化家畜も含まれている。1999年3月29日に赤羽町の海岸に打ち上げられた2頭の「コブハクジラ」は新聞報道（例えば朝日新聞 1999年4月1日朝刊）以外にも国立科学博物館“**The Marine Mammals Stranding DataBase**”により確実な情報として保管されたことから今回のリストに含めてある。クジラ類の記録として漂着記録（ストランディング・レコード）はきわめて重要である（石川,1994; 川田ほか, 2003; 2004; 栗原ほか, 2005; 2006a; 2006b; 2007; 保尊ほか, 2008）。

今回作成された愛知県産野生哺乳類の県内目録（**9** 目 **71** 種）が前回の目録（**8** 目 **63** 種：子安・織田, 2002）と異なるのは、海生哺乳類のジュゴン（海牛目ジュゴン科）、マダライルカ（クジラ目マイルカ科）、上記コブハクジラ（クジラ目アカボウクジラ科）、オットセイ（食肉目アシカ科）、ワモンアザラシ（食肉目アザラシ科）の **5** 種が追加されたことと、県内で新規に発見されたチチブコウモリ、ヒナコウモリ、ノレンコウモリ（いずれも翼手目ヒナコウモリ科）の **3** 種が付け加えられたことである。これら新規に愛知県産哺乳類として認識された **4** 目 **8** 種のうち、ジュゴンは後期ならびに晩期縄文時代の保美貝塚（田原市渥美地域）から産出した多数の報告がある（酒詰, 1984）。縄文時代には現在よりも寒冷な時期と温暖な時期があったことが知られており、現在より温暖だった「海進期」に分布域をやや北方にまで拡大したジュゴンが愛知県にまで漂流した結果として縄文貝塚に骨格を残すことになったことは十分に考えられることである。現在ジュゴンはえさ場等の環境

破壊により、個体数を減少させていると考えられるが、今後愛知県への漂流の可能性も否定はできないので今回のリストに加えることにした。海獣類のマダライルカ、コブハクジラ、オットセイおよびワモンアザラシの追加はいずれもストランディングレコードの増加とデータベースの整備による結果であり、調査、報告、記録などの多方面における研究者や一般の方々の幅広い理解と協力によって記録の更新がなされた結果であるといえよう。

愛知県における絶滅危惧種の概況

今回、愛知県で50年以上生息確認されておらず絶滅しているとみなされた種（絶滅）が3種あった。また、絶滅のおそれのある種（絶滅危惧Ⅰ類及びⅡ類）としてリストに取り上げた哺乳類は13種で、その内訳は、絶滅危惧ⅠA類（CR）6種、絶滅危惧ⅠB類（EN）3種、絶滅危惧Ⅱ類（VU）4種となっている。また、現時点での絶滅危険度は小さいものの、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」種に移行する要素を有する種（準絶滅危惧）とされた哺乳類は8種である。また、絶滅のおそれの程度を評価するに足る情報が不足している種は1種であった。さらに、国内における生息状況から、本県において保全のための配慮が必要と考えられる特徴的な個体群（地域個体群）は2個体群であった。

愛知県内で絶滅とされた3種はすべて食肉目で、オオカミ（イヌ科：県内絶滅時期は1890年前後）、アシカ（アシカ科：1906年頃に県内絶滅）、カワウソ（イタチ科：1913年前後に県内絶滅）が相当する。これら3種のうち、オオカミは国内でも絶滅しており（北海道で1800年代末、本州で1905年）、アシカは1974年、カワウソも1979年を最後にして国内での確認例はない。また、前回のリスト作成以降に、アシカとカワウソの2種は学名が改訂され、日本とその近海（アシカ）ないし日本固有種（カワウソ）とされたので（Christopher Wozencraft, 2005）、海外での潜在的な分布も著しく縮小（アシカ）ないしは皆無（カワウソ）となった。

絶滅危惧Ⅰ類とされた9種（ⅠA類6種、ⅠB類3種）の内訳は、齧歯目1種（ホンドモモンガ：リス科）、トガリ目1種（ミズラモグラ：モグラ科）、翼手目6種（ヤマコウモリ、チチブコウモリ、ヒナコウモリ、ノレンコウモリ、テングコウモリ、コテングコウモリ：すべてヒナコウモリ科）、食肉目1種（ツキノワグマ：クマ科）である。これらのおお半が森林性の種であって、なかでもコウモリ類が過半数の6種を占めているのが特徴である。

絶滅危惧Ⅱ類とされた4種の内訳は、齧歯目1種（カヤネズミ：ネズミ科）、トガリ目2種（カワネズミ：トガリ科、アズマモグラ：モグラ科）、翼手目1種（モモジロコウモリ：ヒナコウモリ科）である。

準絶滅危惧とされた8種の内訳は、齧歯目4種（ムササビ：リス科、ヤマネ：ヤマネ科、ハタネズミ：キヌゲネズミ科、スミスネズミ：キヌゲネズミ科）、翼手目2種（コキクガシラコウモリ、キクガシラコウモリ：ともにキクガシラコウモリ科）、食肉目1種（テン：イタチ科）、クジラ目1種（スナメリ：ネズミイルカ科）である。

情報不足の1種は食肉目のアナグマ（イタチ科）であり、保全のための配慮が必要と考えられる地域個体群と判断されたのはニホンジネズミ（トガリ目トガリ科）の佐久島個体群とコウベモグラ（トガリ目モグラ科）の名古屋城外堀個体群の1目2種2個体群である。

愛知県哺乳類レッドリスト

目及び科の範囲と種の配列は原則として“Mammal Species of the World, 3rd ed.” (Wilson & Reeder, 2005) に準拠し、新しい知見を加え整理した。

絶滅 (EX)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	食肉(ネコ)	イヌ	オオカミ	<i>Canis lupus</i> Linnaeus	EX
2	食肉(ネコ)	アシカ	アシカ	<i>Zalophus japonicus</i> (Peters)	CR
3	食肉(ネコ)	イタチ	カワウソ	<i>Lutra nippon</i> Imaizumi et Yoshiyuki	CR

絶滅危惧 A類 (CR)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	トガリ(モグラ)	モグラ	ミズラモグラ	<i>Euroscaptor mizura</i> (Günther)	NT
2	翼手(コウモリ)	ヒナコウモリ	ヤマコウモリ	<i>Nyctalus aviator</i> (Thomas)	NT
3	翼手(コウモリ)	ヒナコウモリ	チチブコウモリ	<i>Barbastella leucomelas</i> (Cretzschmar)	LP
4	翼手(コウモリ)	ヒナコウモリ	ノレンコウモリ	<i>Myotis bombinus</i> Thomas	VU
5	翼手(コウモリ)	ヒナコウモリ	コテンゴコウモリ	<i>Murina silvatica</i> Yoshiyuki	
6	食肉(ネコ)	クマ	ツキノワグマ	<i>Ursus thibetanus</i> G.[Baron] Cuvier	LP

絶滅危惧 B類 (EN)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	齧歯(ネズミ)	リス	ホンドモモンガ	<i>Pteromys momonga</i> Temminck	
2	翼手(コウモリ)	ヒナコウモリ	ヒナコウモリ	<i>Vespertilio sinensis</i> (Peters)	
3	翼手(コウモリ)	ヒナコウモリ	テングコウモリ	<i>Murina hilgendorffi</i> Peters	VU

絶滅危惧 類 (VU)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	齧歯(ネズミ)	ネズミ	カヤネズミ	<i>Micromys minutus</i> (Pallas)	
2	トガリ(モグラ)	トガリ	カワネズミ	<i>Chimarrogale platycephalus</i> (Temminck)	LP
3	トガリ(モグラ)	モグラ	アズマモグラ	<i>Mogera imaizumii</i> (Kuroda)	
4	翼手(コウモリ)	ヒナコウモリ	モモジロコウモリ	<i>Myotis macrodactylus</i> (Temminck)	

準絶滅危惧 (NT)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	齧歯(ネズミ)	リス	ムササビ	<i>Petaurista leucogenys</i> (Temminck)	
2	齧歯(ネズミ)	ヤマネ	ヤマネ	<i>Glirulus japonicus</i> (Schinz)	NT
3	齧歯(ネズミ)	キヌゲネズミ	ハタネズミ	<i>Microtus montebelli</i> (Milne-Edwards)	
4	齧歯(ネズミ)	キヌゲネズミ	スミスネズミ	<i>Myodes smithii</i> (Thomas)	
5	翼手(コウモリ)	キクガシラコウモリ	コキクガシラコウモリ	<i>Rhinolophus cornutus</i> Temminck	
6	翼手(コウモリ)	キクガシラコウモリ	キクガシラコウモリ	<i>Rhinolophus ferrumequinum</i> (Schreber)	
7	食肉(ネコ)	イタチ	テン	<i>Martes melampus</i> (Wagner)	
8	鯨(クジラ)	ネズミイルカ	スナメリ	<i>Neophocaena phocaenoides</i> (G.Cuvier)	

情報不足 (DD)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	食肉(ネコ)	イタチ	アナグマ	<i>Meles anakuma</i> Temminck	

地域個体群 (LP)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	トガリ(モグラ)	トガリ	ニホンジネズミ(佐久島の個体群)	<i>Crociodura dsinezumi</i> (Temminck)	
2	トガリ(モグラ)	モグラ	コウベモグラ(名古屋城外堀の個体群)	<i>Mogera wogura</i> (Temminck)	

愛知県哺乳類レッドリストの変更点

本書に掲載した哺乳類レッドリスト（見直し後）と「レッドデータブックあいち 2002 動物編」に掲載した哺乳類レッドリスト（見直し前）の新旧対照表を以下に示した。

見直し後のランク	見直し前のランク								種数	
	EX	CR	EN	VU	NT	DD	LP	リスト外*		
EX	オオカミ アシカ カワウソ									3
CR		ミズカモシ ヤマコウモリ コテンゴウモリ ツキノワグマ							チチブコウモリ ノレンコウモリ	6
EN		テンゴウモリ	ホンドモモンガ						ヒナコウモリ	3
VU				カヤネズミ カワネズミ アズマモグラ モモジロコウモリ						4
NT					ムササビ ヤマネ ハタネズミ スミスネズミ ユキクガシラコウモリ キクガシラコウモリ デン スナドリ					8
DD						アナグマ				1
LP							ニホンジネズミ (佐久島の個体群)	コウベモグラ (名古屋城外堀の個体群)		2
ランク外										0
種数	3	6	1	4	8	1	1	4		27

*1 「リスト外」:「レッドデータブックあいち2002動物編」において評価対象とされなかった種。

*2 「ランク外」:「レッドデータブックあいち2002動物編」掲載種のうち、今回の見直しによって、EX、CR、EN、VU、NT、DD、LPのいずれのランクにも該当しないと評価された種、または、評価の対象外とされた種。

愛知県哺乳類目録

この目録における目及び科の範囲と種の配列は“Mammal Species of the World, 3rd ed.” (Wilson & Reeder, 2005) に準拠している。2002年の「レッドデータブックあいち 2002 動物編」における愛知県哺乳類目録では8目26科63種の哺乳類が愛知県産として記載されている(子安・織田, 2002)。これに対して、2009年版の本目録では9目28科71種(1亜種含む)に増加している。したがって、第一次の哺乳類目録から増大した分類群数は、1目2科8種(1亜種含む)である。これらの内訳をみると、目レベルで増加したのは海牛目の1目、科レベルではジュゴン科(海牛目)とアカボウクジラ科(クジラ目)の2科、種レベルではジュゴン(海牛目ジュゴン科)、チチブコウモリ(翼手目)、ヒナコウモリ(翼手目)、ノレンコウモリ(翼手目)、オットセイ(食肉目)、ワモンアザラシ(食肉目)、マダライルカ(クジラ目)とコブハクジラ(クジラ目アカボウクジラ科)の8種であった。

ジュゴンの本目録への追加は、たとえ「一時的な生息種(一過性の確認種を含む)」や「移入種(一時的・一過性の確認を含む)」であろうとも「愛知県産哺乳類種」として認定したことに基づいている(レッドリストからは除外)。しかしながら、ペットとして飼育されていたフェレットなどが逃走して交通事故に遭い、その死体が発見されたような場合は「一過性の確認種」とはしていない。それは、こうした個体の場合、近隣に生息する個体群が実在せず、種としての生息が前提になっていない(生息実態を全く伴わない)からである。「生息実態」の有無に関する境界線の線引きにはしばしば困難を伴う。海生哺乳類の漂着、特に生存漂着は近隣海域での生息実態の存在を示すものと考えられるので、縄文時代のジュゴンの漂着例(酒詰, 1984)は、生存/死亡の区別はできないものの、当時の「近隣海域」での生息実態を示していると考えることが可能である。この基準は「愛知県哺乳類目録」における海生哺乳類の漂着事例に適用されている。ジュゴンの愛知県への確かな漂着事例は縄文時代の記載を除いては発見されていない(未発見の新聞報道等が存在する可能性はある)ので、この絶滅危惧種(絶滅危惧 I A 類: 環境省と沖縄県; Vulnerable A2bcd ver 3.1: IUCN, 2008)には「生息していたが絶滅した」あるいは「一時的な生息の後に絶滅した」という両者を示す記号(†)をつけている。移入種であるアナウサギでは「現在は生息しない」という報道に基づき、「一時的な生息の後に絶滅した移入種」という2種の記号(†及び§)がつけられている。

下記の「愛知県哺乳類目録」から、愛知県レッドリストの選定基準による EX (絶滅) を選定する際には、環境省による「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物- レッドデータブック- 1 哺乳類」(環境省, 2002) に基づき、移入種を除外(同書 10 頁、本書 14 頁、表 3) したほか、「一過性の種」も除外してある(本書 14 頁、表 4)。「現在は県内に生息していない」という意味で絶滅したジュゴン(†) の場合、近隣海域での生息実態があったとしても、海域を含む愛知県下に回遊域としての生息域が存在していたかの判定が困難なので、愛知県レッドリストからは除外してある。これとは対照的に、レッドリストで絶滅種(EX) とされたアシカ(†) の場合、たとえ生息時期が特定の時期に限られていたとしても、その年間の生息域の中に確実に愛知県内の上陸地点が含まれていたことが明らかであるから、絶滅(EX) と区分された。

下記の愛知県産哺乳類目録(縄文時代以降)における各符号の意味は次のとおりである。

- † : 県内絶滅。この中から移入種と一過性の種を除いたものがレッドリストの絶滅(EX) 種。
- § : 移入種。国内・外からの移入種(ヌートリア・シマリスなど)のほかには再野生化家畜(ノウシシ・ノネコなど)を含む。ただし、家畜ブタとイノシシの混血子孫(愛知県で野生生息している)を「ノブタ」あるいは「イノブタ」として独立に扱うことはせずに、在来野生イノシシ個体群に対する遺伝子混入とみなして「イノシシ」に含めてある。

- 海牛目(ジュゴン目) SIRENIA
 - ◆ジュゴン科 JUGONGIDAE
 1. †ジュゴン *Dugong dugon* (Müller, 1776)
- 霊長目(サル目) PRIMATES
 - ◆オナガザル科 CERCOPITHECIDAE
 2. ニホンザル *Macaca fuscata* (Blyth, 1875)
- 齧歯目(ネズミ目) RODENTIA
 - ◆リス科 SCIURIDAE
 3. ニホンリス *Sciurus lis* Temminck, 1844
 4. ムササビ *Petaurista leucogenys* (Temminck, 1827)
 5. ホンドモモンガ *Pteromys momonga* Temminck, 1844
 6. §シマリス *Tamias sibiricus* (Laxmann, 1769)
 - ◆ヤマネ科 GLIRIDAE
 7. ヤマネ *Glirulus japonicus* (Schinz, 1845)
 - ◆キヌゲネズミ科 CRICETIDAE
 8. ハタネズミ *Microtus montebelli* (Milne-Edwards, 1872)
 9. スミスネズミ *Myodes smithii* (Thomas, 1905)
 - ◆ネズミ科 MURIDAE
 10. ヒメネズミ *Apodemus argenteus* (Temminck, 1844)
 11. アカネズミ *Apodemus speciosus* (Temminck, 1844)
 12. カヤネズミ *Micromys minutus* (Pallas, 1771)
 13. ハツカネズミ *Mus musculus* Linnaeus, 1758
 14. ドブネズミ *Rattus norvegicus* (Berkenhout, 1769)
 15. クマネズミ *Rattus rattus* (Linnaeus, 1758)
 - ◆ヌートリア科 MYOCASTORIDAE
 16. §ヌートリア *Myocastor coypus* (Molina, 1782)
- ウサギ目 LAGOMORPHA
 - ◆ウサギ科 LEPORIDAE
 17. ノウサギ *Lepus brachyurus* Temminck, 1845
 18. †§アナウサギ *Oryctolagus cuniculus* (Linnaeus, 1758)
- トガリ目(モグラ目) SORICOMORPHA
 - ◆トガリ科 SORICIDAE

19. ニホンジネズミ *Crocidura dsinezumi* (Temminck, 1842)
 20. カワネズミ *Chimarrögale platycephalus* (Temminck, 1842)
- ◆モグラ科 TALPIDAE
21. ミズラモグラ *Euroscaptor mizura* (Günther, 1880)
 22. アズマモグラ *Mogera imaizumii* (Kuroda, 1957)
 23. コウベモグラ *Mogera wogura* (Temminck, 1842)
 24. ヒミズ *Urotrichus talpoides* Temminck, 1841
- 翼手目 (コウモリ目) CHIROPTERA
- ◆キクガシラコウモリ科 RHINOLOPHIDAE
25. コキクガシラコウモリ *Rhinolophus cornutus* Temminck, 1834
 26. キクガシラコウモリ *Rhinolophus ferrumequinum* (Schreber, 1774)
- ◆ヒナコウモリ科 VESPERTILIONIDAE
27. ヤマコウモリ *Nyctalus aviator* (Thomas, 1911)
 28. アブラコウモリ *Pipistrellus abramus* (Temminck, 1838)
 29. チチブコウモリ *Barbastella leucomelas* (Cretzschmar, 1826)
 30. ヒナコウモリ *Vespertilio sinensis* (Peters, 1880)
 31. ノレンコウモリ *Myotis bombinus* Thomas, 1906
 32. モモジロコウモリ *Myotis macrodactylus* (Temminck, 1840)
 33. テングコウモリ *Murina hilgendorfi* Peters, 1880
 34. コテングコウモリ *Murina silvatica* Yoshiyuki, 1983
- 食肉目 (ネコ目) CARNIVORA
- ◆ネコ科 FELIDAE
35. §ノネコ *Felis catus* Linnaeus, 1758
- ◆ジャコウネコ科 VIVERRIDAE
36. ハクビシン *Paguma larvata* (C.E.H. Smith, 1827)
- ◆イヌ科 CANIDAE
37. †オオカミ *Canis lupus* Linnaeus, 1758
 38. §ノイヌ *Canis lupus familiaris* Linnaeus, 1758
 39. タヌキ *Nyctereutes procyonoides* (Gray, 1834)
 40. キツネ *Vulpes vulpes* (Linnaeus, 1758)
- ◆クマ科 URSIDAE
41. ツキノワグマ *Ursus thibetanus* G. [Baron] Cuvier, 1823
- ◆アシカ科 OTARIIDAE
42. オットセイ *Callorhinus ursinus* (Linnaeus, 1758)
 43. †アシカ *Zalophus japonicus* (Peters, 1866)
- ◆アザラシ科 PHOCIDAE
44. アゴヒゲアザラシ *Erignathus barbatus* (Erxleben, 1777)
 45. ゴマフアザラシ *Phoca largha* Pallas, 1811
 46. ワモンアザラシ *Pusa hispida* (Schreber, 1775)
- ◆イタチ科 MUSTELIDAE
47. †カワウソ *Lutra nippon* Imaizumi et Yoshiyuki, 1989
 48. テン *Martes melampus* (Wagner, 1840)
 49. アナグマ *Meles anakuma* Temminck, 1844
 50. イタチ *Mustela itatsi* Temminck, 1844
 51. §チョウセンイタチ *Mustela sibirica* Pallas, 1773
- ◆アライグマ科 PROCYONIDAE
52. §アライグマ *Procyon lotor* (Linnaeus, 1758)
- 偶蹄目 (ウシ目) ARTIODACTYLA
- ◆イノシシ科 SUIDAE
53. イノシシ *Sus scrofa* Linnaeus, 1758
- ◆シカ科 CERVIDAE
54. ニホンジカ *Cervus nippon* Temminck, 1838
- ◆ウシ科 BOVIDAE
55. カモシカ *Capricornis crispus* (Temminck, 1836)
- クジラ目 CETACEA
- ◆ナガスクジラ科 BALAENOPTERIDAE

56. ザトウクジラ *Megaptera novaeangliae* (Borowski, 1781)
- ◆コククジラ科 ESCHRICHTIIDAE
57. コククジラ *Eschrichtius robustus* (Lilljeborg, 1861)
- ◆マイルカ科 DELPHINIDAE
58. マイルカ *Delphinus delphis* Linnaeus, 1758
59. ハナゴンドウ *Grampus griseus* (G. Cuvier, 1812)
60. カマイルカ *Lagenorhynchus obliquidens* Gill, 1865
61. シャチ *Orcinus orca* (Linnaeus, 1758)
62. オキゴンドウ *Pseudorca crassidens* (Owen, 1846)
63. マダライルカ *Stenella attenuata* (Gray, 1846)
64. スジイルカ *Stenella coeruleoalba* (Meyen, 1833)
65. シワハイルカ *Steno bredanensis* (G. Cuvier in Lesson, 1828)
66. ハンドウイルカ *Tursiops truncatus* (Montagu, 1821)
- ◆ネズミイルカ科 PHOCOENIDAE
67. スナメリ *Neophocaena phocaenoides* (G. Cuvier, 1829)
68. イシイルカ *Phocoenoides dalli* (True, 1885)
- ◆マッコウクジラ科 PHYSETERIDAE
69. オガワコマッコウ *Kogia sima* (Owen, 1866)
70. マッコウクジラ *Physeter catodon* Linnaeus, 1758
- ◆アカボウクジラ科 ZIPHIIDAE
71. コブハクジラ *Mesoplodon densirostris* (Blainville, 1817)

【引用文献】

- ・ IUCN, 2008. The IUCN red list of threatened species. IUCN. Gland, Switzerland.
- ・ 環境省, 2002. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物- レッドデータブック- 1 哺乳類. 自然環境研究センター. 東京.
- ・ 子安和弘・織田統一, 2002. 愛知県哺乳類目録. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 2002 : レッドデータブックあいち, pp.565-566. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
- ・ 日本哺乳学会, 2000. 沖縄県に生息するジュゴンの保護を要望する決議.
- ・ 酒詰伸男, 1984. 日本縄文石器時代食料総説, pp.338. 土曜会, 京都. 再版.
- ・ Wilson, D.E. & Reeder, D.M. eds., 2005. Mammal species of the world: A taxonomic and geographic reference, 3rd ed., 2142pp. Johns Hopkins University Press, Baltimore.

(3) 鳥 類

愛知県における鳥類の概況

愛知県鳥類目録 2002 (愛知県野鳥保護連絡協議会, 2002) 以降、2008 年 8 月末日までに愛知県内で生息が確認された種はミズカキチドリ、カナダカモメ、オニカッコウ、コノドジロムシクイ、ミヤマビタキ、キマユホオジロ、ハイイロオウチュウ、オウチュウ、カササギの 9 種である。この中から既存の知見で自然分布に問題の少ないと思われるミズカキチドリ、カナダカモメ、コノドジロムシクイ、キマユホオジロ、カササギの 2 目 4 科 5 属 5 種を加えると、愛知県で確認された野生鳥類は 18 目 67 科 191 属 398 種である (表 6)。日本鳥類目録改訂第 6 版 (日本鳥学会, 2000) に記載される 18 目 74 科 230 属 542 種に対して、目で 100%、科で 91%、属で 83%、種で 73% を満たしている (※注 1)。このことから、本県は、全国的に見て多様で豊かな鳥類相を呈しているといえることができる。

表 6 愛知県鳥類目録 2008 目科別集計

目	科	属数	種数	目	科	属数	種数
アビ目	アビ科	1	4	ヨタカ目	ヨタカ科	1	1
カイツブリ目	カイツブリ科	2	5	アマツバメ目	アマツバメ科	2	3
ミズナギドリ目	アホウドリ科	1	1	ブッポウソウ目	カワセミ科	3	4
	ミズナギドリ科	4	8		ブッポウソウ科	1	1
	ウミツバメ科	1	2		ヤツガシラ科	1	1
ペリカン目	ネッタイチョウ科	1	1	キツツキ目	キツツキ科	3	5
	カツオドリ科	1	1	スズメ目	ヤイロチョウ科	1	1
	ウ科	1	3		ヒバリ科	4	5
	グンカンドリ科	1	2		ツバメ科	3	4
コウノトリ目	サギ科	9	15		セキレイ科	3	10
	コウノトリ科	1	2		サンショウクイ科	1	1
	トキ科	2	3		ヒヨドリ科	1	1
カモ目	カモ科	13	41		モズ科	1	5
タカ目	タカ科	10	17		レンジャク科	1	2
	ハヤブサ科	1	6		カワガラス科	1	1
キジ目	キジ科	3	3		ミソサザイ科	1	1
ツル目	ツル科	1	3		イワヒバリ科	1	2
	クイナ科	6	7		ツグミ科	9	19
	ノガン科	1	1		ウグイス科	7	16
チドリ目	レンカク科	1	1		ヒタキ科	4	9
	タマシギ科	1	1	カササギヒタキ科	1	1	
	ミヤコドリ科	1	1	エナガ科	1	1	
	チドリ科	4	13	ツリスガラ科	1	1	
	シギ科	18	48	シジュウカラ科	1	4	
	セイタカシギ科	2	2	ゴジュウカラ科	1	1	
	ヒレアシシギ科	1	3	キバシリ科	1	1	
	ツバメチドリ科	1	1	メジロ科	1	1	
	トウゾクカモメ科	2	4	ホオジロ科	4	19	
	カモメ科	9	25	アトリ科	10	14	
	ウミスズメ科	5	7	ハタオリドリ科	1	2	
ハト目	サケイ科	1	1	ムクドリ科	1	6	
	ハト科	2	3	コウライウグイス科	1	1	
カッコウ目	カッコウ科	1	5	カラス科	5	8	
フクロウ目	フクロウ科	4	6	合 計	18目 67科 191属 398種		

注 1) 今回の集計で、ミカヅキシマアジ、ミズカキチドリ、カナダカモメ、アメリカズグロカモメ、ワライカモメ、ヤドリギツグミ、コノドジロムシクイ、サバンナシトドの 8 種は、日本鳥類目録改訂第 6 版 (日本鳥学会, 2000) に記載がないため厳密な比較ではない。

なお、今回目録に加えられなかった 4 種についてはいずれも南方に分布する種であり、地球温暖化等により自然分布を拡げている可能性が高いことから、今後、国内外での分布状況が明確になり次第、目録への追加が検討されることになる。

便宜的ではあるが、これらの各種に対して愛知県における一般的な生息期間 (status) を割り当てると、留鳥 66 種、夏鳥 40 種、冬鳥 87 種、旅鳥 57 種となる。これに基づけば、県内に継続的または定期的に生息する野生鳥類は概ね 250 種、不定期・偶発的に記録される種 (143 種) または生息期間を割り当てがたい種 (5 種) が 148 種となる。

また、県内で繁殖が確認されたあるいは繁殖が確実と考えられる種は、114 種で、この中には、ホシガラス、ビンズイなど現在では愛知県内における繁殖が絶滅となっている種や、シマアジ、マダラチュウヒなど突発的な記録と考えられる種が含まれる。しかし、この他にも、アオバト、ヤイロチョウのように繁殖期の確認が十分多くなっているものや、シロハラクイナ、ツルクイナ、セグロカッコウ、ベニアジサシなどのように過去に繁殖期の生息が確認されており、繁殖の可能性が残されている種がいくつかある。

以上、本県の鳥相は本州中部地方を呈し、高山・亜高山性の種がやや薄い、水辺特に沿岸域に生息する冬鳥と旅鳥が多様といえる。

表 7 繁殖種

標準和名	資料
カイツブリ, カワウ, ヨシゴイ, ミゾゴイ, ゴイサギ, ササゴイ, アマサギ, ダイサギ, チュウサギ, コサギ, アオサギ, オンドリ, マガモ, カルガモ, シマアジ, ミサゴ, ハチクマ, トビ, オオタカ, ツミ, ノスリ, サシバ, クマタカ, マダラチュウヒ, チュウヒ, ハヤブサ, チョウゲンボウ, ヤマドリ, キジ, クイナ, ヒクイナ, バン, オオバン, タマシギ, コチドリ, イカルチドリ, シロチドリ, ケリ, イソシギ, オオジシギ, セイタカシギ, ツバメチドリ, アジサシ, コアジサシ, キジバト, ジュウイチ, カッコウ, ツツドリ, ホトトギス, コノハズク, オオコノハズク, アオバズク, フクロウ, ヨタカ, ヒメアマツバメ, ヤマセミ, アカショウビン, カワセミ, ブッポウソウ, アオゲラ, アカゲラ, オオアカゲラ, コゲラ, ヒバリ, ツバメ, コシアカツバメ, イワツバメ, キセキレイ, ハクセキレイ, セグロセキレイ, ビンズイ, サンショウクイ, ヒヨドリ, モズ, カワガラス, ミソサザイ, コマドリ, コルリ, イソヒヨドリ, トラツグミ, マミジロ, クロツグミ, アカハラ, ヤブサメ, ウグイス, コヨシキリ, オオヨシキリ, センダイムシクイ, キクイタダキ, セッカ, キビタキ, オオルリ, コサメビタキ, サンコウチョウ, エナガ, コガラ, ヒガラ, ヤマガラ, シジュウカラ, ゴジュウカラ, キバシリ, メジロ, ホオジロ, ホオアカ, ノジコ, カワラヒワ, イカル, スズメ, ムクドリ, ケス, オナガ, ホシガラス, ハシボソガラス, ハシブトガラス	愛知県の野鳥 1977 愛知の野鳥 1983 愛知の野鳥 1995 緒方清人, 1998 東三河野鳥同好会 名古屋市鳥類調査会 西三河野鳥の会

愛知県における絶滅危惧種の概況

今回、愛知県で絶滅のおそれがあると認められた鳥類は、絶滅 (EX) が 0 種、絶滅危惧 I A 類 (CR) 9 種、絶滅危惧 I B 類 (EN) 13 種、絶滅危惧 II 類 (VU) 26 種、準絶滅危惧 (NT) 31 種、情報不足 (DD) 1 種の 80 種で、表 6 の目録に掲載された鳥類 398 種の約 20% に相当し、多くの種が危険な状況にあると判断された。また、特定の環境 (地区) に固執し、全国的に見て重要かつ特徴的と考えられる一定規模以上の個体群を地域個体群 (LP) とし、3 種をあげた。

なお、種の選定と評価・区分にあたっては、迷鳥及び一部の外洋性の種を除き、それぞれの種の県内における生息期間をふまえ、経年的に行ったカウント調査結果の推移、現在の生息数または記録される頻度、生息環境の変動状況、生息地の局地性、国際的・全国的な希少性等に着目し、定性的要件に基づき総合的な判断から区分した。

例えば、イヌワシ (環境省 EN) では、県内の繁殖記録が無く、観察記録の全てが幼鳥の拡散移動中の個体と考えられるため対象外と評価された。ハイタカ (環境省 NT) についても、県内の繁殖記

録が無く、渡りや越冬期の個体数は他の猛禽類と比較して少なくないこと。越冬個体の生息環境も県内全域に及び、保全すべき環境が絞り難いことから対象外と評価された。

一方で、環境省レッドリストに記載がない種でも、愛知県レベルでは記載が必要と考えられる種が数多くあった。例えば、ヨシゴイ、ビロードキンクロは一般的には希少種とみなされないが、県内ではかつて生息していた池沼や海岸から次々と姿を消してきた。ツルシギ、タカブシギは、水田や休耕田に生息するが、経年的なカウント調査により 1980 年代半ば以降、個体数が急激に減少している。シロチドリは、愛知県の干潟を代表する繁殖種であったが、1980 年代半ばを境に急激に減少しており、同様の減少傾向が継続すれば数十年で絶滅が予想されることから、準絶滅危惧 (NT) と評価された。メリケンキアシシギは国内でも生息数のごく少ない旅鳥であるものの国の指定種ではないが、県内ではごく少数ではあるが継続的な飛来があり、その生息環境が県内でも希少な外洋の岩礁に限られていること、特定の場所のみ生息することで、この環境に何らかの変化があれば絶滅が予想されることから準絶滅危惧 (NT) と評価された。

さらに、環境省レッドリストと愛知県レッドリストの両方に記載されながらも評価区分が異なる種がある。例えば、ツバメチドリ (環境省 VU) は、国内でも生息数の少ない夏鳥であるが、1990 年代まで愛知県では沿岸部の干拓地を中心に繁殖しており、国内最大の生息地であった。近年は年間に数羽が確認されるのみで、繁殖の確認もほとんど無くなっていることから絶滅危惧 I A 類 (CR) と評価された。シベリアオオハシシギ (環境省 DD) は、国内でも確認数の極めて少ない種であるが、1990 年代までは県内の沿岸部に飛来しており、愛知県は国内を代表する飛来地であったことから、初版の情報不足から今回絶滅危惧 I A 類 (CR) と評価された。サンショウクイ (環境省 VU) は県内の丘陵地から山地に生息する夏鳥であるが、県内における分布や生息数は比較的安定していることから準絶滅危惧 (NT) と評価された。

今回の愛知県レッドリストは第二版であり、「レッドデータブックあいち 2002 動物編」掲載の初版を基に、以降に得られた知見を加えて改訂したものである。初版の出版から僅か 6 年の間であるが、県内の沿岸部をはじめ丘陵部や山地部の環境は明らかに野生鳥類の生息には不都合な方向に変化しており、今回の改訂では 17 種で絶滅危惧のランクが上がり、ランクが下がったものは 3 種にすぎない。ランクが上がった 17 種の中で 12 種が水辺に生息する種であることから、愛知県内の水辺環境は県内全域を通じて、現在も急速に悪化していることがうかがえる。中でもシギ・チドリ類のランク上昇が顕著であり、絶滅危惧 I A 類 (CR) 9 種の中で 5 種を占めている。愛知県の水辺の優占種であったシギ・チドリ類 (レンカク科 1 種、タマシギ科 1 種、ミヤコドリ科 1 種、チドリ科 13 種、シギ科 48 種、セイタカシギ科 2 種、ヒレアシシギ科 3 種、ツバメチドリ科 1 種) 70 種の中でレッドリストにあげられているのは、それぞれの環境を代表する 30 種のみであるが、実質的に現状で絶滅の危機に瀕していないと判断できるのはコチドリ、ケリ、クサシギ、イソシギの 4 種のみであり、残りの 66 種は全て絶滅の危機に瀕しているというのが実状である。

本リスト策定を通じ、かつては普通に見られたものの現在は希少になっている種が数多くいることを明らかにできたことは意義深い。このことは、従前より希少とされている種もさらに過去には普通に見られた可能性があることと、将来的な生息条件の変化等によりさらに多くの種が減少する可能性があることを示唆している。従って、今後は、県内における鳥類の生息状況の推移を監視しながら、本リストを適宜改訂していくとともに、減少傾向にある鳥類の生息環境保全と回復について、効果的な対策の早急な実施が強く求められる。

【参考：除外種リスト】

「レッドデータブックあいち 2002 動物編」掲載種のうち、今回の見直しによってリストから除外された種とその理由は以下のとおりである。

除外種

No.	目名	科名	和名	見直し前 県ランク	除外理由
1	タカ	タカ	ハイタカ	NT	新たな知見より越冬地の本県で顕著な減少傾向は認められない

愛知県鳥類レッドリスト

目及び科の範囲、名称、配列は、「日本鳥類目録 改訂第6版」（日本鳥学会,2000）に準拠した。

絶滅 (EX)

(該当種なし)

絶滅危惧 A類 (CR)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	チドリ	シギ	ヘラシギ	<i>Eurynorhynchus pygmeus</i> (Linnaeus)	CR
2	チドリ	シギ	シベリアオオハシシギ	<i>Limnodromus semipalmatus</i> (Blyth)	DD
3	チドリ	シギ	カラフトアオアシシギ	<i>Tringa guttifer</i> (Nordmann)	CR
4	チドリ	シギ	オオジシギ	<i>Gallinago hardwickii</i> (Gray)	NT
5	チドリ	ツバメチドリ	ツバメチドリ	<i>Glareola maldivarum</i> Forster	VU
6	フクロウ	フクロウ	コノハズク	<i>Otus scops</i> (Linnaeus)	
7	ブッポウソウ	ブッポウソウ	ブッポウソウ	<i>Eurystomus orientalis</i> (Linnaeus)	EN
8	スズメ	ヤイロチョウ	ヤイロチョウ	<i>Pitta brachyura</i> (Linnaeus)	EN
9	スズメ	キバシリ	キバシリ	<i>Certhia familiaris</i> Linnaeus	

絶滅危惧 B類 (EN)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	カイツブリ	カイツブリ	アカエリカイツブリ	<i>Podiceps grisegena</i> (Boddaert)	
2	コウノトリ	サギ	ヨシゴイ	<i>Ixobrychus sinensis</i> (Gmelin)	NT
3	コウノトリ	サギ	ミゾゴイ	<i>Gorsachius goisagi</i> (Temminck)	EN
4	カモ	カモ	シノリガモ	<i>Histrionicus histrionicus</i> (Linnaeus)	
5	タカ	タカ	クマタカ	<i>Spizaetus nipalensis</i> (Hodgson)	EN
6	タカ	タカ	チュウヒ	<i>Circus spilonotus</i> Kaup	EN
7	タカ	ハヤブサ	ハヤブサ	<i>Falco peregrinus</i> Tunstall	VU
8	チドリ	シギ	コシヤクシギ	<i>Numenius minutus</i> Gould	EN
9	チドリ	カモメ	ズグロカモメ	<i>Larus saundersi</i> (Swinhoe)	VU
10	ブッポウソウ	カワセミ	ヤマセミ	<i>Ceryle lugubris</i> (Temminck)	
11	キツツキ	キツツキ	オオアカゲラ	<i>Dendrocopos leucotos</i> (Bechstein)	
12	スズメ	ツグミ	マミジロ	<i>Turdus sibiricus</i> Pallas	
13	スズメ	ウグイス	オオセッカ	<i>Locustella pryeri</i> (Seebohm)	EN

絶滅危惧 類 (VU)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	コウノトリ	サギ	クロサギ	<i>Egretta sacra</i> (Gmelin)	
2	カモ	カモ	トモエガモ	<i>Anas formosa</i> Georgi	VU
3	カモ	カモ	ビロードキンクロ	<i>Melanitta fusca</i> (Linnaeus)	
4	カモ	カモ	カワアイサ	<i>Mergus merganser</i> Linnaeus	
5	タカ	タカ	ハチクマ	<i>Pernis apivorus</i> (Linnaeus)	NT
6	タカ	タカ	サシバ	<i>Butastur indicus</i> (Gmelin)	VU
7	キジ	キジ	ウズラ	<i>Coturnix japonica</i> Temminck et Schlegel	NT
8	ツル	クイナ	ヒクイナ	<i>Porzana fusca</i> (Linnaeus)	VU
9	チドリ	タマシギ	タマシギ	<i>Rostratula benghalensis</i> (Linnaeus)	
10	チドリ	チドリ	イカルチドリ	<i>Charadrius placidus</i> J.E et G.R. Gray	
11	チドリ	シギ	ウズラシギ	<i>Calidris acuminata</i> (Horsfield)	
12	チドリ	シギ	キリアイ	<i>Limicola falcinellus</i> (Pontoppidan)	
13	チドリ	シギ	ツルシギ	<i>Tringa erythropus</i> (Pallas)	
14	チドリ	シギ	タカブシギ	<i>Tringa glareola</i> Linnaeus	
15	チドリ	シギ	オグロシギ	<i>Limosa limosa</i> (Linnaeus)	

16	チドリ	シギ	ホウロクシギ	<i>Numenius madagascariensis</i> (Linnaeus)	VU
17	チドリ	セイタカシギ	セイタカシギ	<i>Himantopus himantopus</i> (Linnaeus)	VU
18	カッコウ	カッコウ	ジュウイチ	<i>Cuculus fugax</i> Horsfield	
19	ヨタカ	ヨタカ	ヨタカ	<i>Caprimulgus indicus</i> Latham	VU
20	ブッポウソウ	カワセミ	アカショウビン	<i>Halcyon coromanda</i> (Latham)	
21	スズメ	カワガラス	カワガラス	<i>Cinclus pallasii</i> Temminck	
22	スズメ	ツグミ	コマドリ	<i>Erithacus akahige</i> (Temminck)	
23	スズメ	ツグミ	アカハラ	<i>Turdus chrysolaus</i> Temminck	
24	スズメ	ホオジロ	コジュリン	<i>Emberiza yessoensis</i> (Swinhoe)	VU
25	スズメ	ホオジロ	ホオアカ	<i>Emberiza fucata</i> Pallas	
26	スズメ	ホオジロ	ノジコ	<i>Emberiza sulphurata</i> Temminck et Schlegel	NT

準絶滅危惧 (NT)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	ペリカン	ウ	ヒメウ	<i>Phalacrocorax pelagicus</i> Pallas	EN
2	カモ	カモ	クロガモ	<i>Melanitta nigra</i> (Linnaeus)	
3	タカ	タカ	ミサゴ	<i>Pandion haliaetus</i> (Linnaeus)	NT
4	タカ	タカ	オオタカ	<i>Accipiter gentilis</i> (Linnaeus)	NT
5	タカ	タカ	ツミ	<i>Accipiter gularis</i> (Temminck et Schlegel)	
6	タカ	タカ	ハイイロチュウヒ	<i>Circus cyaneus</i> (Linnaeus)	
7	ツル	クイナ	クイナ	<i>Rallus aquaticus</i> Linnaeus	
8	チドリ	チドリ	シロチドリ	<i>Charadrius alexandrinus</i> Linnaeus	
9	チドリ	シギ	オジロトウネン	<i>Calidris temminckii</i> (Leisler)	
10	チドリ	シギ	コオバシギ	<i>Calidris canutus</i> (Linnaeus)	
11	チドリ	シギ	オバシギ	<i>Calidris tenuirostris</i> (Horsfield)	
12	チドリ	シギ	ミュビシギ	<i>Crocethia alba</i> (Pallas)	
13	チドリ	シギ	エリマキシギ	<i>Philomachus pygnaeus</i> (Linnaeus)	
14	チドリ	シギ	オオハシシギ	<i>Limnodromus scolopaceus</i> (Say)	
15	チドリ	シギ	アカアシシギ	<i>Tringa totanus</i> (Linnaeus)	VU
16	チドリ	シギ	メリケンキアシシギ	<i>Heteroscelus incanus</i> (Gmelin)	
17	チドリ	シギ	オオツリハシシギ	<i>Limosa lapponica</i> (Linnaeus)	
18	チドリ	シギ	ダイシャクシギ	<i>Numenius arquata</i> (Linnaeus)	
19	チドリ	シギ	ヤマシギ	<i>Scolopax rusticola</i> Linnaeus	
20	チドリ	シギ	アオシギ	<i>Gallinago solitaria</i> Hodgson	
21	チドリ	カモメ	コアジサシ	<i>Sterna albifrons</i> Pallas	VU
22	カッコウ	カッコウ	ツツドリ	<i>Cuculus saturatus</i> Blyth	
23	フクロウ	フクロウ	オオコノハズク	<i>Otus lempiji</i> (Horsfield)	
24	フクロウ	フクロウ	アオバズク	<i>Ninox scutulata</i> (Raffles)	
25	フクロウ	フクロウ	フクロウ	<i>Strix uralensis</i> Pallas	
26	スズメ	サンショウクイ	サンショウクイ	<i>Pericrocotus divaricatus</i> (Raffles)	VU
27	スズメ	ミソサザイ	ミソサザイ	<i>Troglodytes troglodytes</i> (Linnaeus)	
28	スズメ	ツグミ	コルリ	<i>Luscinia cyane</i> (Pallas)	
29	スズメ	ツグミ	クロツグミ	<i>Turdus cardis</i> Temminck	
30	スズメ	ヒタキ	コサメビタキ	<i>Muscicapa dauurica</i> Pallas	
31	スズメ	カササギヒタキ	サンコウチョウ	<i>Terpsiphone atrocaudata</i> (Eyton)	

情報不足 (DD)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	コウノトリ	サギ	サンカノゴイ	<i>Botaurus stellaris</i> (Linnaeus)	EN

地域個体群 (LP)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	タカ	タカ	サンバの渡り群 (伊良湖岬)	<i>Butastur indicus</i> (Gmelin)	VU
2	チドリ	チドリ	ダイゼンの越冬群 (藤前干潟および庄内川河口 周辺、汐川干潟、伊川津干潟および福江湾周辺)	<i>Pluvialis squatarola</i> (Linnaeus)	
3	チドリ	シギ	ハマシギの越冬群 (藤前干潟および庄内川河口 周辺、境川および矢作川河口周辺、汐川干潟、伊 川津干潟および福江湾周辺)	<i>Calidris alpina</i> (Linnaeus)	

愛知県鳥類レッドリストの変更点

本書に掲載した鳥類レッドリスト（見直し後）と「レッドデータブックあいち 2002 動物編」に掲載した鳥類レッドリスト（見直し前）の新旧対照表を以下に示した。

見直し後のランク	見直し前のランク							リスト外*1	種数
	EX	CR	EN	VU	NT	DD	LP		
EX									0
CR		カラフトオオアシシギ オオシギ コノハズク ブッポウソウ ヤイロチョウ キバシリ	ヘラシギ		ツバメチドリ		シベリアオオハシシギ		9
EN			アカエリカイツブリ ヨシゴイ ミソゴイ シノリガモ クマガカ チュウヒ ハヤブサ ズグロカモメ オオアカガラ マシロ オオセツカ	コシヤクシギ ヤマセミ					13
VU				クロサギ トモエガモ ピロドキンクロ ハチクマ サシバ ヒクイナ タマシギ ウスラシギ キリアイ ツルシギ タカアシギ オグロシギ ホウロクシギ セイタカシギ ジウイチ アカショウビン コマドリ アカハラ コジュリン	カワアイサ イカルチドリ ヨタカ カワガラス ホオアカ	ウスラ ノジコ			26
NT				サンショウクイ クワツグミ	ヒメウ クログモ ミサゴ オオタカ ツミ ハイロチュウヒ クイナ オジロウネン コオハシギ オハシギ ミユビシギ エリマキシギ オオハシシギ アカアシシギ オオトリハシシギ ダイシャクシギ コアシサン ツツドリ アオハズク フクロウ ミノサザイ コサシタキ サンコウチョウ	アオシギ ヤマシギ オオコノハズク	シロチドリ アメリカアシシギ	31	
DD						サンカノゴイ			1
LP							サシバの渡り群 (伊良湖郷) ダイゼンの越冬群 (藤前干潟および庄内川 河口周辺、汐川干潟、伊 川津干潟および福江湾周 辺) ハマシギの越冬群 (藤前干潟および庄内川 河口周辺、境川および矢 作川河口周辺、汐川干 潟、伊川津干潟および福 江湾周辺)		3
ランク外 *2					ハイタカ				1
種数	0	6	12	24	30	7	3	2	84

*1「リスト外」:「レッドデータブックあいち2002動物編」において評価対象とされなかった種。

*2「ランク外」:「レッドデータブックあいち2002動物編」掲載種のうち、今回の見直しによって、EX、CR、EN、VU、NT、DD、LPのいずれのランクにも該当しないと評価された種。または、評価の対象外とされた種。

(4) 爬虫類

愛知県における爬虫類の概況

本県の爬虫類は2目9科16種類（外来種1種を含む）が生息する（県内目録の項を参照）。いずれも本州に生息する代表的種類である。

ウミヘビ類は4種類の古い記録（新美, 1974）はあるが、当時の標本も破棄されていて、その後の調査がなく、調査も困難で、情報もないことなどから今回の調査から除外した。

カメ目はアカウミガメ、イシガメ、クサガメ、ミシシippアカミミガメ、ニホンスッポンの5種が生息している。ウミガメ類は外洋性で海岸砂浜に上陸産卵をする種類で、本県では渥美半島表浜が最大のアカウミガメの産卵地である。伊勢湾内は外洋に接しないこともあり少ない。アオウミガメは産卵が確認されたが孵化は確認されていない、他のウミガメ類は漂着死体の情報もあるが産卵はない。何れも定着性がないと判断されることから本調査から除外している。

ミシシippアカミミガメは、ペットとして輸入された、いわゆるミドリガメの放逐により定着した種類で、確実に個体数の増加と分布の拡大が見られる。現在河口から中流部まで分布を拡大していて、将来在来種の生息に大きな影響を与える可能性がある。

ニホントカゲ、ニホンカナヘビは全域に広く分布している。ニホンヤモリは平野から丘陵地に分布しているが三河山間部では記録がない。

ヘビ類では8種が生息している。アオダイショウは平野部でやや減少傾向にある。マムシは市街地周辺部では人為的に排除されることから減少している。地中性や夜行性のヘビ類は調査が十分に行われておらず詳細は不明である。

愛知県における絶滅危惧種の概況

アカウミガメは、遠州灘に面した渥美半島表浜が本県の最大の産卵地であるが、上陸産卵は近年あまり顕著な変化はみられない。地元自治体やボランティアなど多くの人々の砂浜環境整備により維持されているのが現状である。最大の問題はダムによる河川からの砂の供給が無いことであるが、港湾建設、海岸護岸等も海流の変化をもたらす砂の供給を阻害している。加えて海浜利用の多様化による人為的な砂浜環境の悪化がある。豊橋市の調査結果からも産卵成功率が50%前後で推移している。このことは産卵環境が不十分であることを示している。

ニホンイシガメは、環境省のリストに掲載されたが、本県ではまだあまり減少傾向が見られないことからリスト外とされた。

ニホンスッポンについては、かなり情報があるが、本県でも移入された養殖個体が流出し、在来種との交雑が進んでいる可能性が高く、明確な検証が行われていないことから情報不足とされた。

タカチホヘビ、シロマダラについては、広い範囲に生息すると考えられるが、夜行性や半地下性のこともあり、調査が困難である。現在の確認情報からは、個体数、生態等不明な点が多く情報不足とされた。

愛知県爬虫類レッドリスト

目及び科の範囲、名称、配列は、原則として「日本産爬虫両生類標準和名」（日本爬虫両棲類学会,2008）を基に、新しい知見を加え整理した。なお、ニホンスッポンについては、環境省レッドリストに準じて亜種小名を表記した。

絶滅 (EX)

(該当種なし)

絶滅危惧 A類 (CR)

(該当種なし)

絶滅危惧 B類 (EN)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	カメ	ウミガメ	アカウミガメ	<i>Caretta caretta</i> (Linnaeus)	EN

絶滅危惧 類 (VU)

(該当種なし)

準絶滅危惧 (NT)

(該当種なし)

情報不足 (DD)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	カメ	スッポン	ニホンスッポン	<i>Pelodiscus sinensis japonicus</i> (Temminch et Schlegeleru)	DD
2	有鱗	ナミヘビ	タカチホヘビ	<i>Achalinus spinalis</i> Peters	
3	有鱗	ナミヘビ	シロマダラ	<i>Dinodon orientale</i> (Hilgendorf)	

愛知県爬虫類レッドリストの変更点

本書に掲載した爬虫類レッドリスト（見直し後）と「レッドデータブックあいち 2002 動物編」に掲載した爬虫類レッドリスト（見直し前）の新旧対照表を以下に示した。

	見直し前のランク								リスト外*1	種数
	EX	CR	EN	VU	NT	DD	LP			
見直し後のランク	EX									0
	CR									0
	EN		アカウミガメ							1
	VU									0
	NT									0
	DD						ニホンスッポン★1 タカチホヘビ シロマダラ			3
	LP									0
ランク外										0
種数	0	0	0	0	0	3	0	0	0	4

*1「リスト外」:「レッドデータブックあいち2002動物編」において評価対象とされなかった種。

*2「ランク外」:「レッドデータブックあいち2002動物編」掲載種のうち、今回の見直しによって、EX、CR、EN、VU、NT、DD、LPのいずれのランクにも該当しないと評価された種。または、評価の対象外とされた種。

★1:スッポンからニホンスッポンに種名、学名変更

愛知県爬虫類目録

●カメ目 TESTUDINES

◆ウミガメ科 CHELONIIDAE

1. アカウミガメ *Caretta caretta* (Linnaeus, 1758)

◆イシガメ科 GEOEMYDIDAE

2. ニホンイシガメ *Mauremys japonica* (Temminck et Schlegel, 1835)
3. クサガメ *Chinemys reevesii* (Gray, 1831)

◆ヌマガメ科 EMYDIDAE

4. §ミシシippアカミミガメ *Trachemys scripta elegans* (Wied, 1839)

◆スッポン科 TRIONYCHIDAE

5. ニホンスッポン *Pelodiscus sinensis japonicusu* (Temminck et Schlegel, 1835)

●有鱗目 SQUAMATA

◆ヤモリ科 GEKKONIDAE

6. ニホンヤモリ *Gekko japonicus* (Duméril et Bibron, 1836)

◆トカゲ科 SCINCIDAE

7. ニホントカゲ *Plestiodon japonicus* (Peters, 1864)

◆カナヘビ科 LACERTIDAE

8. ニホンカナヘビ *Takydromus tachydromoides* (Schlegel, 1838)

◆ナミヘビ科 COLUBRIDAE

9. タカチホヘビ *Achalinus spinalis* Peters, 1869
10. アオダイショウ *Elaphe climacophora* (Boie, 1826)
11. シマヘビ *Elaphe quadrivirgata* (Boie, 1826)
12. ジムグリ *Elaphe conspicillata* (Boie, 1826)
13. ヒバカリ *Amphiesma vibakari vibakari* (Boie, 1826)
14. シロマダラ *Dinodon orientale* (Hilgendorf, 1880)
15. ヤマカガシ *Rhabdophis tigrinus tigrinus* (Boie, 1826)

◆クサリヘビ科 VIPERIDAE

16. ニホンマムシ *Gloydius blomhoffii* (Boie, 1826)

※和名、学名、配列は、「日本産爬虫両生類標準和名」(日本爬虫両棲類学会,2008)に準拠した。

「§」は移入種を示す。

(5) 両生類

愛知県における両生類の概況

本県には両生類 2 目 7 科 21 種類 (外来種 1 種を含む) が生息する。生息環境は、山地部と丘陵部、平野部に分かれる。山地部溪流にはヒダサンショウウオ、ハコネサンショウウオ、ナガレタゴガエル、モリアオガエルが生息する。山地と丘陵部にはアカハライモリ、タゴガエル、ヤマアカガエル、シュレーゲルアオガエル、カジカガエル、ツチガエルが生息する。丘陵部溪流ではコガタブチサンショウウオ、湿地周辺にはカスミサンショウウオ、河川ではオオサンショウウオが生息する。丘陵部から平野部にかけて水田を中心にナゴヤダルマガエル、ヌマガエルが生息する。特定外来生物に指定されたウシガエルは、ため池を中心に河川にも分布を広げ、他の小型両生類の生息を危うくしている。全域に分布が見られるのはアズマヒキガエル、トノサマガエル、ニホンアマガエルである。

本県のサンショウウオ類については、興味ある話題が多い。瀬戸市の蛇ヶ洞川に生息するオオサンショウウオは分布の東限である。従来トウキョウサンショウウオとされた種はカスミサンショウウオに分類され、愛知県が分布の東限となった。種の確定していない小型サンショウウオはまだ種の記載が行われていない。また、平成 19 年に新しく発見されたコガタブチサンショウウオは、非常に興味ある発見である。従来記録の残るクロサンショウウオについては標本がなく、確認できないため愛知県産から除外している。今後の調査研究に期待したい。

愛知県における絶滅危惧種の概況

県内に生息するサンショウウオ類はすべて絶滅危惧種、または準絶滅危惧種と評価された。オオサンショウウオは蛇ヶ洞川で確認されているが、生息環境が悪化しないよう注意が必要である。種が記載されていないサンショウウオについては 1 地点のみの分布で、その後の調査でも新しい産地は発見されていない。平成 19 年発見のブチサンショウウオについては、県内 1 地点のみの確認であることと、その後ブチサンショウウオとコガタブチサンショウウオに分離されたこともあり情報不足とされた。トウキョウサンショウウオについては、環境省リストに準じ、カスミサンショウウオに名称を変更した。ヒダサンショウウオについては、豊田市内で新たな生息地が確認されたが、ハコネサンショウウオは確認されていない。アカハライモリについては、渥美半島部では以前から絶滅が知られていたが、知多半島でも少なく、尾張部でもかなり減少しているようで、情報不足とされた。ナガレタゴガエルについては他の地域での新たな発見はないことから絶滅危惧 I A 類とされた。ダルマガエルは中国地方産と分離して、和名がナゴヤダルマガエルに変更された。本種は尾張・知多地方に比較的多いが、三河地方では一部地域を除いて個体数が少ない。その原因は不明であるが、減少傾向にあることから絶滅危惧 II 類とされた。ヤマアカガエル、ツチガエルは丘陵部での記録が少ないことから情報不足とされた。

愛知県両生類レッドリスト

目及び科の範囲、名称、配列は、原則として「日本産爬虫両生類標準和名」（日本爬虫両棲類学会,2008）を基に、新しい知見を加え整理した。

絶滅 (EX)

(該当種なし)

絶滅危惧 A類 (CR)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	有尾	サンショウウオ	サンショウウオの一種*	<i>Hynobius</i> sp.	
2	無尾	アカガエル	ナガレタゴガエル	<i>Rana sakuraii</i> Matsui et Matsui	

※：新種（又は新亜種）と認定されているが種名は未定。

絶滅危惧 B類 (EN)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	有尾	サンショウウオ	カスミサンショウウオ	<i>Hynobius nebulosus</i> (Temminck et Schlegel)	VU
2	有尾	オオサンショウウオ	オオサンショウウオ	<i>Andrias japonicus</i> (Temminck)	VU

絶滅危惧 類 (VU)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	無尾	アカガエル	ナゴヤダルマガエル	<i>Rana porosa brevipoda</i> Ito	EN

準絶滅危惧 (NT)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	有尾	サンショウウオ	ヒダサンショウウオ	<i>Hynobius kimurae</i> Dunn	NT
2	有尾	サンショウウオ	ハコネサンショウウオ	<i>Onychodactylus japonicus</i> (Houttuyn)	
3	無尾	アオガエル	モリアオガエル	<i>Rhacophorus arboreus</i> (Okada et Kawano)	
4	無尾	アオガエル	カジカガエル	<i>Buergeria buergeri</i> (Temminck et Schlegel)	

情報不足 (DD)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	有尾	サンショウウオ	コガタブチサンショウウオ	<i>Hynobius yatsui</i> Oyama	NT
2	有尾	イモリ	アカハライモリ	<i>Cynops pyrrhogaster</i> (Boie)	NT
3	無尾	アカガエル	ツチガエル	<i>Rana rugosa</i> Temminck et Schlegel	
4	無尾	アカガエル	ヤマアカガエル	<i>Rana ornativentris</i> Werner	

愛知県両生類レッドリストの変更点

本書に掲載した両生類レッドリスト（見直し後）と「レッドデータブックあいち 2002 動物編」に掲載した両生類レッドリスト（見直し前）の新旧対照表を以下に示した。

	見直し前のランク								種数
	EX	CR	EN	VU	NT	DD	LP	リスト外*1	
見直し後のランク	EX	CR	EN	VU	NT	DD	LP	リスト外*1	種数
EX									0
CR		サンショウウオの一種★1				ナガレタゴガエル			2
EN			カスミサンショウウオ★2 オオサンショウウオ						2
VU					ナゴヤダルマガエル★3				1
NT					ヒダサンショウウオ ハコネサンショウウオ モリアオガエル カジカガエル				4
DD								コガタブチサンショウウオ アカハライモリ ツチガエル ヤマアカガエル	4
LP									0
ランク外									0
種数	0		2	0	5	1	0	4	13

*1 [リスト外]:「レッドデータブックあいち2002動物編」において評価対象とされなかった種。

*2 [ランク外]:「レッドデータブックあいち2002動物編」掲載種のうち、今回の見直しによって、EX, CR, EN, VU, NT, DD, LPのいずれのランクにも該当しないと評価された種。または、評価の対象外とされた種。

★1: 新種と認定されているが記載・種名が未公開

★2: トウキョウサンショウウオからカスミサンショウウオに所属変更

★3: ダルマガエルからナゴヤダルマガエルに種名変更

愛知県両生類目録

●有尾目 CAUDATA

◆サンショウウオ科 HYNOBIIDAE

1. カスミサンショウウオ *Hynobius nebulosus* (Temminck et Schlegel, 1838)
2. ヒダサンショウウオ *Hynobius kimurae* Dunn, 1923
3. コガタブチサンショウウオ *Hynobius yatsui* Oyama 1947
4. サンショウウオの一種 *Hynobius* sp.
5. ハコネサンショウウオ *Onychodactylus japonicus* (Houttuyn, 1782)

◆オオサンショウウオ科 CRYPTOBRANCHIDAE

6. オオサンショウウオ *Andrias japonicus* (Temminck, 1836)

◆イモリ科 SALAMANDRIDAE

7. アカハライモリ *Cynops pyrrhogaster* (Boie, 1826)

●無尾目 ANURA

◆ヒキガエル科 BUFONIDAE

8. アズマヒキガエル *Bufo japonicus formosus* Boulenger, 1883

◆アマガエル科 HYLIDAE

9. ニホンアマガエル *Hyla japonica* Günther, 1859

◆アカガエル科 RANIDAE

10. §ウシガエル *Rana castesbeiana* Shaw, 1802
11. タゴガエル *Rana tagoi* Okada, 1928
12. ナゴヤダルマガエル *Rana porosa brevipoda* Ito, 1941
13. ツチガエル *Rana rugosa* Temminck et Schlegel, 1838
14. トノサマガエル *Rana nigromaculata* Hallowell, 1861
15. ナガレタゴガエル *Rana sakuraii* Matsui et Matsui, 1990
16. ニホンアカガエル *Rana japonica* Boulenger, 1879
17. ヤマアカガエル *Rana ornativentris* Werner, 1903
18. スマガエル *Fejervarya limnocharis* (Gravenhorst, 1829)

◆アオガエル科 RHACOPHORUS

19. シュレーゲルアオガエル *Rhacophorus schlegelii* (Günther, 1859)
20. モリアオガエル *Rhacophorus arboreus* (Okada et Kawano, 1924)
21. カジカガエル *Buergeria buergeri* (Temminck et Schlegel, 1838)

※和名、学名、配列は、「日本産爬虫両生類標準和名」(日本爬虫両棲類学会,2008)に準拠した。

「§」は移入種を示す。

(6) 淡水魚類

愛知県における淡水魚類の概況

本県は、中部山岳地帯南西部の太平洋側の斜面に位置し、**1,000m** を越す山は少なく、県内での最高峰は茶臼山（標高 **1,415m**）である。山地の面積は全県の約 **1/4** で、全般的には県の東北部には山地が広がり、南西部は平野で占められている。平野部は大きく **3** つに分けられ、それぞれ尾張平野部は木曾川水系および庄内川水系、西三河平野部には境川水系および矢作川水系、さらに東三河平野部には豊川水系の河川が流れる。これらの水系はいずれも流路は比較的長く、支流の数も多くその流域面積が広く、上流域から下流域まで幅広いのが特徴である。

木曾川は、飛騨山地の南端の鉢盛山および烏帽子山に源を発し、伊勢湾に注ぐ全長 **230km** の日本有数の大河川である。県内では、そのうち犬山市から河口までの **106km** を流れる。この地域は木曾川の下流域に相当し、水量は多く、流れも緩やかで護岸に柳等の木々が多く茂り、その環境は多様性に富んでいる。このため、多くの魚類の生息がみられ、特に底生性のゼゼラ、ツチフキ、カマツカ等のコイ科魚類が中心である。なお、本水系からの農業用水は濃尾平野地区に網目状に分布しており、このためにこの地域全体の魚類相に共通的なことが多いのが特徴となっている。

矢作川は、長野県平谷峠と茶臼山を源流とする流路 **122km** の中河川である。本河川は途中で **200** もの支流が合流する。代表的な支流には名倉川、巴川、乙川があり、途中矢作ダムをはじめ、いくつかのダム湖が構築されている。矢作川の魚類相は、これらの環境を反映して上流のサケ科魚類（アマゴ、イワナ）から中・下流域のコイ科魚類、さらには河口域のハゼ科魚類まで大きく変化し、多岐に富んでいる。

豊川は、北設山地の段戸準平原を源とする流路 **77km** の中河川である。上流域は河床が岩石で構成されており、急流や淵が多く形成され、ネコギギの生息も多くみられ、下流域は水量が多くゆったりと流れている。

愛知県内の水系は、以上の木曾川水系、矢作川水系および豊川水系に大別され、そこに多岐にわたる淡水魚類が生息している。既存の資料から、それぞれの水系において **38** 種、**51** 種、および **37** 種の淡水魚類が知られている。県内全般では、従来 **14** 科 **55** 種の淡水魚類が確認報告されていた（愛知県,1984）が、今回の現地調査では **14** 科 **51** 種が採捕確認された。一方、知多半島や渥美半島および三河湾に直接注ぐ短い河川が多く、海との関わりの深いハゼ科魚類を中心に汽水域や海域に生息する魚類が多く見られる。季節によってはアユ、ボラ、スズキ、ウナギ等の遡上活動が活発にみられる。

愛知県における絶滅危惧種の概況

今回の現地調査（平成 **18** 年度～**20** 年度）の結果から、絶滅危惧 I 類（CR+EN）**3** 種、絶滅危惧 II 類（VU）**8** 種、準絶滅危惧（NT）**6** 種、情報不足（DD）**1** 種の計 **18** 種が選定された。これらの多くは、河川の下流域や中流域にその立地が限定される低地や山沿い近辺、すなわち里山周辺の池沼や細流さらに農業用水路を生息環境とする魚類である。

本県は、一部東北部は山地が占めるが、西南部全域には平野が広がり、大～小河川が多く流れ、そこに分布する魚類の種類も生息量も多く、その生息環境も多様性に富んでいる。しかし、最近では土地開発、特に産業発展に関連する土地改変が著しく進行し、選定種自体を含め、淡水魚類全般の生息場所が激減している。一方、平野部の水域ではオオクチバスやブルーギル等の外来魚が著しく増加しており、従来の生態系は著しく変化し、大量に捕食されるという現状がある。今回、絶滅危

惧Ⅰ類に選定された魚類のうち、イタセンバラやウシモツゴはこれらの影響をも受けて、県内においては既に絶滅状態に近いと言っても過言ではない。

河川の中・上流域に生息する種として、スナヤツメ、カジカ、ネコギギ、カマキリ（アユカケ）、ドンコ、アカザが選定された。これらは主として中流域に生息し、河畔林の減少や河川改修等による生息環境の急激な変化の影響を直接受けている。カジカは河川の上流域に生息し、そこで一生を終える大卵型と、中流域に生息し、孵化後海へ降下し再び遡上する小卵型がある。両者ともに生息環境の変化が著しいため、今回選定された。カマキリ（アユカケ）も回遊魚であり、カジカと同様に判断された。上・中流域に生息しているアカザは、今回の現地調査で県内各地にその生息が見られたが、その生息量は多くなく、河川への土砂の流入等に伴う浮き石の減少等により生息場所の著しい減少傾向がみられることから、選定された。ネコギギは、河川の中流域に点々と生息がみられるが、河川開発による生息場所の縮小が懸念されることから、選定された。

里山付近の河川の支流・細流および池沼に主として生息する魚類では、カワバタモロコ、カワヒガイ、ヤリタナゴ、イチモンジタナゴ、スジシマドジョウ小型種東海型、ホトケドジョウ、ナガレホトケドジョウ、メダカが選定された。これらの魚類は、圃場整備や宅地開発による生息場所の消失の影響を最も強く受けている。また、メダカやホトケドジョウ等は水系の連続性を欠くことの影響を強く受けている。

今回の調査作業中、古い文献では報告されているが、近年その調査確認報告がなく、現地調査でも確認されなかった種もみられた。例えばニッポンバラタナゴ、ムギツク等はその情報が不明であり、具体的な内容が把握されなかったため、今後の課題とされた。今回は情報不足種として、アブラボテが選定されたが、前回の4種から1種へと減少し、少しずつではあるが情報が収集されつつある。

なお、本調査・検討内容は、淡水魚類に限定された。

【参考：除外種リスト】

「レッドデータブックあいち 2002 動物編」掲載種のうち、今回の見直しによってリストから除外された種とその理由は以下のとおりである。

除外種

No.	目名	科名	和名	見直し前 県ランク	除外理由
1	スズキ	ハゼ	カワアナゴ	DD	調査が進み、新たな確認情報が得られた
2	カサゴ	カジカ	カジカ	NT	評価対象外とした(カジカ大卵型とカジカ小卵型に細分化された)

愛知県淡水魚類レッドリスト

目及び科の範囲、名称、配列は、原則として「日本産野生生物目録一本邦産野生動植物の種の現状－(脊椎動物編)」(環境省編,1993)に準拠した。

絶滅 (EX)

(該当種なし)

絶滅危惧 A類 (CR)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	コイ	コイ	ウシモツゴ	<i>Pseudorasbora pumila</i> subsp.	CR
2	コイ	コイ	イタセンパラ	<i>Acheilognathus longipinnis</i> Regan	CR

絶滅危惧 B類 (EN)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	ナマズ	ギギ	ネコギギ	<i>Coreobagrus ichikawai</i> Okada et Kubota	EN

絶滅危惧 類 (VU)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	ヤツメウナギ	ヤツメウナギ	スナヤツメ	<i>Lampetra mitsukurii</i> Hatta	VU
2	コイ	コイ	カワバタモロコ	<i>Hemigrammocypripis rasborella</i> Fowler	EN
3	コイ	コイ	イチモンジタナゴ	<i>Acheilognathus cyanostigma</i> Jordan et Fowler	CR
4	コイ	ドジョウ	ホトケドジョウ	<i>Lefua echigonia</i> Jordan et Richardson	EN
5	コイ	ドジョウ	ナガレホトケドジョウ	<i>Lefua</i> sp.	EN
6	カサゴ	カジカ	カジカ大卵型	<i>Cottus pollux</i> Gunther	NT
7	カサゴ	カジカ	カジカ小卵型	<i>Cottus reinii</i> Hilgendorf	EN
8	カサゴ	カジカ	カマキリ(アユカケ)	<i>Cottus kazika</i> Jordan et Starks	VU

準絶滅危惧 (NT)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	コイ	コイ	カワヒガイ	<i>Sarcocheilichthys variegatus variegatus</i>	NT
2	コイ	コイ	ヤリタナゴ	<i>Tanakia lanceolata</i> (Temminck et Schlegel)	NT
3	コイ	ドジョウ	スジシマドジョウ 小型種東海型	<i>Cobitis taenia striata</i> Ikeda	EN
4	ナマズ	アカザ	アカザ	<i>Liobagrus reinii</i> Hilgendorf	VU
5	メダカ	メダカ	メダカ	<i>Oryzias latipes</i> (Temminck et Schlegel)	VU
6	スズキ	ハゼ	ドンコ	<i>Odontobutis obscura</i> (Temminck et Schlegel)	

情報不足 (DD)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	コイ	コイ	アブラボテ	<i>Tanakia limbata</i> (Temminck et Schlegel)	NT

愛知県淡水魚類レッドリストの変更点

本書に掲載した淡水魚類レッドリスト(見直し後)と「レッドデータブックあいち 2002 動物編」に掲載した淡水魚類レッドリスト(見直し前)の新旧対照表を以下に示した。

	見直し前のランク								種数
	EX	CR	EN	VU	NT	DD	LP	リスト外*1	
見直し後のランク	EX	CR	EN	VU	NT	DD	LP	リスト外*1	種数
EX									0
CR		ウシモツゴ イタセンパラ							2
EN			ネコギギ						1
VU				スナヤツメ イチモンジタナゴ	カワバタモロコ ホトケドジョウ ナガレホトケドジョウ カマキリ(アユカケ)			カジカ大卵型(※1) カジカ小卵型(※1)	8
NT					スジシマドジョウ 小型種東海型 アカザ メダカ ドンコ	カワヒガイ ヤリタナゴ			6
DD						アブラボテ			1
LP									0
ランク外*2					カジカ(※1)	カワアナゴ			2
種数	0	2	1	2	9	4	0	2	20

*1「リスト外」:「レッドデータブックあいち2002動物編」において評価対象とされなかった種。

*2「ランク外」:「レッドデータブックあいち2002動物編」掲載種のうち、今回の見直しによって、EX、CR、EN、VU、NT、DD、LPのいずれのランクにも該当しないと評価された種。または、評価の対象外とされた種。

(※番号)は、今回の見直しで、細分化等により評価単位の変更があったもの。番号は、評価単位の変更により見かけ上、レッドリストから消えた名称と、今回の見直しで採用された評価単位とその名称との対応を示している。

(7) 昆虫類

愛知県における昆虫類の概況

愛知県自然保護課が企画し、その成果が発表された「愛知県の昆虫、上・下」(1990・1991)には、1980年代末までの記録6,063種がまとめられている。これ以降、愛知県内において記録された昆虫全体の総目録は公表されていないが、これによってそれまでの県内の大要を知る事ができる。そこに記載されている目(類)の中で、調査が比較的行き届いているのはチョウ目チョウ類129種、トンボ目93種、ゴキブリ目9種、カマキリ目7種、シロアリ目2種、バッタ目109種、ナナフシ目7種、ハサミムシ目9種、シリアゲムシ目12種などで、これらの目(類)ではそれ以降の種数の増加はごくわずかである。そのほかに、チョウ目ガ類2,464種、カメムシ目430種、コウチュウ目2,271種と多くの種が記録されているものの、その後の調査も含めると、現在ではガ類約2,700種、カメムシ目約600種、コウチュウ目約2,800種ほどが判明している。これらのことから、愛知県に分布する昆虫のうち、現在までに確認された数は7,600種あまりであるが、調査が進めばおそらく10,000種を超えるものと思われる。今後トビムシ目、カゲロウ目、ハチ目、ハエ目も含め、さらに調査が進めば、まだ多数の種が追加されるであろう。

○ 地形と昆虫

本県は、濃尾・岡崎・豊橋の3平野の沖積低地とその周辺の洪積台地を含む平野部が、県域のおよそ40%を占めている。また尾張丘陵などの丘陵が15%、三河山地などの山地が45%となっている。

平野部は、近世以降、低湿地で過水性の三角州地域は開拓されて新田が造成され、氾濫原地域の後背湿地も水田化されて、水田耕作地帯が拡大した。また、乏水性の強い扇状地地域や洪積台地の浸食谷の谷頭などに多くの灌漑用ため池が造成された。これらの開発事業によって、広大な水田耕作地域が出現した。これらの止水域および平野部を流れる流水域には、幼虫時代を水中で生活するハグロトンボ、アキアカネなどのトンボの仲間、タガメ、ミズカマキリなどの水生カメムシ類、シマゲンゴロウ、ミズスマシなどの水生甲虫など多種多様な水生昆虫が生活している。

平野部の陸域、すなわち扇状地、洪積台地、氾濫原地域の自然堤防域に、人々は集落を形成して住み、周辺を畑作農地として利用した。近代以降の急激な人口増加によって土地開発が進行し、各所に都市が形成され、工業用地が造られ、現在では人の利用しない土地は皆無といってもよい。この地域では、特に保護されている場所や社寺林、一部の河川敷を除いては、二次林といえども自然の姿を残しているところは少ない。生息する昆虫は、明るい開放的な環境を好み、移動力の大きな種類が主流を占めており、分布域の広い、いわゆる普通種の生息の場となっている。チョウ類ではアゲハ、アオスジアゲハ、ヤマトシジミ、ベニシジミ、モンシロチョウ、キタキチョウ、ツマグロヒョウモン、キタテハ、イチモンジセセリ、ガ類ではイラガ、マエアカスカシノメイガ、ヤママユ、エビガラスズメ、チャドクガ、スジキリヨトウ、キシタバなど、バッタ・カマキリの仲間ではオンブバッタ、オオカマキリなど、セミ類ではアブラゼミ、クマゼミ、甲虫ではヒラタクワガタ、ヤマトモンシデムシ、ヤマトオサムシダマシ、ヘイケボタルなどである。

太平洋戦争後の1950年代以降、この地域の開発の勢いはすさまじく、愛知県の昆虫相も大きく変化した。開発とともに、食糧増産などのためでもあったが農薬使用のもたらした影響も大きい。たとえば、かつては水田から大量に発生していたアキアカネは、減少の一途をたどっているし、灌漑用の水路(小川)や水田に普通であったタガメは、今や絶滅危惧IB類である。

沖積平野は木曾川、矢作川、豊川などの大河川によって土砂が運ばれ形成された。その土砂は海岸の砂浜をも形成した。大河川や沿岸の砂地にはスナヨコバイ、カワラゴミムシ、カワラハンミョウ、オサムシモドキ、オオヒョウタンゴミムシ、ハマベゾウムシ等の昆虫が生息するが、そういった環境の減少に伴って、そこに生息する昆虫も減少の一途をたどり、カワラハンミョウでは現在県内での生息が確認できていない。

濃尾平野の東に南北に走る尾張丘陵は、標高の高いところで **200m**、波を打つように丘が連なっている。浸食谷も発達して、その谷頭にはため池もあり、変化に富んだ地形を形成している。

丘陵斜面やため池の上手の湿地には、ヒメヒカゲ、ハッチョウトンボ、シマウンカ、ハウチワウンカ、アカジマアシブトウンカ、ヒメタイコウチ、ケシミズカメムシ、ヒメヒラタナガカメムシ、ツヤネクイハムシ、カツラネクイハムシなどの湿地特有の昆虫が分布する。

人口密度の高い愛知県は、人の生活による土地改変の度合いが大きく、自然植生は二次植生がほとんどである。丘陵もその例にもれず、残された二次林はコナラ林、マツ林が多い。このような二次林には、ギフチョウ、コツバメ、ウラナミアカシジミ、スジグロシロチョウなどのチョウ類、ヤマダカレハ、オオミズアオ、オオシモフリスズメ、アミメキシタバ、アサマキシタバなどのガ類、クヌギカスミカメ、ナシカメムシ、クヌギカメムシ、ナカボシカメムシなどのカメムシ類、ノコギリクワガタ、クロカナブン、カブトムシなどの甲虫類が生息する。

また丘陵の小河川の流水域にはアサヒナカワトンボ、グンバイトンボ、ナガレカタビロアメンボ、シマアメンボ、モンキマメゲンゴロウ、ゲンジボタルなどが、止水域のため池にはオグマサナエ、マダラナニワトンボ、コオイムシ、ミズカマキリ、タイコウチ、タガメ、オオアメンボ、シマゲンゴロウ、クロゲンゴロウ、ゲンゴロウ、ガムシ、オオミズスマシ等が生息する。

愛知県の山地は尾張山地、三河山地、八名・弓張山地の三地域からなるが、最も高いのは三河山地の茶臼山で、標高 **1,415m** である。愛知県の山地は、高山帯、亜高山帯を欠き、いわゆる高山性の昆虫は産しない。隣県の岐阜県にはクモマツマキチョウ、コヒオドシ、タカネハマキ、アルプスヤガ、サザナミナミシャク、オンタケクロヨトウ、カオジロトンボ、オンタケクロナガオサムシ、トホシハナカミキリ、ヌタツカゾウムシなどの高山性昆虫が生息するが本県には産しない。

県内の山地では、自然状態の森林が残存するところは稀で、スギ・ヒノキの人工林とコナラなどの広葉樹の二次林がほとんどである。針葉樹林に生息する昆虫は比較的少ないが、ナカウスエダシヤク、マツカレハ、クロスズメ、スギドクガ、ケンモンキリガ、マツキリガ、カタビロクサビウンカ、マツアワフキ、ハルゼミ、エゾゼミ、チッチゼミ、マツトビカスミカメ、マツヒラタナガカメムシ、オオトラカミキリ、トゲフタオタマムシ、ヤマトシロオビトラカミキリなどが見られる。それに比べ広葉樹の二次林に生息する昆虫は種々で個体数も多い。例えばチョウ類ではカラスアゲハ、メスアカミドリシジミ、スギタニルリシジミ、クモガタヒョウモン、スミナガシ、クロヒカゲなど、ガ類ではクロスタビガ、ブナアオシャチホコ、アマギシャチホコ、アオヤマキリガ、ミカワキョトウ、シロシタバ、ジョナスキシタバなど、カメムシ目ではエゾハルゼミ、ハラビロマキバサシガメ、スコットカメムシ、アオクブトカメムシなど、甲虫目ではミヤマクワガタ、スジクワガタなどである。

三河山地の溪流からは、ムカシトンボ、ヒメクロサナエ、ナベブタムシ、タニガワミズギワカメムシ、オナガミズスマシ、サワダマメゲンゴロウなどの生息が確認されている。ムカシトンボは一世代数年を要し、良好な自然環境の指標種である。

○ 北進する昆虫と地球温暖化

1980年代に入って、それまでは県内の分布記録がなかった昆虫の生息が確認されたり、わずかな記録しかなかった昆虫が数多く発生して、県内各地で普通に見られるようになったりした。チョウ類ではナガサキアゲハ、ムラサキツバメ、ヤクシマルリシジミ、サツマシジミ、ツマグロヒョウモンなど、ガ類ではハマオモトヨトウ、ホソバミドリヨトウ、トンボ目ではタイワンウチワヤンマ、カメムシ目ではヨコヅナサシガメ、ミナミトゲヘリカメムシ、シロヘリクチブトカメムシ、甲虫目ではラミーカミキリなどである。これらの昆虫は、南方系種が分布地を次第に北の方に拡大して、愛知県で生息が確認されるようになったものである。昆虫の北進現象は、地球の温暖化と関係があるのではないかとされている。

○ 放チョウ（虫）と生態系の攪乱

数年前、庄内川の堤防でホソオチョウ（チョウ目アゲハチョウ科）の生息が確認され、2008年には豊田市の一部地域で大発生が確認された。ホソオチョウは元来日本列島には分布せず、朝鮮半島などに分布するチョウである。日本では1978年に東京都で生息が確認され、関東の各県、京都府、大阪府、岡山県などで記録されるようになり、1998年には隣の岐阜県で発生が確認された。飛翔力ある昆虫の中には、台風や低気圧などの風に乗って外国から飛来する種類もあるが、ホソオチョウの飛翔力は弱く、自然に日本に侵入してきたのではなく、誰かによって外国から持ち込まれて、野外に放たれたものと考えられている。岐阜県や愛知県への侵入も、放たれた幼虫や卵によるものではないかと思われる。

ホソオチョウの幼虫はジャコウアゲハと同じウマノスズクサを食べて育つ。その侵入地では、競合によってジャコウアゲハの生息に何らかの影響を及ぼす懸念が生じている。愛知県のチョウが1種増えることになるが、人為による生態系の攪乱は、将来禍根を残す事にもなりかねない。

かつて、侵入したアオマツムシやヒロヘリアオイラガは街路樹の害虫として定着し、イネミズゾウムシは今もなおイネ害虫として駆除の対象である。現在は外国産のカブトムシやクワガタムシが、ペットショップで容易に入手できる時代である。これらが野外に放たれて世代を重ね、すでに在来種との間に交雑個体が生まれるなど深刻な生態的問題が生じている。

日本産の昆虫でも、本来の分布域でない地域へ持ち込んで放すと、遺伝的や生態的に何らかの問題を生じることが確認されている。ゲンジボタルについては東日本に生息する集団と西日本集団とでは光り方が異なり、遺伝的にはさらに多くの集団に分かれることが判っている。ゲンジボタルの餌として持ち込まれるカワニナと共に、生息地間の人的移動は遺伝的攪乱を生じさせるばかりでなく、ゲンジボタルの種そのものを脅かす重大な問題となる可能性を秘めている。ギフチョウなどでは絶滅防止の目的で他所の個体群を持ち込むことを耳にするが、餌に適応した地域固有の遺伝形質が発達していることが判っており、たとえ善意であっても慎まなければならない。

現在日本には3万種を超える昆虫の生息が確認されている。愛知県内に限っても、昆虫の生息状況を確認する作業は、きわめて多くの時間と労力を有する。しかも近年の昆虫の生息動態はめざましく変化しており、それが故に、より生息調査の必要性が増していると考えられる。今回は現状での現地調査と資料をふまえた結果をまとめたが、レッドデータブック作成のためだけではなく、継続した現地調査の必要性を痛感する。

愛知県における絶滅危惧種の概況

今回の成果から、以下の総合計 195 種が選定された。

絶滅 (EX)	10 種	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	37 種
絶滅危惧ⅠA類 (CR)	16 種	準絶滅危惧 (NT)	74 種
絶滅危惧ⅠB類 (EN)	25 種	情報不足 (DD)	33 種

今回の選定作業は、前回 (2002 年発行) に次ぐ見直し作業と位置づけられる。選定対象となる県内に生息する約 7,600 種の昆虫を評価し選定する作業は、見直し作業とてはいうものの至難の業である。そのため、まず現在考え得るかぎりの調査実施体制と資料収集体制を構築した。すなわち昆虫の目ごとに専門の研究者を中心に選定する体制をとり、必要に応じその目ごとに協力員を配置した。また、地元の昆虫関係学会 (日本昆虫学会東海支部、日本鱗翅学会東海支部) と昆虫関係同好会 (名古屋昆虫同好会、三河昆虫研究会、三河生物同好会) に広く呼びかけ、資料収集に当たった。

本来レッドリストとは、過去から現在にかけて、生息地域や個体密度が減少している種 (減少種) のありさまを表すものとする。しかし上述のように戦後の環境変化は甚だしく、きわめて多くの昆虫種が激減し、絶滅に瀕している現状にある。一方その減少状況は多くの昆虫では記録にとどめられていない実態があり、昆虫のグループや種ごとに見ればかなりの情報量の偏りがあるのが現状である。そのような状況にあるとはいうものの、昆虫全体としては、可能な限り定量評価をした。しかし定量評価の不可能な目 (類) に関しては、生態的に情報量の多い減少種を対象とし、さらに生態情報の少ない種においては、生息する環境の著しく悪化していることを条件とした。また、単に標本が得難いという視点での希少種は扱わないことを申し合わせた。しかし選定にあたる個人の、経験や絶滅危惧種に関する認識の差があることも事実で、そのことが今回の選定に影響を与えていることも理解しなくてはならない。この件に関しては前回のレッドデータブックでも記されているが、今回は、前回の選定状況を礎とし、選定者の評価のより平準化と共に、現状に沿った選定結果となるべく推し進めた。その結果、前回と比較して、新掲載種 45 種、除外種 36 種、ランクアップないしはランクダウン種 40 種という大幅な変更となった。

今回、既存種に対する選定種の割合は、既存種を 7,600 種とすると、わずか 2.6% にすぎない。身近な普通種でもその個体数の減少を実感する種も多いが、そのような種を絶滅危惧種に選定した場合、きわめて膨大な種数を選定せざるを得なくなる。そのため掲載種の重みが薄れ、レッドデータブックの社会的影響を考えた場合、その選定種数の多さに收拾がつかなくなるというジレンマに陥る。現状ではそれらを踏まえての選定作業となるため、残念ながら、掲載種数をどの程度の規模にするかは、きわめて人為的な作業となる。今回選定にあたっては、前回の選定規模を踏まえ、追加する種を極力少なくする方向で選定がなされた。

次に選定された種についての概要を述べる。

絶滅種については、標本が現存していないために評価外としたオオウラギンヒョウモンは例外で、江戸時代の地層から発見されたシャープゲンゴロウモドキ、非常に古い記録だけが発見されたトゲナベバタムシ、過去の生息情報のみでそれ以降の追加記録がないために絶滅種に格上げされたダイコクコガネ、ヒメビロウドカミキリ、アサカミキリ、マダラシマゲンゴロウ、シルビアシジミが新たに増加した。この増加傾向は残念ながら今後も続くであろう。

絶滅危惧種に関してはコバネアオイトトンボなどのトンボ類をはじめとし、マルガタゲンゴロウ

などのゲンゴロウ類、またコバンムシなどの水生昆虫が非常に多く選定された。これは水域環境の劣化と、それに伴う生息昆虫の激減を如実に表している。特に湿地性種は現存する各湿地間の交流が保てるかどうか、存続にとって最重要視すべき点で、一定エリア内にある程度の数の湿地が残されていることが必要であろう。

林にはかつてのように人手が入らなくなったため、樹林性種は比較的安定した傾向にあるが、将来伐採などに伴う森林荒廃による衰亡がくる可能性が常に危惧される。

草原は単に草刈の対象としか扱われない風潮があり、面積減少や荒廃が極めて著しい。その結果、ホシチャバネセセリなどのセセリチョウやゴマシジミなど草本依存性昆虫は危機的である。河川や浜辺などに発達する草地や砂地などの裸地に生息するカワラハンミョウ、オオヒョウタンゴムシ、シルビアシジミなども同様で、草地や裸地あるいは氾濫環境の回復には一刻も猶予がない。河川氾濫地を中心とする生活圏を持ち、土地開発に伴う裸地にその生活の場を得て分布拡大傾向にあるツマグロキチョウは、皮肉な結果であろう。

元々どこにでもいた昆虫は、その生活環境が人工的に改変されたため生息できなくなり、細々と生きながらえることとなる。その結果絶滅危惧に瀕する状況に陥ると、それまで絶滅とは無関係であった採集圧が、絶滅に拍車をかけるということになる。絶滅をくいどめる生態的な情報は、それら昆虫の採集を中心とする観察、比較、情報等の集積によって得られるにもかかわらず、結果として、採集を禁止せざるを得ないという負のサイクルへと向かうのであれば、非常に残念なことである。

絶滅危惧に瀕している種は、本来の自然保護はどうあるべきかを考え、今後どうすべきかを考えるさまざまな示唆を与えてくれる。

【参考：除外種リスト】

「レッドデータブックあいち 2002 動物編」掲載種のうち、今回の見直しによってリストから除外された種とその理由は以下のとおりである。

除外種

No.	目名	科名	和名	見直し前 県ランク	除外理由
1	トンボ	サナエトンボ	ホンサナエ	NT	調査が進み、新たな産地が増えた
2	トンボ	ヤンマ	コシボソヤンマ	NT	調査が進み、新たな産地が増えた
3	バッタ	カマドウマ	クチキウマ	DD	評価対象外とした(ミカワクチキウマとチビクチキウマに細分化された)
4	コウチュウ	オサムシ	ヒメキノゴムシ	VU	調査が進み、新たな産地が増えた
5	コウチュウ	コガシラミズムシ	マルコガシラミズムシ	DD	評価対象外とした(クビボソコガシラミズムシの異名とされた)
6	コウチュウ	エンマムシ	ヤマトエンマムシ	DD	調査が進み、新たな産地が増えた
7	コウチュウ	ムネアカセンチコガネ	ムネアカセンチコガネ	DD	調査が進み、新たな産地が増えた
8	コウチュウ	コメツクムシ	ババムナビロコメツク	VU	調査が進み、新たな産地が増えた
9	トビケラ	カタツムリトビケラ	カタツムリトビケラ	DD	調査が進み、新たな産地が増えた
10	チョウ	セセリチョウ	ヘリグロチャバネセセリ	DD	評価対象外とした(標本が現存しない)
11	チョウ	アゲハチョウ	ミカドアゲハ	DD	複数の箇所継続的に発生、人為的移入の可能性もあり
12	チョウ	アゲハチョウ	ミヤマカラスアゲハ	NT	複数の箇所継続的に発生、新たな産地も増えた
13	チョウ	シロチョウ	ツマグロキチョウ	VU	複数の箇所継続的に発生、新たな産地も増えた
14	チョウ	シロチョウ	ヤマキチョウ	DD	評価対象外とした(偶産種(他県から飛来)と考えられる)
15	チョウ	シジミチョウ	スギタニルリシジミ	VU	三河山間部に広く分布し、継続的に発生している
16	チョウ	シジミチョウ	アイノドリシジミ	NT	三河山間部を中心に広く分布し、継続的に発生している
17	チョウ	シジミチョウ	ヒサマツミドリシジミ	NT	三河山間部を中心に広く分布し、継続的に発生している
18	チョウ	シジミチョウ	メスアカミドリシジミ	NT	三河山間部を中心に広く分布し、継続的に発生している
19	チョウ	シジミチョウ	ミドリシジミ	NT	県内各地に分布し、新たな産地も増えた
20	チョウ	シジミチョウ	ゴイシシジミ	NT	調査が進み、採集記録が増えた
21	チョウ	シジミチョウ	ウラキンシジミ	VU	既産地で継続的に発生、新たな産地も増えた
22	チョウ	タテハチョウ	サカハチチョウ	NT	調査が進み、採集記録が増えた

23	チョウ	タテハチョウ	ウラギンヒョウモン	NT	調査が進み、採集記録が増えた
24	チョウ	タテハチョウ	オオウラギンヒョウモン	EX	評価対象外とした(標本が現存しない)
25	チョウ	タテハチョウ	ホシミスジ	VU	食草の人為的移動のためもあり、新たな産地が増えた
26	チョウ	タテハチョウ	シータテハ	DD	評価対象外とした(偶産種(他県から飛来)と考えられる)
27	チョウ	コバネガ	マエモンコバネ	DD	調査の結果、今回の見直しでは該当する評価区分なしとした
28	チョウ	ツツミノガ	ノギククロツツミノガ	DD	調査の結果、今回の見直しでは該当する評価区分なしとした
29	チョウ	カギバ	スカシカギバ	DD	調査が進み、新たな産地が増えた
30	チョウ	シャクガ	タナカヒメシャク	DD	調査の結果、今回の見直しでは該当する評価区分なしとした
31	チョウ	シャクガ	ヒメクロオビフユナミシャク	NT	調査の結果、今回の見直しでは該当する評価区分なしとした
32	チョウ	シャクガ	トガリスジグロエダシャク	DD	調査の結果、今回の見直しでは該当する評価区分なしとした
33	チョウ	シャクガ	タケウチエダシャク	NT	調査の結果、今回の見直しでは該当する評価区分なしとした
34	チョウ	ヤガ	アトジロキリガ	NT	調査が進み、新たな産地が増えた
35	チョウ	ヤガ	フシキキシタバ	NT	調査が進み、新たな産地が増えた
36	チョウ	ヤガ	シーモンアツバ	DD	調査の結果、今回の見直しでは該当する評価区分なしとした

愛知県昆虫類レッドリスト

目の範囲、名称、配列は、「日本産野生生物目録—本邦産野生動植物の種の現状—(無脊椎動物編II)」(環境省編,1995)に準拠した。目内の科の範囲、名称、配列は、目ごとに以下の文献を基に、新しい知見を加え整理した。なお、チョウ目については、チョウ類とガ類に区分し、チョウ類・ガ類の順に配列した。

- ・環境省編, 1995. 日本産野生生物目録—本邦産野生動植物の種の現状—(無脊椎動物編II). 財団法人自然環境研究センター. (トンボ目、カメムシ目の一部、コウチュウ目、ハエ目、チョウ目チョウ類)
- ・朝比奈正二郎, 1991. 日本産ゴキブリ類. 中山書店. (ゴキブリ目)
- ・岡田正哉, 2001. カマキリのすべて. トンボ出版. (カマキリ目)
- ・日本直翅類学会編, 2006. バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑. 北海道大学出版会. (バッタ目)
- ・岡田正哉, 1999. ナナフシのすべて. トンボ出版. (ナナフシ目)
- ・川合禎次・谷田一三 共編, 2005. 日本産水生昆虫 科・属・種への検索. 東海大学出版会. (カメムシ目の一部、トビケラ目)
- ・寺山守, 2004. 日本産有剣膜翅類目録. 日本蟻類研究会紀要, 2, 123pp. (ハチ目)
- ・井上寛ほか, 1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社. (チョウ目ガ類)

絶滅(EX)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	カメムシ	ナベバタムシ	トゲナベバタムシ	<i>Aphelocheirus nawae</i> Nawa	VU
2	コウチュウ	ゲンゴロウ	スジゲンゴロウ	<i>Hydaticus satoi</i> Wewalka	CR+EN
3	コウチュウ	ゲンゴロウ	マダラシマゲンゴロウ	<i>Hydaticus thermonectoides</i> Sharp	CR+EN
4	コウチュウ	ゲンゴロウ	コガタノゲンゴロウ	<i>Cybister tripunctatus orientalis</i> Gschwendtner	CR+EN
5	コウチュウ	ゲンゴロウ	シャープゲンゴロウモドキ	<i>Dytiscus sharpi</i> Wehncke	CR+EN
6	コウチュウ	コガネムシ	ダイコクコガネ	<i>Copris ochus</i> (Motschulsky)	VU
7	コウチュウ	カミキリムシ	ヒメビロウドカミキリ	<i>Acalolepta degener</i> (Bates)	
8	コウチュウ	カミキリムシ	アサカミキリ	<i>Thyestilla gebleri</i> (Faldermann)	VU
9	チョウ	シジミチョウ	シルビアシジミ	<i>Zizina emelina</i> (de l'Orza)	CR+EN
10	チョウ	タテハチョウ	ヒョウモンモドキ	<i>Melitea scotosia</i> Butler	CR+EN

絶滅危惧 A類(CR)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	トンボ	アオイイトンボ	コバネアオイイトンボ	<i>Lestes japonicus</i> Selys	CR+EN
2	トンボ	トンボ	ベッコウトンボ	<i>Libellula angelina</i> Selys	CR+EN
3	トンボ	トンボ	オオキトンボ	<i>Sympetrum uniforme</i> (Selys)	CR+EN
4	カメムシ	コバンムシ	コバンムシ	<i>Ilyocoris cimicoides exclamatoris</i> (Scott)	VU
5	コウチュウ	ハンミョウ	カワラハンミョウ	<i>Cicindela laetescripta</i> Motschulsky	VU
6	コウチュウ	オサムシ	フタモンマルクビゴミムシ	<i>Nebria pulcherrima</i> Bates	NT
7	コウチュウ	オサムシ	キベリマルクビゴミムシ	<i>Nebria livida angulata</i> Banninger	NT
8	コウチュウ	ゲンゴロウ	マルガタゲンゴロウ	<i>Graphoderus adamsii</i> (Clark)	NT
9	コウチュウ	クワガタムシ	オオクワガタ	<i>Dorcus hopei binodulosus</i> Waterhouse	VU
10	コウチュウ	カミキリムシ	チャイロヒメコブハナカミキリ	<i>Macropidonia japonica japonica</i> (Ohbayashi)	
11	コウチュウ	カミキリムシ	タケウチホソハナカミキリ	<i>Strongalia takeuchii</i> Matsushita et Tamanuki	
12	チョウ	セセリチョウ	ホシチャバネセセリ	<i>Aeromachus inachus</i> (Ménétrières)	CR+EN
13	チョウ	セセリチョウ	チャマダラセセリ	<i>Pyrgus maculatus</i> (Bremer et Grey)	CR+EN

14	チョウ	シジミチョウ	ゴマシジミ	<i>Maculinea teleius kazamoto</i> (H. Druce)	VU
15	チョウ	シジミチョウ	ヒメシジミ	<i>Plebejus argus micrargus</i> (Butler)	NT
16	チョウ	ジャノメチョウ	ヒメヒカゲ	<i>Coenonympha oedippus</i> ssp.	CR+EN

絶滅危惧 B類 (EN)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	トンボ	イトトンボ	ヒヌマイイトトンボ	<i>Mortonagrion Hirosefi</i> Asahina	CR+EN
2	トンボ	モノサシトンボ	グンバイイトトンボ	<i>Platycnemis foliacea sasakii</i> Asahina	NT
3	トンボ	サナエトンボ	コサナエ	<i>Trigomphus melampus</i> (Selys)	
4	トンボ	エゾトンボ	エゾトンボ	<i>Somatochlora viridiaenea</i> (Uhler)	
5	トンボ	トンボ	キトンボ	<i>Sympetrum croceolum croceolum</i> (Selys)	
6	トンボ	トンボ	マダラナニワトンボ	<i>Sympetrum maculatum</i> Oguma	CR+EN
7	カメムシ	コオムシ	タガメ	<i>Lethocerus deyrolli</i> (Vuillefroy)	VU
8	コウチュウ	ハンミョウ	シロヘリハンミョウ	<i>Cicindela yuasai yuasai</i> Nakane	
9	コウチュウ	オサムシ	コハンミョウモドキ	<i>Elaphrus punctatus</i> Motschulsky	VU
10	コウチュウ	オサムシ	ハバメクラチビゴミムシ	<i>Trechiana habeii</i> (S. Uéno)	
11	コウチュウ	オサムシ	ツツイキバナガミズギワゴミムシ	<i>Armatocillenus tsutsuii</i> S. Uéno	NT
12	コウチュウ	コガシラミズムシ	キイロコガシラミズムシ	<i>Haliplus eximius</i> Clark	NT
13	コウチュウ	コガシラミズムシ	マダラコガシラミズムシ	<i>Haliplus sharpi</i> Wehncke	NT
14	コウチュウ	ゲンゴロウ	ゲンゴロウ	<i>Cybister japonicus</i> Sharp	NT
15	コウチュウ	クワガタムシ	ツヤハダクワガタ	<i>Ceruchus lignarius monticola</i> Nakane	
16	コウチュウ	クワガタムシ	ヒメオオクワガタ	<i>Dorcus montivagus montivagus</i> (Lewis)	
17	コウチュウ	コガネムシ	クロモンマゴソコガネ	<i>Aphodius variabilis</i> Waterhouse	NT
18	コウチュウ	カミキリムシ	イガブチヒゲハナカミキリ	<i>Stictoleptura igai</i> (Tamanuki)	
19	コウチュウ	カミキリムシ	ヒメヨツスジハナカミキリ	<i>Leptura kusamai</i> Ohbayashi et Nakane	
20	コウチュウ	カミキリムシ	ヨツボシカミキリ	<i>Stenygrium quadrinotatum</i> Bates	VU
21	チョウ	セセリチョウ	ミヤマチャバネセセリ	<i>Pelopidas jansonis</i> (Butler)	
22	チョウ	シロチョウ	スジボソヤマキチョウ	<i>Gonepteryx aspasia nipponica</i> Bollow	
23	チョウ	シジミチョウ	ハヤシドリシジミ	<i>Favonius ultramarinus</i> (Fixsen)	
24	チョウ	シジミチョウ	クロシジミ	<i>Niphanda fusca</i> (Bremer et Grey)	CR+EN
25	チョウ	シジミチョウ	ミヤマカラスシジミ	<i>Strymonidia mera</i> (Janson)	

絶滅危惧 類 (VU)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	トンボ	イトトンボ	オオイトトンボ	<i>Cercion sieboldii</i> (Selys)	
2	トンボ	イトトンボ	ベニイトトンボ	<i>Ceriagrion nipponicum</i> Asahina	VU
3	トンボ	サナエトンボ	フタスジサナエ	<i>Trigomphus interruptus</i> (Selys)	NT
4	トンボ	サナエトンボ	オグマサナエ	<i>Trigomphus ogumai</i> (Asahina)	VU
5	トンボ	ヤンマ	ネアカヨシヤンマ	<i>Aeschnophlebia anisoptera</i> Selys	NT
6	トンボ	ヤンマ	アオヤンマ	<i>Aeschnophlebia longistigma</i> Selys	
7	トンボ	エゾトンボ	ハネビロエゾトンボ	<i>Somatochlora clavata</i> Oguma	VU
8	バッタ	ヒバリモドキ	ハマスズ	<i>Dianemobius csikii</i> (Bolivar)	
9	バッタ	バッタ	ヤマトマダラバッタ	<i>Epacromius japonicus</i> (Shiraki)	
10	カメムシ	イトアメンボ	イトアメンボ	<i>Hydrometra albolineata</i> (Scott)	VU
11	カメムシ	アメンボ	ババアメンボ	<i>Gerris babai</i> Miyamoto	NT
12	コウチュウ	ハンミョウ	ホソハンミョウ	<i>Cicindela gracilis</i> Pallas	NT
13	コウチュウ	オサムシ	セアカオサムシ	<i>Hemicarabus tuberculatus</i> (Dejean et Boisduval)	
14	コウチュウ	オサムシ	オオヒョウタンゴミムシ	<i>Scarites sulcatus</i> Olivier	NT
15	コウチュウ	オサムシ	ハマベゴミムシ	<i>Pogonus japonicus</i> Putzeys	
16	コウチュウ	オサムシ	ヒトツメアオゴミムシ	<i>Chlaenius delicolus</i> Bates	
17	コウチュウ	オサムシ	クビナガキベリアオゴミムシ	<i>Chlaenius prostenus</i> Bates	
18	コウチュウ	ゲンゴロウ	クロゲンゴロウ	<i>Cybister brevis</i> Aubé	
19	コウチュウ	ハネカクシ	オオツノハネカクシ	<i>Bledius salsus</i> Miyatake	
20	コウチュウ	シデムシ	ヤマトモンシデムシ	<i>Nicrophorus japonicus</i> Harold	NT
21	コウチュウ	コガネムシ	オオチャイロハナムグリ	<i>Osmoderma opicum</i> Lewis	NT
22	コウチュウ	ヒメドロムシ	クロサワドロムシ	<i>Neoriohelmis kurosawai</i> Nomura	
23	コウチュウ	タマムシ	クロマダラタマムシ	<i>Nipponobuprestis querceti</i> (Saunders)	
24	コウチュウ	コメツキムシ	ツヤヒラタコメツキ	<i>Aganohypogonus mirabilis</i> (Miwa)	
25	コウチュウ	コメツキムシ	シタラミヤマヒサゴコメツキ	<i>Homotechnes motsulskyi suzukii</i> Ôhira	
26	コウチュウ	ハムシ	カツラネクイハムシ	<i>Donacia katsurai</i> Kimoto	
27	コウチュウ	ゾウムシ	ハマベゾウムシ	<i>Aphela gotoi</i> (Chûjō et Voss)	
28	トビケラ	フトヒゲトビケラ	ヒトスジキソトビケラ	<i>Psilotreata japonica</i> Banks	
29	チョウ	セセリチョウ	ギンイチモンジセセリ	<i>Leptalina unicolor</i> (Bremer et Grey)	NT
30	チョウ	セセリチョウ	コキマダラセセリ	<i>Ochlodes venatus</i> (Bremer et Grey)	
31	チョウ	セセリチョウ	スジグロチャバネセセリ	<i>Thymelicus leoninus</i> (Butler)	NT
32	チョウ	シジミチョウ	ムモンアカシジミ	<i>Shirozua jonsai</i> (Janson)	
33	チョウ	シジミチョウ	フジドリシジミ	<i>Shibatanozephyrus fujisanus</i> (Matsumura)	
34	チョウ	シジミチョウ	クロットバメシジミ	<i>Tongeia fischeri</i> (Eversmann)	NT
35	チョウ	ジャノメチョウ	クロヒカゲモドキ	<i>Lethe marginalis</i> Motschulsky	VU
36	チョウ	ジャノメチョウ	ウラジャノメ	<i>Lopinga achine achinoides</i> (Butler)	
37	チョウ	ジャノメチョウ	ウラナミジャノメ	<i>Ypthima multistriata</i> Butler	VU

準絶滅危惧 (NT)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	トンボ	イトトンボ	モートンイトトンボ	<i>Mortonagrion selenion</i> (Ris)	NT
2	トンボ	サナエトンボ	キイロサナエ	<i>Asiagomphus pryeri</i> (Selys)	
3	トンボ	サナエトンボ	メガネサナエ	<i>Stylurus oculatus</i> (Asahina)	NT
4	トンボ	サナエトンボ	ナゴヤサナエ	<i>Stylurus nagoyanus</i> (Asahina)	NT
5	トンボ	エゾトンボ	トラフトンボ	<i>Epitheca marginata</i> (Selys)	
6	トンボ	エゾトンボ	キイロヤマトンボ	<i>Macromia daimoji</i> Okumura	NT
7	カマキリ	カマキリ	ヒナカマキリ	<i>Amantis nawai</i> (Shiraki)	
8	バッタ	マツムシ	クチキコオロギ	<i>Duolandrevus ivani</i> (Gorochov)	
9	カメムシ	マルウンカ	アカジマアシブトウンカ	<i>Ommatidiotus japonicus</i> Y.Hori	
10	カメムシ	タイコウチ	ヒメタイコウチ	<i>Nepa hoffmanni</i> Esaki	
11	カメムシ	ナベブタムシ	ナベブタムシ	<i>Aphelocheirus vittatus</i> Matsumura	
12	カメムシ	アメンボ	オオアメンボ	<i>Aquarius elongatus</i> (Uhler)	
13	カメムシ	アメンボ	エサキアメンボ	<i>Limnoporus esakii</i> (Miyamoto)	NT
14	コウチュウ	カワラゴミムシ	カワラゴミムシ	<i>Omophron aequalis</i> Morawitz	
15	コウチュウ	オサムシ	キバネキバナガミズギワゴミムシ	<i>Armatocillenus aestuarii</i> S.Uéno et Habu	NT
16	コウチュウ	オサムシ	ジャアナヒラタゴミムシ	<i>Jujiroa ana</i> (S.Uéno)	VU
17	コウチュウ	オサムシ	ホラズミヒラタゴミムシ	<i>Jujiroa troglodytes</i> S.Uéno	
18	コウチュウ	コガシラミズムシ	クビボソコガシラミズムシ	<i>Haliplus japonicus</i> Sharp	
19	コウチュウ	コガシラミズムシ	ヒメコガシラミズムシ	<i>Haliplus ovalis</i> Sharp	
20	コウチュウ	コツブゲンゴロウ	ムツボシツヤコツブゲンゴロウ	<i>Canthydrus politus</i> (Sharp)	
21	コウチュウ	コツブゲンゴロウ	キボシチビコツブゲンゴロウ	<i>Neohydrocoptus bivittis</i> (Motschulsky)	NT
22	コウチュウ	ゲンゴロウ	トダセズゲンゴロウ	<i>Copelatus nakamurai</i> Guéorguiev	NT
23	コウチュウ	ゲンゴロウ	シマゲンゴロウ	<i>Hydaticus bowringi</i> Clark	
24	コウチュウ	ミズスマシ	コオナガミズスマシ	<i>Orectochilus punctipennis</i> Sharp	
25	コウチュウ	ホソガムシ	ヤマトホソガムシ	<i>Hydrochus japonicus</i> Sharp	
26	コウチュウ	エンマムシ	アラメエンマムシ	<i>Zabromorphus punctulatus</i> (Wiedemann)	
27	コウチュウ	コガネムシ	ヤマトケシマゴソガネ	<i>Psammodius japonicus</i> Harold	
28	コウチュウ	コガネムシ	アカマダラハナムグリ	<i>Poecilophilides rusticola</i> (Burmeister)	DD
29	コウチュウ	コガネムシ	クロカナブン	<i>Rhomborrhina polita</i> Waterhouse	
30	コウチュウ	コガネムシ	ヤマトアオドウガネ	<i>Anomala japonica</i> Arrow	
31	コウチュウ	ヒメドロムシ	ミヤモトアシナガミゾドロムシ	<i>Stenelmis miyamotoi</i> Nomura et Nakane	
32	コウチュウ	ヒメドロムシ	ヨコミゾドロムシ	<i>Leptelmis gracilis</i> Sharp	VU
33	コウチュウ	タマシ	トゲフタオタマシ	<i>Dicerca tibialis</i> Lewis	
34	コウチュウ	コメツキムシ	ジュウジミズキワコメツキ	<i>Fleutiauxellus cruciatus</i> (Candèze)	
35	コウチュウ	コメツキムシ	サトヤマシモフリコメツキ	<i>Actenicerus kidonoi</i> Ôhira	
36	コウチュウ	コメツキムシ	アカアシコハナコメツキ	<i>Paracardiophorus sequens sequens</i> (Candèze)	
37	コウチュウ	アカハネムシ	オカモトツヤアナハネムシ	<i>Pedilus okamotoi</i> (Kôno)	
38	コウチュウ	ナガクチキムシ	ミスジナガクチキ	<i>Stenoxylita trialbofasciata</i> (Hayashi et Kato)	
39	コウチュウ	カミキリムシ	ケブカマルクビカミキリ	<i>Atimia okayamensis</i> Hayashi	
40	コウチュウ	カミキリムシ	フタコブルリハナカミキリ	<i>Stenocorus coeruleiopennis</i> (Bates)	
41	コウチュウ	カミキリムシ	トサヒメハナカミキリ	<i>Pidonia approximata</i> Kuboki	
42	コウチュウ	カミキリムシ	ヒゲブトハナカミキリ	<i>Pachypidonia bodemeyeri</i> Pic	
43	コウチュウ	カミキリムシ	ヒゲジロホソコバネカミキリ	<i>Necydalis odaï</i> Hayashi	
44	コウチュウ	カミキリムシ	オオホソコバネカミキリ	<i>Necydalis solida</i> Bates	
45	コウチュウ	カミキリムシ	ヨコヤマヒゲナガカミキリ	<i>Dolichoprosopus yokoyamai</i> (Gressitt)	
46	コウチュウ	ハムシ	オオミズクサハムシ	<i>Plateumaris constricticollis</i> (Jacoby)	
47	コウチュウ	ハムシ	キヌツヤミズクサハムシ (スゲハムシ)	<i>Plateumaris sericea</i> (Linnaeus)	
48	コウチュウ	チビゾウムシ	ヒンチビゾウムシ	<i>Nanophyes japonicus</i> Roelofs	
49	ハチ	クビナガキバチ	アカズクビナガキバチ	<i>Euxiphydria potanini</i> (Jakovlev)	
50	ハチ	セイボウ	フタツバトゲセイボウ	<i>Elampus bidens tristis</i> Tsuneki	
51	ハチ	ドロバチモドキ	ニッポンハナダカバチ	<i>Bembix niponica</i> F.Smith	NT
52	ハチ	ハキリバチ	キヌゲハキリバチ	<i>Megachile kobensis</i> Cockerell	
53	ハチ	ギングチバチ	ササキギングチ	<i>Ectemnius furuichii</i> (Iwata)	
54	ハチ	コマユバチ	ウマノオバチ	<i>Eurobracon yokohamae</i> (Dalla Torre)	NT
55	トビケラ	ナガレトビケラ	オオナガレトビケラ	<i>Himalopsyche japonica</i> (Morton)	NT
56	トビケラ	コエグリトビケラ	イワコエグリトビケラ	<i>Manophylax futabae</i> Nishimoto	
57	トビケラ	ニンギョウトビケラ	コブニンギョウトビケラ	<i>Larcaria akagiae</i> Nishimoto et Tanida	
58	トビケラ	ヒゲナガトビケラ	ヒゲナガトビケラ属の一種	<i>Leptocerus moselyi</i> (Martynov)	
59	トビケラ	ホソバトビケラ	イトウホソバトビケラ	<i>Molannodes itoae</i> Fuller et Wiggins	
60	チョウ	アゲハチョウ	ギフチョウ	<i>Luehdorfia japonica</i> Leech	VU
61	チョウ	シジミチョウ	オナガシジミ	<i>Araragi enthea enthes</i> (Janson)	
62	チョウ	シジミチョウ	エゾミドリシジミ	<i>Favonius jezoensis</i> (Matsumura)	
63	チョウ	タテハチョウ	ウラギンシジヒョウモン	<i>Argyronome laodice japonica</i> (Ménétrières)	NT
64	チョウ	タテハチョウ	オオムラサキ	<i>Sasakia charonda charonda</i> (Hewitson)	NT
65	チョウ	ジャノメチョウ	オオヒカゲ	<i>Ninguta schrenckii</i> (Ménétrières)	
66	チョウ	ツトガ	ヒメコミズメイガ	<i>Parapoynx rectilinealis</i> Yoshiyasu	
67	チョウ	アゲハモドキガ	フジキオビ	<i>Schistomitra funeralis</i> Butler	

68	チョウ	ヤガ	サヌキキリガ	<i>Elwesia sugii</i> Yoshimoto
69	チョウ	ヤガ	イセキリガ	<i>Agrochola sakabei</i> Sugi
70	チョウ	ヤガ	オオチャバネヨトウ	<i>Nonagria puengeleri</i> (Schawerda)
71	チョウ	ヤガ	エゾスジヨトウ	<i>Doerriessa striata crambiformis</i> Sugi
72	チョウ	ヤガ	エチゴハガタヨトウ	<i>Asidemia inexpecta inexpecta</i> (Sugi)
73	チョウ	ヤガ	カバフキシタバ	<i>Catocala mirifica</i> Butler
74	チョウ	ヤガ	オオキイロアツバ	<i>Pseudalelimma miwai</i> Inoue

情報不足 (DD)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	ゴキブリ	オオゴキブリ	オオゴキブリ	<i>Panesthia angustipennis spadica</i> (Shiraki)	
2	バッタ	カマドウマ	ミカワクチキウマ	<i>Anoplophilus okadai</i> Ishikawa	
3	バッタ	カマドウマ	チビクチキウマ	<i>Anoplophilus minor</i> Ishikawa	
4	バッタ	クツワムシ	タイワンクツワムシ	<i>Mecopoda elongata</i> (Linnaeus)	
5	バッタ	ヒシバッタ	ギフヒシバッタ	<i>Tetrix gifuensis</i> Storozhenko, Ichikawa et Uchida	
6	ナナフシ	ナナフシムシ	ホンドエダナナフシ	<i>Phraortes illepidus</i> (Brunner von Wattenwyl)	
7	カメムシ	ミズムシ	ホッケミズムシ	<i>Hesperocorixa distanti hokkensis</i> (Matsumura)	NT
8	カメムシ	カタビロアメンボ	オヨギカタビロアメンボ	<i>Xiphovelia japonica</i> Esaki et Miyamoto	VU
9	カメムシ	キンカメムシ	ニシキキンカメムシ	<i>Poecilocoris splendendus</i> Esaki	
10	コウチュウ	ツブミズムシ	クロサワツブミズムシ	<i>Satonius kurosawai</i> (M. Satô)	
11	コウチュウ	オサムシ	チイワメクラチビゴミムシ	<i>Trechiana mammalis</i> S. Uéno	
12	コウチュウ	エンマムシ	クロエンマムシ	<i>Hister concolor</i> Lewis	
13	コウチュウ	エンマムシ	エンマムシ	<i>Merohister jekeli</i> (Marseul)	
14	コウチュウ	コガネムシ	トラハナムグリ	<i>Trichius japonicus</i> Janson	
15	コウチュウ	オオキノコムシ	オオキノコムシ	<i>Encaustes praenobilis</i> Lewis	
16	コウチュウ	カミキリムシ	ヒメアカハナカミキリ	<i>Brachyleptura pyrrrha</i> (Bates)	
17	コウチュウ	カミキリムシ	ベニバハナカミキリ	<i>Paranaspia anaspidoidea</i> (Bates)	
18	コウチュウ	ハムシ	キオビクビボツハムシ	<i>Lama delicatula</i> Baly	
19	コウチュウ	ハムシ	ヒメカバノキハムシ	<i>Syneta brevitibialis</i> Kimoto	
20	コウチュウ	ゾウムシ	カギアシゾウムシ	<i>Bagous bipunctatus</i> (Kono)	
21	コウチュウ	ゾウムシ	フタホシカギアシゾウムシ	<i>Bagous kagiashi</i> Chujo et Morimoto	
22	コウチュウ	ゾウムシ	バッキンガムカギアシゾウムシ	<i>Bagous buckingami</i> O'breien et Morimoto	
23	コウチュウ	ゾウムシ	コカギアシゾウムシ	<i>Bagous fractus</i> O'breien et Morimoto	
24	コウチュウ	ゾウムシ	ヤヤコブカギアシゾウムシ	<i>Bagous spicutatus</i> O'breien et Morimoto	
25	コウチュウ	ゾウムシ	チビコバンゾウムシ	<i>Miarus vestitus</i> Roelofs	
26	ハチ	コツチバチ	ホソツヤアリバチ	<i>Methocha yasumatsui</i> Iwata	
27	ハエ	カ	トワダオオカ	<i>Toxorhynchites towadensis</i> (Matsumura)	
28	チョウ	ツトガ	エンスイミズメイガ	<i>Eristena argentata</i> Yoshiyasu	
29	チョウ	シャチホコガ	カバイロシャチホコ	<i>Ramesa tosta</i> Walker	
30	チョウ	ヤガ	マダラウスズミケンモン	<i>Hylonycta subornata</i> (Leech)	
31	チョウ	ヤガ	ウスベニキヨトウ	<i>Aletia pudorina subrosea</i> (Matsumura)	
32	チョウ	ヤガ	キスジウスキヨトウ	<i>Archanara sparganii</i> (Esper)	
33	チョウ	ヤガ	シラユキコヤガ	<i>Eulocastra sasakii</i> Sugi	

愛知県昆虫類レッドリストの変更点

本書に掲載した昆虫類レッドリスト（見直し後）と「レッドデータブックあいち 2002 動物編」に掲載した昆虫類レッドリスト（見直し前）の新旧対照表を以下に示した。

		見直し前のランク								
		EX	CR	EN	VU	NT	DD	LP	リスト外 *1	種数
見直し後のランク	EX	スジゲンゴロウ ヨガタノゲンゴロウ ヒョウモンモドキ	マダラシマゲンゴロウ ダイコクコガネ ヒメビロウドカミキリ アサカミキリ シルビアシジミ						トゲナバブタムシ シャープゲンゴロウモドキ	10
	CR		コハネアオイトトンボ ベッコウトンボ オオキトンボ カワラハナムシ オオクワガタ ゴマンジミ ヒメヒカゲ	フタモンマルクビゴミムシ キベリマルクビゴミムシ チャイロヒメコバハナカミキリ タケウチソコバハナカミキリ	マルガタゲンゴロウ ヒメシジミ	コバンムシ ホシチャバネセセリ チャマダラセセリ				16
	EN			ヒズマイトンボ コサナエ エゾイトンボ マダラナエイトンボ タガメ シロヘリハナムシ ツツイキハナガミズグロムシ ツキハダクワガタ ヒメオオクワガタ イガブチヒゲハナカミキリ ヒメオソシカミキリ ヨツボシカミキリ クロシジミ	グンバイトンボ キイロコガタツミズムシ マダラコガタツミズムシ ゲンゴロウ スジボソキマキチョウ ハヤシメドリシジミ	ハバメクラチビゴミムシ ミヤマカラスシジミ	コハンミョウモドキ	キトンボ クロモンシメコガネ ミヤマチャバネセセリ	25	
	VU			ベニイトンボ クロツバメシジミ	フタスジサナエ ネガササナエ ネアカヨシヤンマ アオヤンマ ハネビロエイトンボ ハマズス ヤマトマダラバツ★1 ボソハナムシ ハマバゴミムシ オオツノハネカクシ ヤマトモンシメムシ オオチヤイロハナムグリ クロサワドリムシ クロマダラタムシ ツキヒラタメツキ カツラネクイハムシ ハマバソウムシ フジノドリシジミ クロヒカゲモドキ	セアカササメ オオヒツタゴミムシ ヒツタメアゴミムシ クビナガキベリアゴミムシ クロゲンゴロウ ギンイチモンジセセリ スジゴロチャバネセセリ ウラナミジャノメ		オオイトンボ イトメンボ ババアメンボ シタタミヤマセサゴメツキ ヒトシキトビケラ コキマダラセセリ ムモンアカシジミ ウラナミジャノメ	37	
NT			ナバブタムシ	トラフトンボ クロカナブン クワチヨウ エゾミドリシジミ オオヒカゲ	メガササナエ ナゴヤサナエ キイロヤブトンボ ヒゲハナキリ クチキコオロギ アカジマアシアブトンカ ヒメタイロウチ オオアメンボ エサキアメンボ カワラゴミムシ キハネキハナガミズグロムシ ジャアナヒラタゴミムシ ホラスミラタゴミムシ カヒメシロコガシラズムシ ヒメコガシラズムシ ムツボシツキコツツゲンゴロウ キボシチビコツツゲンゴロウ トダセシジゲンゴロウ シマゲンゴロウ コオナガミズマン ヤマトソコガミ アラメンマムシ アカマダラハナムグリ★3 ミヤモトアシナガシドロンムシ ヨモミドリムシ トゲナバブタムシ ジュウジメズグロメツキ アカアシコハナムシ オカモトツヤアナハナムシ ミスジナガキチ ケバカマルクビカミキリ フタコブルリハナカミキリ トサヒメハナカミキリ ヒゲハハナカミキリ ヒゲジロホソハネカミキリ オオホソハネカミキリ ヨコバネガサガミキリ オオミズクサハムシ アカスズクサハムシ フタツバトゲセイボウ ニッポンハナダカバチ★4 キヌゲハキリバチ ササキリギンチ★5 ウマノオバチ イワコクリトビケラ イトウホソバトビケラ オナグルンシ ウツボシシヒョウモン オオムラサキ サスネキリガ オオチャバネロトウ エゾシヨトウ カバフキシタバ	モードイトンボ キイロサナエ ヤマトモンシメコガネ ヤマトアオトウガネ サトヤマシモアリコムツキ キヌツキミズクサハムシ ピンチビソウムシ オオナガレトビケラ コブニギョウトビケラ ヒゲナガトビケラ ヒメミズメイガ フジキオビ イセキリガ エチゴハガタヨトウ オオキイロアツバ			74	
DD						オオゴキブリ	ギフヒンバツ ホンエダナナフシ★6 ホソケミズムシ★7 クロサワツブミズムシ チウメクサチビゴミムシ クニエバムシ オオキノコムシ ヒメアハナカミキリ ベニハナカミキリ ホソツヤアリバチ トゲオオカ エンスミズメイガ マダラウスズミケンモン ウスベニキョトウ シラユキコヤガ	ミカワクチキウマ(※1) チビクチキウマ(※1) タイワンクワムシ オヨギカタヒロアメンボ エニキキウマムシ エンスムシ トラハナムグリ キオビクビボソハムシ ヒメカバネハムシ カギアソウムシ フタホシカギアソウムシ ハッキンガムカギアソウムシ コカギアソウムシ ヤキヤコカギアソウムシ チビコバンウムシ カバノコヤチホコ キヌジウスキョトウ	33	
LP	オオウラギンヒョウモン				ヒメキノコムシ バハムナビロコメツキ ツマグロキチヨウ スギタニドリシジミ ウラキンシジミ ホシメシジミ	ホンサナエ コシボソヤンマ ミヤマカラスアゲハ アイノドリシジミ ヒサマツドリシジミ メスアカドリシジミ ミドリシジミ コイシシジミ サカハチチヨウ ウツボシヒョウモン ヒメクワシメユナシヤク タケウチエダシヤク アトシロキリガ フシキキシタバ	クチキウマ(※1) マルコガシラズムシ ヤマトエンマムシ ムネアカセンチコガネ カタツトリトビケラ ヘリグロチャバネセセリ ミカドアゲハ ヤマキチヨウ クニタテハ ヒメモンコバネ ノボククワツツミノガ スガシカバ タナカヒメシヤク トガリスジグロエダシヤク シーモンアツバ		36	
種数	4	12	20	38	81	31	0	46	231	

*1 「リスト外」: 「レッドデータブック(2002動物種)」において評価対象とされなかった種。
*2 「ランク外」: 「レッドデータブック(2002動物種)」掲載種のうち、今回の見直しによって、EX、CR、EN、VU、NT、DD、LPのいずれのランクにも該当しないと評価された種。または、評価の対象外とされた種。
(※番号)は、今回の見直しで、細分化等により評価単位の変更があったもの。番号は、評価単位の変更により見かけ上、レッドリストから消えた名称と、今回の見直しで採用された評価単位とその名称との対応を示している。
★1: ヤマバツからヤマトダラツツに種名変更
★2: 学名 *Leptoceros moriohi* (Matsuno)
★3: アカマダラコガネからアカマダラハナムグリに種名変更
★4: アナバチ科ハナダカバチからドバチモドキ科ニッポンハナダカバチに科名・種名変更
★5: アナバチ科ササキリギンチバチからギンチバチ科ササキリギンチに科名・種名変更
★6: ナナフシ科エダナナフシからナナフシ科ホンエダナナフシに科名・種名変更
★7: 種名ミズムシから亜種名ホソケミズムシに変更

(8) クモ類

愛知県におけるクモ類の概況

愛知県は日本列島のほぼ中央に位置し、平野、山地、海、河川（木曾川・庄内川・矢作川・豊川）、石灰岩地帯（豊橋市嵩山の蛇穴、石巻山他）など地形の変化にも富み、クモ類の生息地としては恵まれている。県の西北から南東にかけて濃尾・岡崎・豊橋と三つの平野部が連なり、尾張部から知多半島が、東三河平野からは渥美半島が南に突きだしている。県北東部は山地となり、三河高原を形成、最北東部は 1,000m 以上の山地で、最高は茶臼山の 1,415m となっている。太平洋に面した知多半島および渥美半島を含む三河の平野部は温暖な気候（伊良湖、年平均 15.8℃）に恵まれているが、三河高原では夏は涼しいが、冬の冷え込みは厳しく（茶臼山、年平均 8.4℃）、年平均でも 7℃以上の差がある。

これらの理由から、本県は、南方系・北方系両方のクモ類が交錯して生息する、また、海岸性から平野部・山地性のもの、さらに洞窟性のものまで幅広い生息場所ごとの種が見られる地域となっている。

ところで、愛知県で記録されたクモ類の種数は、1984 年には僅かに 31 科 234 種（須賀,1984）であった。しかし、その後の調査により 1995 年までに 39 科 506 種（緒方,1998）、2008 年現在ではさらに増加、48 科 523 種が確認された（緒方,2008）。日本産のクモ類はおよそ 1,400 種であるから、その約 37%が愛知県に生息することになる。

○ 山地のクモ

地形の変化に富む山地では、生活しているクモの数も多い。北設楽郡設楽町は、森林の占める面積が町の総面積の 91%を占めている山村であるが、34 科 323 種（緒方,1996）のクモ類が確認されている。これは、愛知県産の 62%にあたる。特に、同町の裏谷原生林には、多くの貴重なクモが多く生息する。この地域のクモを例示すると、キハダキヌキリグモ、アズミヤセサラグモ、コケオニグモ、マルコブオニグモ、シノビグモ、ムツメカレハグモ、シロタマヒメグモ、エゾウズグモ、ヒメカラスハエトリなどなど、枚挙にいとまがない。

なお、豊橋市北東部、嵩山の蛇穴を中心とする洞窟群には県固有のミカワホラヒメグモが生息している。

○ 丘陵地のクモ

名古屋市東部にはアカマツ、アラカシ、ベニシダを中心とした丘陵地が続いている。また、これら丘陵地間には湿地が点在している。このようなところも、クモの種は多い。その一部を例示すると、カネコトタテグモ、キシノウエトタテグモ、キノボリトタテグモ、オウギグモ、キヒメグモ、アシヨレグモ、ジョロウグモ、アオオニグモ、コガネグモ、チュウガタコガネグモ、コガタコガネグモ、ヤマシロオニグモ、サツマノミダマシ、シッチコモリグモ、アズチグモ、ネコハエトリ、デーニツツハエトリなどがあり、最近（2008）では、希少なムツトゲイセキグモも採集されている。なお、この地の湿地は近年極端に減少しつつあり、テジロハリゲコモリグは絶滅の危機に瀕している。

○ 平野部のクモ

愛知県では、平野部のほとんどが市街化している。僅かに残った田畑なども、農薬などの散布のため環境は悪化し、そのため生息するクモ類の数も種数も年々少なくなっている。特に、カネコトタテグモ、ワスレナグモ、ジグモなど地中性のクモの減少はいちじるしい。

知立・刈谷・半田の各市と知多郡東浦町は丘陵地らしい丘陵地は一部を除いてほとんど見られな

い平野部に属する都市である。知立市では 26 科 139 種 (緒方,1994)、刈谷市 22 科 92 種 (鈴木,1989) 半田市 22 科 119 種 (緒方,1993)、東浦町 25 科 107 種 (原,2000) で、それぞれ愛知県産全種の 27%・18%・23%・20%と、いずれも前記山地のクモ (62%) に比べて小さい値を示している。ジグモ、クロガケジグモ (外来種)、マネキグモ、ユカタヤマシログモ、ユウレイグモ、オオヒメグモ、ハンゲツオスナキグモ、スネグロオチバヒメグモ、セスジアカムネグモ、オニグモ、ナカムラオニグモ、トガリアシナガグモ、ヒラタグモ、イオウイロハシリグモ、イモコモリグモ、クロチャケムリグモ、ヒメフクログモ、アシダカグモ、アズチグモ、シャコグモ、マミジロハエトリ、マミクロハエトリ、ネコグモ、アリグモなどが平野部で見られるクモの一部である。

○ 海岸・河口付近のクモ

海岸またはその付近のみを生活の場とするクモ類がいる。渥美半島の海岸では、ホシスジオニグモ (新海,1969)、ヘリジロオニグモ、ヒカリアシナガグモ (緒方,1989)、篠島では、イソハエトリ (村上,1961・板倉,1994)、マルゴミグモ (板倉,1994)、豊橋市でイソハエトリ、ヘリジロオニグモ (緒方,1999) などの記録がある。また、近年、カコウコモリグモが、名古屋市港区庄内川河口・刈谷市境川河口・田原市汐川河口で発見 (緒方) されている。

愛知県における絶滅危惧種の概況

今回愛知県として、絶滅危惧種のリストに取り上げられたクモ類は、絶滅危惧 I A 類 (CR) 2 種、絶滅危惧 I B 類 (EN) 15 種、絶滅危惧 II 類 (VU) 12 種、準絶滅危惧 (NT) 4 種、それに情報不足 (DD) 1 種である。愛知県のクモ類は、523 種 (2008 現在) であるから、CR・EN・VU・NT・DD の合計 34 種は全体の約 6.5%にあたる。

「その他無脊椎動物レッドリスト」(環境省,2006)によると、CR+EN 1 種、VU 4 種とキムラグモ類、NT 5 種、DD 5 種、計 15 種とキムラグモ類が公表されている。日本産のキムラグモ類は現在 16 種 (谷川,2008) であるから、リストの合計は 31 種となる。ここに取り上げられた 31 種は、日本産クモ類 (約 1,400 種) の約 2.2%にあたる。この数値は今回取り上げられた愛知県の数値に比べると極端に少ない。現実には、全国的に見て危機に瀕しているクモ類は、この 31 種以外にまだまだ数多くあるので、愛知県の 6.5%は妥当な数値だと考える。

取り上げられた種の主な減少の原因を考察すると、工事・開発・除草剤・農薬・殺虫剤などの影響によるものと思われる種が多い。キシノウエトタテグモ、キノボリトタテグモ、ワスレナグモ、コガネグモ、トリノフンダマシ類、イサゴコモリグモ、オビジガバチグモ、アワセグモ、アシナガカニグモなどである。

次に、全国的にも、県内でも比較的広く分布する割にもともと個体数が少ない種である。これらの種は、微妙な環境の変化で生息しなくなってしまうことが多い。言い換えれば、一見同じような環境と思われるところでも生息しているとは限らないのである。シロタマヒメグモ、キヌキリグモ、コケオニグモ、ニシキオニグモ、トゲグモ、ムツトゲイセキグモ、キジロオヒキグモ、ワクドツキジグモなどがその例である。

最後に、その種が住んでいる特殊な環境の悪化、または開発である。洞窟内またはそれに似た環境に住むミカワホラヒメグモ、アケボノユウレイグモの減少はこの例である。特に、アケボノユウレイグモは、生息場所の乾燥化によって、絶滅に近い個体数にまで減少している。また、湿地の悪化や開発 (住宅地) に伴い、このような場所に生息するテジロハリゲコモリグモ、ミナミコモリグモなども減少傾向にある。そのほか、特殊な溪谷の開発・環境悪化に伴い、チクニドヨウグモ、シ

ノビグモなども減少している。

なお、ムレズミソグモ（スオウグモ科）は現在まで山口県・京都府・兵庫県・島根県（隠岐島）でそれぞれ僅か1頭ずつ採集されている珍種であり、愛知県でも1977年、名古屋市天白区で採集されている。しかし、その後の記録は全くなく、生態的にも不明の点が多いので情報不足にランクされた。

愛知県クモ類レッドリスト

目及び科の範囲、名称、配列は、原則として「日本産クモ類目録 Ver.2008 R1」（谷川明男,2008：インターネット上にて公表）に準拠した。

絶滅 (EX)

(該当種なし)

絶滅危惧 A類 (CR)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	クモ	ユウレイグモ	アケボノユウレイグモ	<i>Belisana akebona</i> (Komatsu)	
2	クモ	ホラヒメグモ	ミカワホラヒメグモ	<i>Nesticus mikawanus</i> Yaginuma	

絶滅危惧 B類 (EN)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	クモ	トタテグモ	キシノウエトタテグモ	<i>Latouchia swinhoei typica</i> (Kishida)	NT
2	クモ	ヒメグモ	シロタマヒメグモ	<i>Enoplognatha margarita</i> Yaginuma	
3	クモ	サラグモ	キヌキリグモ	<i>Herbiphantes cericeus</i> (S. Saito)	
4	クモ	サラグモ	キハダキヌキリグモ	<i>Herbiphantes longiventris</i> Tanasevitch	
5	クモ	アシナガグモ	チクニドヨウグモ	<i>Metleucauge chikunii</i> Tanikawa	
6	クモ	コガネグモ	キジロオヒキグモ	<i>Arachnura logio</i> Yaginuma	
7	クモ	コガネグモ	コケオニグモ	<i>Araneus seminiger</i> (L.Koch)	
8	クモ	コガネグモ	マメイタイセキグモ	<i>Ordgarius hobsoni</i> (O. P.-Cambridge)	
9	クモ	コガネグモ	ムツトゲイセキグモ	<i>Ordgarius sexspinosus</i> (Thorell)	
10	クモ	コガネグモ	ツシマトリノフンダマシ	<i>Paraplectana tsushimensis</i> Yamaguchi	
11	クモ	コガネグモ	ワクトツキジグモ	<i>Pasilobus hupingensis</i> Yin, Bao et Kim	
12	クモ	コモリグモ	イサゴコモリグモ	<i>Pardosa isago</i> Tanaka	
13	クモ	コモリグモ	テジロハリゲコモリグモ	<i>Pardosa yamanoi</i> Tanaka et Suwa	
14	クモ	サシアシグモ	シノビグモ	<i>Shinobius orientalis</i> (Yaginuma)	
15	クモ	カニグモ	カトウツケオグモ	<i>Phrynarachne katoi</i> Tikuni	

絶滅危惧 類 (VU)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	クモ	ジグモ	ワスレナグモ	<i>Calommata signata</i> Karsch	NT
2	クモ	カネコトタテグモ	カネコトタテグモ	<i>Antrodiaetus roretzi</i> (L. Koch)	NT
3	クモ	トタテグモ	キノボリトタテグモ	<i>Conothele fragaria</i> (Dönitz)	NT
4	クモ	コガネグモ	ニシキオニグモ	<i>Araneus variegatus</i> Yaginuma	
5	クモ	コガネグモ	シロオビトリノフンダマシ	<i>Cyrtarachne nagasakiensis</i> Strand	
6	クモ	コガネグモ	アカイロトリノフンダマシ	<i>Cyrtarachne yunoharuensis</i> Strand	
7	クモ	コガネグモ	トゲグモ	<i>Gasteracantha kuhlii</i> C. Koch	
8	クモ	コモリグモ	ミナミコモリグモ	<i>Pirata meridionalis</i> Tanaka	
9	クモ	ネコグモ	オビジガバチグモ	<i>Castianeira shaxianensis</i> Gong	
10	クモ	アワセグモ	アワセグモ	<i>Selenops bursarius</i> Karsch	
11	クモ	カニグモ	アシナガカニグモ	<i>Heriaeus mellottei</i> Simon	
12	クモ	カニグモ	オビボソカニグモ	<i>Xysticus trizonatus</i> Ono	

準絶滅危惧 (NT)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	クモ	コガネグモ	コガネグモ	<i>Argiope amoena</i> L. Koch	
2	クモ	コガネグモ	トリノフンダマシ	<i>Cyrtarachne bufo</i> (Bösenberg et Strand)	
3	クモ	コガネグモ	オオトリノフンダマシ	<i>Cyrtarachne inaequalis</i> Thorell	
4	クモ	コガネグモ	ゲホウグモ	<i>Polys illepidus</i> C. Koch	

情報不足 (DD)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	クモ	スオウグモ	ムロズミノレグモ	<i>Takeoa nishimurai</i> (Yaginuma)	

愛知県クモ類レッドリストの変更点

本書に掲載したクモ類レッドリスト（見直し後）と「レッドデータブックあいち 2002 動物編」に掲載したクモ類レッドリスト（見直し前）の新旧対照表を以下に示した。

	見直し前のランク								種数	
	EX	CR	EN	VU	NT	DD	LP	リスト外*1		
見直し後の ランク	EX									0
	CR		アケボノエウレイグモ ミカワホラヒメグモ							2
	EN			キシノウエトタテグモ シロタマヒメグモ キヌキリグモ キハダキヌキリグモ チクニドヨウグモ キジロオヒキグモ コケオニグモ マメイタイセキグモ ムツガイセキグモ ツシマトリノフンダマン イサゴモリグモ テジロハリゲコモリグモ シノビグモ カウツケオグモ					ワグドツキシジグモ	15
	VU				リスレナグモ カネコタテグモ キノボリトタテグモ ニシキオニグモ シロオビトリノフンダマン アカイトリノフンダマン トゲグモ ミナミコモリグモ オビシガバチグモ アワセグモ アシナガカニグモ オビボソカニグモ					12
	NT							コガネグモ トリノフンダマン オオトリノフンダマン ガホウグモ		4
	DD						ムロズミノレグモ			1
	LP									0
	ランク外									0
	種数	0	2	14	12	4	1	0	1	34

*1 「リスト外」: 「レッドデータブックあいち2002動物編」において評価対象とされなかった種。

*2 「ランク外」: 「レッドデータブックあいち2002動物編」掲載種のうち、今回の見直しによって、EX、CR、EN、VU、NT、DD、LPのいずれのランクにも該当しないと評価された種。または、評価の対象外とされた種。

(9) 貝類

愛知県における貝類の概況

○ 陸産貝類

愛知県の陸産貝類相は変化に富んだ地形、地質、気候条件を反映し、本州中部の他地域と比較しても豊かである。特に独特な陸産貝類相を呈するのは石巻山・嵩山（豊橋市）の石灰岩地帯である。この地域にはイシマキゴマガイ、トウカイヤマトガイ、クビナガギセル、ハチノコギセル、イシマキシロマイマイ、オモイガケナマイマイ、ミカワマイマイなどの特産種や他の地域ではほとんど見られない陸産貝類が生息している。石灰洞である嵩山の蛇穴内の壁面には洞窟性の微小種ホラアナゴマオカチグサが生息している。

標高 1,000m を越える三河高原は気候・植生の面で温暖な愛知県としては珍しく北方の様相を呈している。この地域は白山を分布の中心とする北方系陸産貝類と愛知県の豊橋平野のような温暖な地域に主分布域を持つ陸産貝類相の混交地域となっている。面ノ木峠（稲武町）のブナの原生林は典型的で、トノサマガセル、オクガタギセルなどの北方系要素、ミカワギセル、ホソヤカギセルなどの愛知県温暖系要素を含めた 7 種のキセルガイ科貝類が生息している。段戸裏谷にもブナの原生林が残されており、トノサマガセルは記録されていないが、豊かな陸産貝類相が保存されている。稲武町から設楽町にかけてはヒラマイマイ種群（ヒラマイマイーイセノナミマイマイーギュリキマイマイ）、ミヤマヒダリマキマイマイ種群（ミヤマヒダリマキマイマイーミカワマイマイーヒラヒダリマキマイマイ）、ハコネマイマイ種群（ハコネマイマイークチベニマイマイ）など関東から関西にかけて分布する種群の移行地域になっていて生物地理学上注目される。

鳳来寺山は社寺林として古くから保護されてきた自然林が残されており、個体数は少ないが多種類の陸産貝類が記録されている。中でも 1980 年に鳳来寺山を模式産地として新種記載されたホウライジギセルは、鳳来寺山と静岡県天竜市の 2 カ所の非常に狭い範囲の生息場所が確認されているにすぎない。

三河を和名に冠するミカワギセルは三重県志摩地方から渥美半島を経て東三河から西尾市にかけての平野部から三河高原の山地まで点々と分布し（模式産地は三ヶ根山）、さらに、静岡県西部まで分布している。本種は産地によって貝殻の形態が大きく変異する。

平野部では島嶼域や社寺林に分布上注目すべき種が多い。熱田神宮にはヒクギセル、佐久島にはヒカリギセルが飛地分布し、それぞれ分布の西限となっている。両種とも関東地方には広く普通に分布する種で、前述の 2 カ所における 2 種の飛地分布は自然分布か人為的分布かは検討を要する。三河湾の沖ノ島（幡豆郡）と竹島（蒲郡市）には南方に主分布域を持つトカラコギセル（両島産の個体群は分布が離れていることからシバタヒロクチョコギセルという亜種として和名だけが提唱されたが、正式記載されていない）が分布する。渥美半島先端部にはヒロクチョコギセルが分布する。これら 2 種は南方から海流によって分布を拡大したのかもしれない。その他平野部から近年、ナニワクチミゾガイ（河辺ほか,2000）、カタマメマイマイ（木村,2000）の生息が確認された。

○ 淡水産貝類

愛知県は木曾川水系、矢作川水系、豊川水系と豊かな水源を持つ水系に恵まれ、平野部にはその支流や灌漑水路、ため池が発達し、淡水産貝類の生息にとって好適な地域であった。また、愛知県は豊かな淡水貝類相を持つ琵琶湖水系との関わりのある東限の地域として元々多種類の淡水産貝類が生息していた。しかし、豊かな淡水貝類相が保存されていたのは 1960 年代までであった。1970 年以降平野部の水系は各種排水によって富栄養化し、水質汚濁が進行するに伴って県内の淡水貝類

の生息状況は著しく悪化した。また河川改修工事によって生息場所自体が消失した水系も多い。現在の淡水貝類相は限られた範囲にかろうじて生き残った小規模な個体群が確認される場合が多く、絶滅したと考えられる淡水産貝類も少なくない。

河川上流域には元々淡水産貝類は少なく、本県ではカワニナ科のカワニナ 1 種が知られる。中流域から下流域にはチリメンカワニナ、クロダカワニナが分布する。下流域や平野部の水路や支流、細流の流れが緩やかな砂泥底にはイシガイ科貝類が多く分布し、オバエボシガイ、カタハガイ、トンガリササノハガイは愛知県が分布の東限であった。しかし、前述の通りこのような生息環境は県内では壊滅的状況で、イシガイ科貝類全般の生息状況が著しく悪化し、絶滅したと考えられる種もある。

平野部から丘陵にかけての水質の良いため池には現在でもオオタニシ、ドブガイが生息している。平野部の水田に多産し食用にも利用されていたマルタニシは水田耕作の変化や前述のような生息環境の悪化で現在の生息場所は非常に狭い。現在平野部で普通に見られる淡水産貝類としては、富栄養化した河川や護岸工事された水路にでも多産するヒメタニシ、ヒメモノアラガイ（移入種）、サカマキガイ（移入種）、スクミリンゴガイ（通称ジャンボタニシ：移入種）、河口付近まで分布するイシマキガイがあげられる。

○ 内湾産貝類（海産貝類）

県内の内湾域は大きく三河湾と伊勢湾に分けられるが、そのいずれも人間活動の中心となる平野部に近接しているため、埋め立てや各種汚水の流入の影響を受けている。1977年までに、三河湾で48.0%、伊勢湾で60.8%の干潟が消失している（水産庁・水産資源保護協会,1988）。

・アシ原湿地の貝類

アシ原湿地は干潟や前浜干潟の潮間帯中部から高潮線付近に発達する塩性湿地で、海と陸との境界に位置する。アシを主体とした特徴的な海岸植物群集が分布する特殊な環境である。そこに生息する貝類もまた独特であり、カワザンショウガイ科やオカミミガイ科など他の環境ではほとんど見られない多くの種が生息している。高潮線から更に上部の陸上植生まで一連のアシ原湿地がよく保存された場所は、県内では汐川河口域（汐川干潟）1カ所だけである。潮間帯中部から高潮線付近まで保存されているアシ原湿地の面積も著しく減少しており、アシ原湿地という生息場所自体が県内から消失するおそれがある。従って現在も残っているアシ原湿地内には比較的多くの個体数が生息する種も今後の生息については予断を許せない状況である。

・干潟の貝類

前述のように広大な面積の干潟が消失したことにより、生息場所そのものが減少したのはいまでもなく、水質汚濁や貧酸素層の発生、底質のヘドロ化などで干潟の貝類相が著しく単純化している。減少した貝類は枚挙にいとまがないので、現在干潟に普通に見られる貝類を列挙する。人工護岸や転石地に多い種としてイシマキガイ、タマキビ、カワザンショウガイ、イボニシ、コウロエンカワヒバリガイ（移入種）、ムラサキイガイ（移入種）、ミドリイガイ（移入種）、マガキ。他の貝類や小石などに付着するシマメノウフネガイ（移入種）、干潟の表面付近に多いツメタガイ、アラムシロガイ、ホトトギスガイ（足糸でつながりマット状のコロニーを形成する）。砂泥底に潜って生息するサルボウ、アサリ、カガミガイ、シオフキ、バカガイ。以上のように移入種を含む少数の種が優占していて、その他の種の個体数は著しく少なく、貝類相は単純化し、多様性が失われている。

・潮下帯の貝類

干潟の消失は潮下帯にも大きな悪影響を及ぼし、水質汚濁、貧酸素層の発生、底質のヘドロ化に

拍車をかけている。三河湾奥の水深 5m より深い潮下帯部分では、夏季にはほとんど無酸素状態になり、底生生物が全く生息不可能な潮下帯の範囲も狭くない。アマモ場も著しくその範囲を縮小し、アマモ場に特有な貝類もその生息が危機的状況である。現在、三河湾中部から奥部の潮下帯で普通に見られる貝類は、ツメタガイ、アカニシ、シマメノウフネガイ（移入種）、アラムシロガイ、サルボウ、ミドリイガイ（移入種）、ホトトギスガイ、トリガイ、バカガイ、カガミガイ、シズクガイ、チヨノハナガイと移入種を含む少数の種が優占していて、その他の種の個体数は著しく少なく、貝類相は単純化し、多様性が失われている。三河湾湾口部分から知多半島南部の伊勢湾側では伊良湖水道を経て南から流入する外洋水の影響で貝類相の豊かな海域も残されているが、その範囲は非常に狭い。この海域は希少な貝類が多数生息しているので、1999 年と 2000 年にドレッジによって重点的に貝類相調査を行った（木村,2000）。また今回の見直し調査においても 2006 年 10 月、2007 年 8 月に同海域で詳細なドレッジ調査を行った。1999 年と 2000 年と比較して、2006 年、2007 年では明らかに底質に有機質が多くなり、広範囲に大量のホトトギスガイが足糸でマットを形成して生息することが確認された。1999 年と 2000 年の調査では確認されていたヒラドサンゴヤドリやイトカケガイ類の生息が全く確認されず、貝類の多様性は非常に低くなった。これらの事実は、潮流の滞留や流入有機物の増大等に伴うと考えられる底質の泥質化を示唆しており、同海域における詳細なモニタリング調査が望まれる。

愛知県における絶滅危惧種の概況

○ 陸産貝類

今回、愛知県で絶滅のおそれがあると認められた陸産貝類は、絶滅（EX）0 種、絶滅危惧 I A 類（CR）3 種、絶滅危惧 I B 類（EN）2 種、絶滅危惧 II 類（VU）5 種、準絶滅危惧（NT）14 種、情報不足（DD）1 種の合計 25 種で、愛知県で生息記録がある陸産貝類の在来種 150 種（亜種を含む）のうち約 17% に相当し、多くの種が危険な状況にあると判断された。今回レッドリストに掲載された 25 種のうち、ヒラドマルナタネを除く 24 種は、環境省のレッドリストに掲載されている。

最も今回ランクの高かった CR にはホウライジギセル、オモイガケナマイマイ、ミカワマイマイの 3 種が選定された。3 種とも愛知県を模式産地として記載された種で、他府県にも分布するが分布域は非常に狭い。前 2 種は環境省のランクと同じであるが、ミカワマイマイは環境省のランクの VU より高いランクに選定された。ミカワマイマイは、愛知県豊橋市高山（模式産地）から東に県境を越えて静岡県浜湖北側の石灰岩地にかけて分布し、元々の生息範囲も静岡県側が広い。また浜松市（旧三ヶ日町）などの静岡県側では現在でも生貝がしばしば採集されているが、愛知県側では模式産地を含めて近年ほとんど生貝が採集されていない。以上の理由により環境省ランクより高いランクに選定された。

トカラコギセルとヒロクチコギセルは共に海岸付近の照葉樹林の樹幹を生息場所とし、全国レベルで見ると広い分布を持つが、愛知県では元々非常に限られた範囲にのみ生息し、生息地でも海岸林の環境悪化のため個体数が著しく減少している。2 種とも南方に主分布域を持ち、黒潮の運搬力によって海岸づたいに分布を広げたと考えられる種である。愛知県の生息地はトカラコギセルについては分布の北限、ヒロクチコギセルについても分布の北限に近い場所であり、生物地理学的見地からも愛知県の個体群は貴重である。以上の理由から愛知県のランクは見直し前から EN に選定されていた。なお環境省のランクは今回の見直しで NT 及び VU から CR+EN と変更された。

ベニゴマオカタニシ、クビナガギセル、ホソヒメギセル、ミヤマヒダリマキマイマイは環境省と

同じランクの VU に選定された。ナニワクチミゾガイは近年、愛知県内唯一の生息地で公園整備により生息場所の一部が消失したことにより VU に変更された。その結果、愛知県のランクは環境省ランクの NT より高くなった。

NT には 14 種が選定され、そのうち 12 種は環境省と同じランクであった。トウカイヤマトガイとホラアナゴマオカチグサは今回の見直し調査の結果、愛知県における生息状況に特に変化が認められなかったため、NT のままとされた。それに対して環境省のランクは今回の見直しで NT から VU 及び CR+EN に変更されたため、結果として愛知県のランクは環境省ランクより低くなった。

DD にはヒラドマルナタネをランクされた。

○ 淡水産貝類

今回愛知県で絶滅のおそれがあると認められた淡水産貝類は、絶滅 (EX) 5 種、絶滅危惧 I A 類 (CR) 3 種、絶滅危惧 I B 類 (EN) 0 種、絶滅危惧 II 類 (VU) 2 種、準絶滅危惧 (NT) 4 種、情報不足 (DD) 2 種の合計 16 種で、愛知県で生息記録がある淡水産貝類の在来種 30 種のうち約 53% に相当し、きわめて多くの種が危険な状況にあると判断された。今回レッドリストに掲載された 16 種のうちイシガイ、ドブガイ、ニホンマメシジミを除く 13 種は、環境省のレッドリストに掲載されている。

前項の概況で述べたとおり愛知県内の淡水産貝類の生息状況は極めて深刻で、特に河川下流域や平野部の水路、支流を生息場所とする貝類は危機的生息状況である。今回カワネジガイ、ヒダリマキモノアラガイ、ヨコハマシジラガイ、オバエボシ、カタハガイの 5 種が愛知県内では絶滅したと判断された。生息していることを確認するのに比べて、生息していないことを証明することは非常に難しいが、以下の理由から上述の 5 種が絶滅 (EX) とされた。

カワネジガイとヒダリマキモノアラガイは愛知県の河川下流域の環境がまだ健全な時代から生息場所の限られた珍しい種と認識されていた。1970 年代よりこれら 2 種の記録された場所を再調査した例があるが、30 年以上本県からの生息記録が無い。また豊橋市蒲池のように生息地自体が埋め立てで消失した場合も多い。2 種とも小型種で元々個体数が少ないので、見落とされている可能性が全くないわけではないが、現在の河川下流域の現状を考えると県内より絶滅したと判断するのが妥当である。

ヨコハマシジラガイ、オバエボシ、カタハガイは、3 種ともイシガイ科貝類で河川下流域の支流や水路などの水質のよい流れの緩やかな砂底を好む。東海地方全域を見てもこのような場所は非常に少なくなり、愛知県内にはこのような生息環境自体が残されていない。また上述の 3 種は 1970 年代以降、愛知県内での採集記録が全くなく、1985 年から東海地方 4 県のイシガイ科貝類の生息状況を詳しく調べた調査でも愛知県内から上述の 3 種の死殻さえ記録されなかった (木村,1994 : 木村・中西,1997)。以上のことからこのイシガイ科 3 種について絶滅したと判断された。

CR にはイシガイ、マツカサガイ、トンガリササノハガイのイシガイ科 3 種が選定された。このうち後 2 種は環境省のランクは NT で、イシガイに関してはランク外である。前述した通り、愛知県のイシガイ科貝類の生息状況は全国と比較しても危機的で、木村 (1994) および木村・中西 (1997) の報告や今回のレッドデータブックの現地調査によっても現在県内における生息場所は非常に少ない。またそれぞれの生息地でもかろうじて生き残った小規模な個体群が確認されたにすぎず、環境省より高いランクに選定された。

VU にミズゴマツボとマシジミの 2 種が選定された。ミズゴマツボは今まで愛知県からの正式な生息記録はなかったが、2006 年の調査で木曾川中流域に本種の健全な個体群を確認した (木村,2006)。

その後の調査でも生息地点は上述の 1 地点しか確認されていない。マシジミは愛知県の平野部の河川、湖沼にごく普通に生息していた種であったが、1990 年代にカネツケシジミ（タイワンシジミの黄色型）が愛知県にも移入、定着し、マシジミ分布域の多くで、移入したカネツケシジミと置き換わっていることが確認され、広域に分布していた種であるので健全な生息地は残っていると思われるが、2006 年からの調査では、河川下流域、大きな水系とつながった水路等には、カネツケシジミが定着し、マシジミはほとんど見られなくなった。

NT に 4 種が選定された。そのうち 3 種は環境省のランクと同じである。ドブガイは、環境省ではランク外であるが、本種もイシガイ科貝類で前述したとおり河川下流域では生息状況が危機的であるので、他のイシガイ科貝類と同様に選定された。ただし、ドブガイだけは、ため池などの止水域に水質がよければ生息している場合があり、生息場所も 15 カ所と他のイシガイ科貝類に比べて多いので、他のイシガイ科貝類より低いランクに選定された。

DD にカラスガイとニホンマメシジミの 2 種が選定された。カラスガイは環境省のランクは NT である。愛知県だけでなく全国的な傾向でもあるが、カラスガイという和名はイシガイ科貝類の総称的名称に用いられることが多い。そのためか、カラスガイは過去の記録において同じ科のドブガイと混同されている場合が多く、実際に標本を見てみるとカラスガイではなくドブガイの大型個体であることが多い。愛知県における正式な産出記録はないが、津島市のため池で数個体が採集されたという正しく同定された標本に基づく生息に関する情報が 1 例あるだけである。あまりにも生息に関する情報が少なく、元々希少種なのか、近年その生息範囲を縮小しているのか判断が難しいので今回は DD とされた。ニホンマメシジミの属するマメシジミ科は微小な二枚貝で、全国的に分布し、20 あまりの種や亜種名が記載されているが、明らかに分別できるものは少なく、未だに分類は混迷している（増田・内山,2004）。愛知県内でもマメシジミ科貝類が数地点から採集されているが、未同定で、かつ平野部から山地まで本科貝類の生息環境の調査がほとんどされていない。近年 1 例だけニホンマメシジミと同定される種の産出が報告された（藤原,2002）。このような事情から、この類の代表として確実な生息記録のあるニホンマメシジミが情報不足として記録された。

河川下流域や平野部における淡水貝類の生息状況の指標ともいえるイシガイ科貝類について、愛知県で生息が記録された 8 種全てが絶滅危惧種または準絶滅危惧種にランクされ、そのうちの 3 種が絶滅と今回判断された。これらの事実は、現在愛知県の河川下流域や平野部の淡水貝類の生息環境悪化がいかに危機的状況で深刻であることを示唆している。

○ 内湾産貝類（海産貝類）

今回、愛知県で絶滅のおそれがあると認められた内湾産貝類は、絶滅（EX）4 種、絶滅危惧 I A 類（CR）47 種、絶滅危惧 I B 類（EN）6 種、絶滅危惧 II 類（VU）22 種、準絶滅危惧（NT）31 種、情報不足（DD）3 種の合計 113 種で、愛知県で生息が予想される内湾産貝類（アシ原湿地＋干潟・潮下帯の貝類）の在来種を 350 種と想定した場合、これらの割合は約 32%に相当し、きわめて多くの種が危険な状況にあると判断された。しかし、調査対象の項でも述べたように今回は河口付近の汽水域から水深 20m までの潮下帯に生息する種まで含めたので、愛知県産の内湾産貝類の正確な生息種数は現段階では把握できていない。また、リソツボ科やトウガタガイ科などで代表される分類が困難な微小種を多く含む種群についての生息状況の把握は今後の研究課題である。ただし、微小種の生息状況に関する調査が進めば、絶滅危惧種に選定される種数も多くなることは必至である。

調査対象の項でも述べたように、環境省のレッドデータブックでは専門家の不足や海洋生物の同

定の難しさ、現状把握の困難さから海洋生物はすべてリスト対象外（リスト外ではない）になっている。従って今回の内湾産貝類については、和田ほか（1996）が「日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状」で報告した 340 種に登る絶滅種、絶滅危惧種に関するリストを雛形とした。和田ほか（1996）のランク区分については表 8 のとおりである。

表 8 和田ほか（1996）のランク区分

ランク区分	内 容
絶 滅	野生状態ではどこにも見あたらなくなった種。
絶滅寸前	人為の影響の如何に関わらず、個体数が異常に減少し、放置すればやがて絶滅すると推定される種。
危 険	絶滅に向けて進行していると見なされる種。今すぐ絶滅という危機に瀕するということはないが、現状では確実に絶滅の方向へ向かっていると判断されるもの。
希 少	特に絶滅を危惧されることはないが、もともと個体数が非常に少ない種。
普 通	個体数が多く普通にみられる種。
現状不明	最近の生息の状況が乏しい種。

今回絶滅（EX）に選定された種はタケノコカワニナ、ハイガイ、イチョウシラトリ、アゲマキガイの 4 種である。和田ら（1996）によるランク区分では前 3 種が絶滅寸前、アゲマキガイが危険に区分されている。淡水産貝類の項でも述べたように、生息していることを確認するのに比べて、生息していないことを証明することは非常に難しい。これら 4 種は内湾の環境が保全されていた 1960 年代からすでに狭い範囲でのみ生息が確認され、生息場所も内湾奥の水深の浅い場所に限定されていた。また比較的大型の種なので見落とししている可能性も低い。以上のように海産種（内湾産貝類）としては生息状況が把握しやすい種であるにもかかわらず、近年全く生息が確認されていないので絶滅（EX）に選定された。この例とは逆に、近年生息が全く確認されず、死殻も採集できない種でも、種としての生息範囲が干潟の広い範囲とか、干潟から潮下帯というように元々広範囲に及ぶ種については、近年の生息状況を完全に把握する事は困難である。このような種については、絶滅している可能性が高いと考えられても、絶滅ではなく暫定的に CR と評価された。

CR には 47 種が選定されたが、このうち近年（1998 年から 2008 年まで）の調査で、1 個体でも生貝が確認されたのは、わずか 10 種である。生貝が確認されなかった 37 種のうち 9 種は死殻も全く採集されなかった。死殻でさえ採集できなかった 9 種については絶滅した可能性が高いが、前述のような理由で CR に選定された。今後更に詳しく調査すれば CR から EX にランクが上がる種はかなりの数に登ると考えられる。今回 CR に選定された 47 種は、和田ら（1996）によるランク区分では絶滅寸前が 9 種、現状不明（絶滅寸前？）が 2 種、危険 23 種、希少 6 種、現状不明 2 種、リスト外 5 種である。

EN には 6 種が選定されたが、全種とも近年の調査で、生貝が確認されているが生息場所は非常に限られており、その生息範囲も著しく小さい。和田ら（1996）によるランク区分では絶滅寸前が 1 種、現状不明（絶滅寸前？）が 1 種、危険 2 種、希少 0 種、リスト外 2 種である。

VU には 22 種が選定されたが、ベニガイを除く 21 種は近年の調査で、生貝が確認されているが生息範囲は狭く、採集された個体数も少ない。ベニガイについては内湾域では近年生貝はおろか死殻もほとんど採集されないが、外洋に面した内湾域から外洋域の水深 20m より深い海域にも分布する。調査が不十分な渥美外海に分布域が存在する可能性があることを考慮して評価がなされた。和田ら（1996）によるランク区分では絶滅寸前が 3 種、危険 8 種、希少 3 種、リスト外 8 種である。

NT には 31 種が選定されたが、全種とも近年の調査で生貝が確認されている。個体数は少ないが

比較的広い範囲で生息が確認されている種、生息範囲は狭いが生息場所では現在も多産する種が含まれている。ただし、全種ともその生息環境は著しく悪化しているため今後の生息状況については予断を許さない。和田ら（1996）によるランク区分では絶滅寸前が0種、危険18種、希少2種、リスト外11種である。

DDには3種が選定された。そのうちの2種はごく最近新種記載されたか和名だけが提唱された未記載種で、かつ採集が困難な微小種である。今後の調査によってはEXやCRに選定される可能性がある。和田ら（1996）によるランク区分では絶滅寸前が0種、危険2種、希少1種、リスト外0種である。

内湾産貝類については、レッドリストに掲載される種の選定、ランク区分、愛知県に生息している全種のリストの作成を含めて、今後とも研究の余地が大きい。ただし、前述の通り愛知県の豊かな貝類相をはぐくんできた三河湾、伊勢湾共にその環境の改善は進んでいない。水域の環境の生物学的な指標となる底生動物相の中で最も多種を含む貝類（軟体動物）の現在の生息状況は危機的状況で著しく多様性を失っている。今後更に研究が進めば、レッドリストに登録される種がさらに増えると考えられる。

【参考：除外種リスト】

「レッドデータブックあいち2002動物編」掲載種のうち、今回の見直しによってリストから除外された種とその理由は以下のとおりである。

除外種

No.	目名	科名	和名	見直し前 県ランク	除外理由
1.	マイマイ(柄眼)	オナジマイマイ	キイオオベソマイマイ	DD	評価対象外とした(フチマルオオベソマイマイの亜種とした)

愛知県貝類レッドリスト

目及び科の範囲、名称、配列は、原則として以下の文献に準拠した。また、各種の生息環境区分（陸：陸産貝類、淡水：淡水産貝類、内湾：内湾産貝類）を示した。

- ・陸産貝類・淡水産貝類
「日本産野生生物目録一本邦産野生動植物の種の現状－（無脊椎動物編Ⅲ）」（財団法人自然環境研究センター,1998）
- ・内湾産貝類（海産貝類）
「Catalogue and bibliography of the marine shell-bearing mollusca of Japan」(S.Higo et al.,1999)
「日本近海産貝類図鑑」（東海大学出版会,2000）

絶滅(EX)

No.	区分	目名	科名	和名	学名	環境省
1	淡水	モノアラガイ (基眼)	ヒラマキガイ	カワネジガイ	<i>Camptoceras hirasei</i> Walker	CR+EN
2	淡水	モノアラガイ (基眼)	ヒラマキガイ	ヒダリマキモノアラガイ	<i>Culminella prashadi</i> (Clench)	CR+EN
3	淡水	インガイ	インガイ	ヨコハマシジラガイ	<i>Inversium yokohamensis</i> (Ihering)	NT
4	淡水	インガイ	インガイ	オバエボシ	<i>Inversidens brandti</i> (Kobelt)	VU
5	淡水	インガイ	インガイ	カタハガイ	<i>Pseudodon omiensis</i> (Heimburg)	VU
6	内湾	盤足	トゲカワニナ	タケノコカワニナ	<i>Stenomelania rufescens</i> (Martens)	VU
7	内湾	フネガイ	フネガイ	ハイガイ	<i>Tegillarca granosa</i> (Linnaeus)	
8	内湾	マルスダレガイ	ニッコウガイ	イチョウシラトリ	<i>Tellina (Serratina) capsoides</i> Lamarck	
9	内湾	マルスダレガイ	ナタマメガイ	アゲマキガイ	<i>Sinonovacula constricta</i> (Lamarck)	

絶滅危惧 A類 (CR)

No.	区分	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	陸	マイマイ(柄眼)	キセルガイ	ホウライジギセル	<i>Mesophaedusa ikenoi</i> Minato	CR+EN
2	陸	マイマイ(柄眼)	オナジマイマイ	オモイガケナマイマイ	<i>Aegista inexpectata</i> Kuroda et Minato	CR+EN
3	陸	マイマイ(柄眼)	オナジマイマイ	ミカワマイマイ	<i>Euhadra scaevola mikawa</i> Amano	VU
4	淡水	イシガイ	イシガイ	イシガイ	<i>Unio douglasiae nipponensis</i> (Martens)	
5	淡水	イシガイ	イシガイ	マツカサガイ	<i>Inversidens japonensis</i> (Lea)	NT
6	淡水	イシガイ	イシガイ	トンガリササノハガイ	<i>Lanceolaria grayana cuspidata</i> Kira	NT
7	内湾	古腹足	ニシキウズ	イボキサゴ	<i>Umbonium (Suchium) moniliferum</i> (Lamarck)	
8	内湾	アマオブネガイ	アマオブネガイ	ウミヒメカノコ	<i>Smaragdia</i> sp.	
9	内湾	盤足	リソツボ	サナギモツボ	<i>Eufenella pupoides</i> (A.Adams)	
10	内湾	盤足	リソツボ	スジウネリチョウジガイ	<i>Rissoina (Rissoina) constulata</i> Dunker	
11	内湾	盤足	リソツボ	ゴマツボ	<i>Stosicia annulata</i> (Dunker)	
12	内湾	盤足	イソコハクガイ	アラウズマキ	<i>Pygmaeorata duplicata</i> (Lischke)	
13	内湾	盤足	イソコハクガイ	イソマイマイ	<i>Tornus planus</i> (A.Adams)	
14	内湾	盤足	イソコハクガイ	シラギク	<i>Pseudoliotia pulchella</i> (Dunker)	
15	内湾	盤足	シロネズミガイ	ハツカネズミ	<i>Fossarus tornatilis</i> (Gould)	
16	内湾	盤足	タマガイ	アダムスタマガイ	<i>Cryptopnatica adamsiana</i> (Dunker)	
17	内湾	翼舌	ハナゴウナ	ヒモイカリナマコツマミガイ	<i>Hypermastus lacteus</i> (A.Adams)	
18	内湾	新腹足	アッキガイ	ヒラドサンゴヤドリ	<i>Coralliophila jeffreysi</i> Smith	
19	内湾	新腹足	フトコロガイ	マルテンスマツムシ	<i>Mitrella martensi</i> (Lischke)	
20	内湾	新腹足	エゾバイ	オガイ	<i>Cantharus cecillei</i> (Philippi)	
21	内湾	新腹足	タケノコガイ	イボヒメトクサ	<i>Granuliterebra bathyrraphe</i> (Smith)	
22	内湾	異旋	タクミニナ	タクミニナ	<i>Eucharilda sinensis</i> (Fischer)	
23	内湾	異旋	イソチドリガイ	イソチドリ	<i>Amathina tricarinata</i> (Linnaeus)	
24	内湾	異旋	イソチドリガイ	マキノガイ	<i>Leucotina diana</i> (A.Adams)	
25	内湾	アメフラシ	ウツセミガイ	ウツセミガイ	<i>Akera soluta</i> Gmelin	
26	内湾	モノアラガイ (基眼)	オカミミガイ	ナラビオカミミガイ	<i>Auriculastra duplicata</i> (Pfeiffer)	VU
27	内湾	モノアラガイ (基眼)	オカミミガイ	キヌカツギハマシイノミガイ	<i>Melampus (Melampus) sincaporensis</i> Pfeiffer	VU
28	内湾	フネガイ	シコロエガイ	シコロエガイ	<i>Porterius dalli</i> (Smith)	
29	内湾	イガイ	イガイ	ヤマホトトギス	<i>Musculus japonica</i> (Dunker)	
30	内湾	イガイ	イガイ	ツヤガラス	<i>Modiolus elongatus</i> (Swainson)	
31	内湾	ウグイスガイ	ハボウキガイ	ハボウキガイ	<i>Pinna bicolor</i> Gmelin	
32	内湾	カキ	イタボガキ	イタボガキ	<i>Ostrea denselamellosa</i> Lischke	
33	内湾	マルスダレガイ	ツキガイ	イセシラガイ	<i>Anodontia stearnsiana</i> (Oyama)	
34	内湾	マルスダレガイ	イソカゼガイ	イソカゼガイ	<i>Basterotia gouldi</i> (A.Adams)	
35	内湾	マルスダレガイ	バカガイ	ヤチヨノハナガイ	<i>Raeta (Raetina) pellicula</i> (Reeve)	
36	内湾	マルスダレガイ	バカガイ	ユキガイ	<i>Meropesta nicobarica</i> (Gmelin)	
37	内湾	マルスダレガイ	バカガイ	アリソガイ	<i>Coelomactra antiquata</i> (Spengler)	
38	内湾	マルスダレガイ	ニッコウガイ	オオモモノハナ	<i>Macoma praetexta</i> (Martens)	
39	内湾	マルスダレガイ	ニッコウガイ	アワジチガイ	<i>Macoma candida</i> (Lamarck)	
40	内湾	マルスダレガイ	ニッコウガイ	アオサギガイ	<i>Psammotreta (Pseudomitis) praeupta</i> (Salisbury)	
41	内湾	マルスダレガイ	シオサザナミ	オチバガイ	<i>Psammotaea virescens</i> (Deshayes)	
42	内湾	マルスダレガイ	シオサザナミ	ハザクラ	<i>Psammotaea minor</i> (Deshayes)	
43	内湾	マルスダレガイ	シオサザナミ	ムラサキガイ	<i>Soletellina diphos</i> (Linnaeus)	
44	内湾	マルスダレガイ	シオサザナミ	フジナミガイ	<i>Soletellina boeddinghausi</i> Lischke	
45	内湾	マルスダレガイ	マテガイ	ダンダラマテガイ	<i>Solen kurodai</i> Habe	
46	内湾	マルスダレガイ	マテガイ	バラフマテ	<i>Solen roseomaculatus</i> Pilsbry	
47	内湾	マルスダレガイ	ハナグモリガイ	ハナグモリガイ	<i>Glauconome chinensis</i> Gray	VU
48	内湾	マルスダレガイ	マルスダレガイ	シオヤガイ	<i>Anomalocardia squamosa</i> (Linnaeus)	
49	内湾	マルスダレガイ	マルスダレガイ	ウラカガミ	<i>Dosinorbis (Phacosoma) penicillata</i> (Reeve)	
50	内湾	マルスダレガイ	マルスダレガイ	ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i> (Roding)	
51	内湾	オオノガイ	オオノガイ	ヒメマスオガイ	<i>Cryptomya busoensis</i> Yokoyama	
52	内湾	オオノガイ	オオノガイ	クシケマスオガイ	<i>Venatomya truncata</i> (Gould)	
53	内湾	オオノガイ	ニオガイ	ウミタケ	<i>Barnea (Umitakea) dilatata</i> (Souleyet)	

絶滅危惧 B類 (EN)

No.	区分	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	陸	マイマイ(柄眼)	キセルガイ	トカラコギセル	<i>Proreinia eastlakeana vaga</i> (Pilsbry)	CR+EN
2	陸	マイマイ(柄眼)	キセルガイ	ヒロクチコギセル	<i>Reinia variegata</i> (A. Adams)	CR+EN
3	内湾	盤足	ウミナ	イボウミナ	<i>Batillaria zonalis</i> (Bruguere)	VU
4	内湾	盤足	フトヘナタリ	カワアイ	<i>Cerithidea (Cerithideopsis) djadjariensis</i> (K.Martin)	VU
5	内湾	新腹足	コロモガイ	オリイレボラ	<i>Trigonostoma scalariformis</i> (Lamarck)	
6	内湾	頭楯	オオシイノミガイ	オオシイノミガイ	<i>Acteon sieboldi</i> (Reeve)	
7	内湾	モノアラガイ (基眼)	オカミミガイ	オカミミガイ	<i>Ellobium chinense</i> (Pfeiffer)	VU
8	内湾	マルスダレガイ	ニッコウガイ	サビシラトリ	<i>Macoma contabulata</i> (Deshayes)	

絶滅危惧 類 (VU)

No.	区分	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	陸	アマオブネガイ	ゴマオカタニシ	ベニゴマオカタニシ	<i>Georissa shikokuensis</i> Amano	VU
2	陸	マイマイ(柄眼)	クチミゾガイ	ナニワクチミゾガイ	<i>Eostrobilops nipponica reikoe</i>	NT
					Matsumura et Minato	
3	陸	マイマイ(柄眼)	キセルガイ	クビナガギセル	<i>Pinguiphaedusa kubinaga</i> (Kuroda)	VU
4	陸	マイマイ(柄眼)	キセルガイ	ホソヒメギセル	<i>Tryannophaedusa gracilispira</i> (Moellendorff)	VU
5	陸	マイマイ(柄眼)	オナジマイマイ	ミヤマヒダリマキマイマイ (ヒラヒダリマキマイマイ)	<i>Euhadra scaevola scaevola</i> (Martens) (<i>E. s. interioris</i> Pilsbry)	VU
6	淡水	盤足	ミズゴマツボ	ミズゴマツボ	<i>Stenothyra japonica</i> Kuroda	NT
7	淡水	マルスダレガイ	シジミ	マシジミ	<i>Corbicula leana</i> Prime	NT
8	内湾	アマオブネガイ	アマオブネガイ	ヒロクチカノコ	<i>Neritina (Dostia) violacea</i> (Gmelin)	VU
9	内湾	アマオブネガイ	ユキスズメガイ	ヒナユキスズメ (未記載種)	<i>Phenacolepas</i> sp.	NT
10	内湾	盤足	オニノツノガイ	カニモリ	<i>Rhinoclavis (Proclava) kochi</i> (Philippi)	
11	内湾	盤足	ワカウラツボ	ワカウラツボ	<i>Iravadia (Fairbankia) sakaguchii</i> (Kuroda et Habe)	VU
12	内湾	盤足	カワザンショウ ガイ	ヨシダカワザンショウ ガイ	<i>Angustassiminea yoshidayukioi</i> (Kuroda)	VU
13	内湾	盤足	クビキレガイ	ヤマトクビキレガイ	<i>Truncatella pfeifferi</i> Martens	
14	内湾	盤足	タマガイ	ネコガイ	<i>Eunoticina papilla</i> (Gmelin)	
15	内湾	翼舌	イトカケガイ	オダマキガイ	<i>Depressiscalia aurita</i> (Sowerby)	
16	内湾	新腹足	フトコロガイ	スミスシラゲガイ	<i>Mitrella yabei</i> (Nomura)	
17	内湾	新腹足	オリレヨウバイ	ムシロガイ	<i>Niotha livescens</i> (Philippi)	
18	内湾	新腹足	オリレヨウバイ	キヌボラ	<i>Reticunassa japonica</i> A.Adams	
19	内湾	新腹足	オリレヨウバイ	ウネムシロ	<i>Reticunassa hiradoensis</i> (Pilsbry)	
20	内湾	新腹足	オリレヨウバイ	クロスジムシロの近似種	<i>Reticunassa</i> sp.	
21	内湾	新腹足	エゾバイ	バイ	<i>Babylonia japonica</i> (Reeve)	
22	内湾	異旋	トウガタガイ	ヌカルミクチキレ (未記載種)	Gen.et sp.	
23	内湾	頭楯	オオシノミガイ	コシノミガイ	<i>Pupa strigosa</i> (Gould)	
24	内湾	モノアラガイ (基眼)	オカミミガイ	ウスコミミガイ	<i>Laemodonta exaratooides</i> Kawabe	NT
25	内湾	モノアラガイ (基眼)	オカミミガイ	ナギサノシタタリガイ	<i>Microtralia acteocinooides</i> Kuroda et Habe	
26	内湾	マルスダレガイ	チリハギ	スジホシムシヤドリガイ	<i>Nipponomysella subtruncata</i> (Yokoyama)	
27	内湾	マルスダレガイ	ニッコウガイ	ベニガイ	<i>Pharaonella sieboldii</i> (Deshayes)	
28	内湾	マルスダレガイ	マルスダレガイ	イヨスダレガイ	<i>Paphia (Neotapes) undulata</i> (Born)	
29	内湾	ウミタケモドキ	オキナガイ	オキナガイ属の一種	<i>Laternula</i> sp.	

準絶滅危惧 (NT)

No.	区分	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	陸	アマオブネガイ	ゴマオカタニシ	ゴマオカタニシ	<i>Georissa japonica</i> Pilsbry	NT
2	陸	盤足	ヤマタニシ	トウカイヤマトガイ	<i>Japonia katorii</i> Minato	VU
3	陸	盤足	カワザンショウ ガイ	ホラアナゴマオカチグサ ガイ	<i>Cavernacmella kuzuensis</i> (Suzuki)	CR+EN
4	陸	モノアラガイ (基眼)	オカミミガイ	ケシガイ	<i>Carychium pessimum</i> Pilabry	NT
5	陸	マイマイ(柄眼)	オカモノアラ ガイ	ナガオカモノアラガイ	<i>Oxyloma hirasei</i> (Pilsbry)	NT
6	陸	マイマイ(柄眼)	キセルガイ	ミカワギセル	<i>Mesophaedusa hickonis mikawa</i> (Pilsbry)	NT
7	陸	マイマイ(柄眼)	キセルガイ	オクガタギセル	<i>Mundiphaedusa dorcas</i> (Pilsbry)	NT
8	陸	マイマイ(柄眼)	キセルガイ	トノサマギセル	<i>Mundiphaedusa ducalis</i> (Kobelt)	NT
9	陸	マイマイ(柄眼)	キセルガイ	ハチノコギセル	<i>Mundiphaedusa kawasakii</i> (Kuroda)	NT
10	陸	マイマイ(柄眼)	ベッコウマイ マイ	カサネシタラガイ	<i>Sitalina insignis</i> (Pilsbry et Hirase)	NT
11	陸	マイマイ(柄眼)	オナジマイマイ	クチマガリマイマイ	<i>Aegista cavicollis</i> (Pilsbry)	NT
12	陸	マイマイ(柄眼)	オナジマイマイ	フチマルオオベツマイマ イ	<i>Aegista tumida</i> (Gude)	NT
13	陸	マイマイ(柄眼)	オナジマイマイ	イシマキシロマイマイ	<i>Trishoplita calcicola</i> Kuroda, in Masuda et Habe	NT
14	陸	マイマイ(柄眼)	オナジマイマイ	ヒルゲンドルフマイマイ	<i>Trishoplita hilgendorffi</i> (Kobelt)	NT
15	淡水	盤足	タニシ	マルタニシ	<i>Cipangopaludina chinensis laeta</i> (v. Martens)	NT
16	淡水	盤足	カワニナ	クロダカワニナ	<i>Semisulcospira kurodai</i> Kajiyama et Habe	NT
17	淡水	モノアラガイ (基眼)	モノアラガイ	モノアラガイ	<i>Radix auricularia japonica</i> Jay	NT
18	淡水	イシガイ	イシガイ	ドブガイ	<i>Anodonta woodiana</i> (Lea)	
19	内湾	盤足	ウミニナ	ウミニナ	<i>Batillaria multififormis</i> (Lischke)	NT
20	内湾	盤足	フトヘナタリ	フトヘナタリ	<i>Cerithidea (Cerithidea) rhizophorarum</i> A.Adams	NT
21	内湾	盤足	フトヘナタリ	ヘナタリ	<i>Cerithidea (Cerithideopsis) cingulata</i> (Gmelin)	NT
22	内湾	盤足	ワカウラツボ	カワグチツボ	<i>Iravadia (Fluviocingula) elegantula</i> (A.Adams)	NT
23	内湾	盤足	カワザンショウ ガイ	クリイロカワザンショウ ガイ	<i>Angustassiminea castanea</i> (Westerlund)	

24	内湾	盤足	カワザンシヨウ ガイ	ムシヤドリカワザンシヨウ	<i>Assimineea parasitologica</i> Kuroda	NT
25	内湾	盤足	カワザンシヨウ ガイ	ツブカワザンシヨウ	<i>Assimineea estuarina</i> Habe	
26	内湾	盤足	ミズゴマツボ	エドガワミズゴマツボ	<i>Stenothyra edogawaensis</i> (Yokoyama)	NT
27	内湾	盤足	トウカムリ	カズラガイ	<i>Phalium variegatum</i> Perry	
28	内湾	翼舌	イトカケガイ	クリンイトカケ	<i>Amaea thielei</i> (de Boury)	
29	内湾	翼舌	イトカケガイ	セキモリ	<i>Papyriscala yokoyamai</i> (Suzuki et Ichikawa)	
30	内湾	翼舌	イトカケガイ	シノブガイ	<i>Laeviscalia angusta</i> (Dunker)	
31	内湾	翼舌	イトカケガイ	クレハガイ	<i>Papyriscala latifasciata</i> (Sowerby)	
32	内湾	新腹足	エゾバイ	モスソガイ	<i>Volutharpa ampullacea perryi</i> (Jay)	
33	内湾	異旋	トウガタガイ	カキウラクチキレモドキ	<i>Brachystomia bipyramidata</i> (Nomura)	
34	内湾	頭楯	カノコキセワタ	カノコキセワタガイ	<i>Agalaja gigliolii</i> (Tapparone-Canefri)	
35	内湾	アメフラシ	アメフラシ	ウミナメクジ	<i>Petalifera punctulata</i> (Tapparone-Canefri)	
36	内湾	キヌタレガイ	キヌタレガイ	キヌタレガイ	<i>Petrasma pusilla</i> (Gould)	
37	内湾	ウグイスガイ	ハボウキガイ	タイラギ	<i>Atrina pictinata</i> (Linnaeus)	
38	内湾	マルスダレガイ	ツキガイ	ツキガイモドキ	<i>Lucinoma annulatum</i> (Reeve)	
39	内湾	マルスダレガイ	バカガイ	ミルクイ	<i>Tresus keenae</i> (Kuroda et Habe)	
40	内湾	マルスダレガイ	ニッコウガイ	ユウシオガイ	<i>Moerella rutila</i> (Dunker)	
41	内湾	マルスダレガイ	ニッコウガイ	サクラガイ	<i>Nitidotellina hokkaidoensis</i> (Habe)	
42	内湾	マルスダレガイ	ニッコウガイ	ウズザクラ	<i>Nitidotellina minuta</i> (Lischke)	
43	内湾	マルスダレガイ	ニッコウガイ	サギガイ	<i>Macoma sector</i> Oyama	
44	内湾	マルスダレガイ	マテガイ	マテガイ	<i>Solen strictus</i> Gould	
45	内湾	マルスダレガイ	マルスダレガイ	フスマガイ	<i>Clementia vatheleti</i> Mabilie	
46	内湾	オオノガイ	オオノガイ	オオノガイ	<i>Mya (Arenoma) oonogai</i> Makiyama	
47	内湾	オオノガイ	クチベニガイ	クチベニガイ	<i>Solidicorbula erythrodon</i> (Lamarck)	
48	内湾	ウミタケモドキ	オキナガイ	オキナガイ	<i>Laternula anatina</i> (Linnaeus)	
49	内湾	ウミタケモドキ	オキナガイ	ソトオリガイ	<i>Laternula marilina</i> (Reeve)	

情報不足 (DD)

No.	区分	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	陸	マイマイ(柄眼)	マキゾメガイ	ヒラドマルナタネ	<i>Pupisoma harpula</i> Reinhardt	
2	淡水	イシガイ	イシガイ	カラスガイ	<i>Cristaria plicata</i> (Leach)	NT
3	淡水	マルスダレガイ	マメシジミ	ニホンマメシジミ	<i>Pisidium nipponense</i> Kuroda	
4	内湾	アマオブネガイ	アマオブネガイ	ヒメカノコ	<i>Clithon (Pictoneritina) oualaniensis</i> (Lesson)	
5	内湾	盤足	サザナミツボ	サザナミツボ	<i>Elachisime zizac</i> Fukuda et Ekawa	
6	内湾	盤足	カワザンシヨウ ガイ	カハタレカワザンシヨウ (未記載種)	Gen.et sp.	

愛知県貝類レッドリストの変更点

本書に掲載した貝類レッドリスト（見直し後）と「レッドデータブックあいち 2002 動物編」に掲載した貝類レッドリスト（見直し前）の新旧対照表を以下に示した。

		見直し前のランク								種数	
見直し後のランク	EX	CR	EN	VU	NT	DD	LP	リスト外*1			
EX	カワネジガイ ヒダリマキモノアラガイ ヨコハマシジラガイ オハエボシ カタハガイ タケノコカワニナ ハイガイ イチョウシラトリ アゲマキガイ									9	
CR		ホウライシギセル オモイガケナマイマイ ミカワマイマイ イシガイ マツカサガイ トシガリササノハガイ イボキヤコ ウミヒメカノコ ササギモツボ スシウネリチヨウジガイ ゴマツボ アラウスマキ イソマイマイ シラギク ハツカネズミ アダムスタマガイ ヒラサンゴヤドリ マルテンスマツムシ オガイ イボヒトクサ タクミナ イソチドリ マキモノガイ ウツセミガイ ナラビオカミガイ キヌカツギハマシイノミガイ シコロエガイ ヤマボトギス ツヤガラス ハボウキガイ イタボキ イセウラガイ イソカゼガイ ヤチノハナガイ ユキガイ アリソガイ オオモモノハナ アワジチガイ アオサギガイ オチハガイ ハザクラ ムラサキガイ アジナミガイ ハラフマテ ハナダモリガイ シオヤガイ ウラカガミ ハマグリ ヒメマスオガイ クシケマスオガイ ウミカケ					ダンダラマテガイ		ヒモイカリナマコツマミガイ	53	
EN		オリレボラ	トカラコギセル ヒロクチコギセル イボウミナ カワアイ オオシイノミガイ オカミガイ サビシラトリ							8	
VU		カニモリ ムシロガイ バイ		ミヤマヒダリマキマイマイ ヒロクチカノコ ワカウラツボ ヨシダカワザンショウ ヤマトクヒキレガイ ネコガイ オダマキガイ スミスシラガイ キヌボラ コシイノミガイ ベニガイ イヨスタレガイ オキナガイ属の一種★2	ナニワクチミノガイ クビナガキセル ホソヒメギセル	ヒナユキスズメ(未記載種) スカルミクチキレ(未記載種) ウスコミガイ ナギサノシタタリガイ		ベニゴマオカタニシ ミスゴマツボ マシジミ ウネムシロ クロスジムシロの近似種★1 スジホシムシヤドリガイ	29		
NT					トウカイヤマトガイ ホラアナゴマオカチグサ ナガホカモノアラガイ オクガタキセル トノサマキセル ハチノヒキセル カサネシタラガイ クチマカリマイマイ フチマルオオベンマイマイ イシマキシロマイマイ ヒルゲンドルフマイマイ マルタニシ クロガワニナ モノアラガイ ドブガイ ウミナ ワトヘナタリ ベナタリ カワグチツボ クリロカワザンショウ ムシヤドリカワザンショウ ツブカワザンショウ エドガワミズゴマツボ カズラガイ クリントカケ セキモリ シブガイ クレハガイ モスガイ カキウラクチキレモドキ カノキセワタガイ ウミナメクジ キヌタレガイ タイラギ ツキガイモドキ ミルクイ ユウシオガイ サクラガイ ウスギクラ ササギガイ マテガイ フスマガイ オオノガイ クチベニガイ オキナガイ ソトオリガイ					ゴマオカタニシ ケシガイ ミカワギセル	49
DD						ヒラドマルナタネ カラスガイ ヒメカノコ ササナミツボ カハタレカワザンショウ(未記載種)		ニホンマシジミ	6		
LP									0		
リスト外*2								キイオオベンマイマイ★3	1		
種数	9	55	7	13	49	11	0	11	155		

*1「リスト外」:「レッドデータブックあいち2002動物編」において評価対象とされなかった種。

*2「ランク外」:「レッドデータブックあいち2002動物編」掲載種のうち、今回の見直しによって、EX、CR、EN、VU、NT、DD、LPのいずれのランクにも該当しないと評価された種。または、評価の対象外とされた種。

★1:学名 *Reticunassa* sp.

★2:オオキナガイからオキナガイ属の一種(*Latunella* sp.)に種名、学名変更

★3:評価対象外とした(フチマルオオベンマイマイの亜種とした)